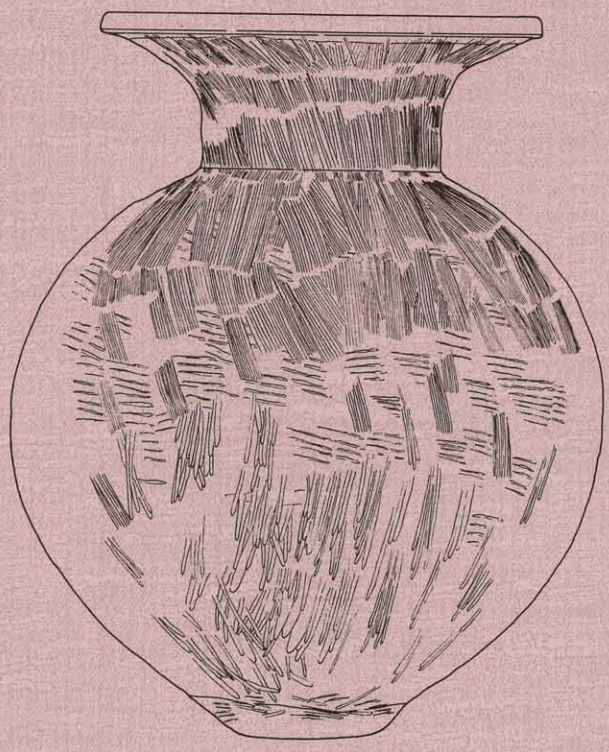
佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

岩井口遺跡
二ノ部遺跡・城跡

佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書



1995.3

高知県佐川町教育委員会

岩井口遺跡
二ノ部遺跡・城跡

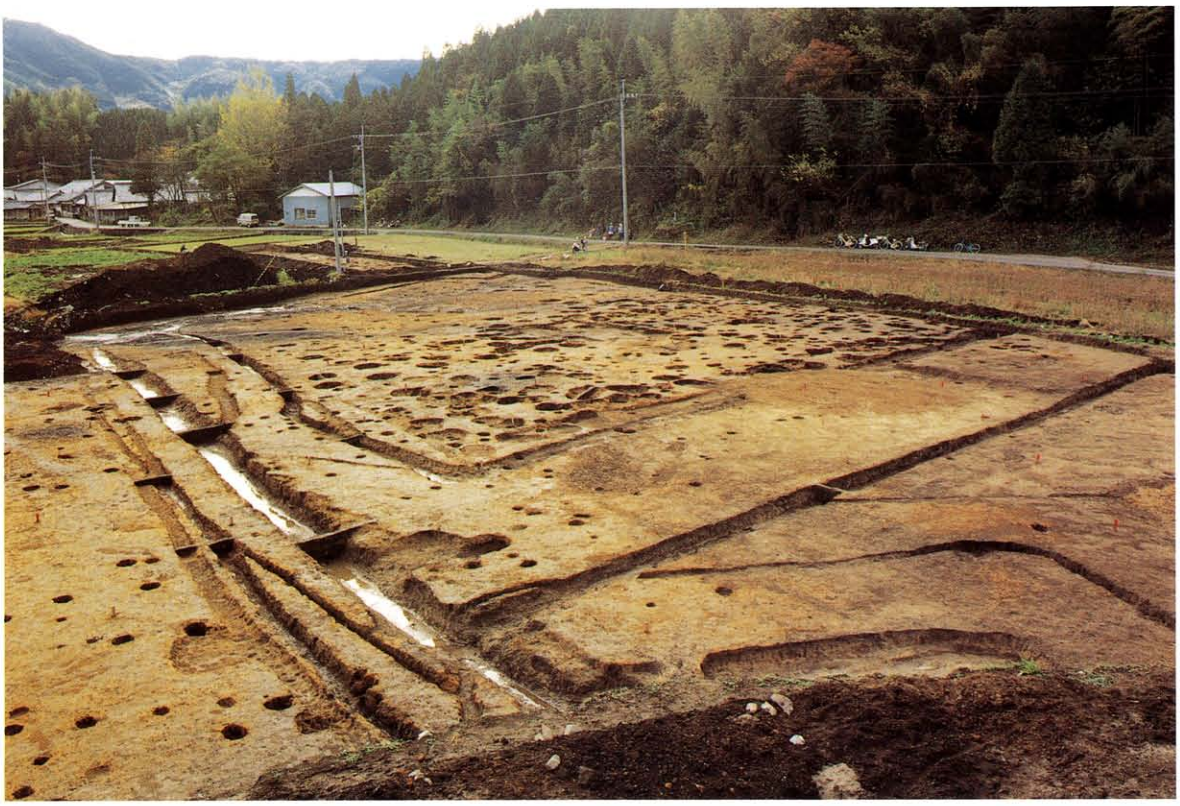
佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書

1995.3

高知県佐川町教育委員会

E区—2

二ノ部遺跡出土　弥生土器（壷）



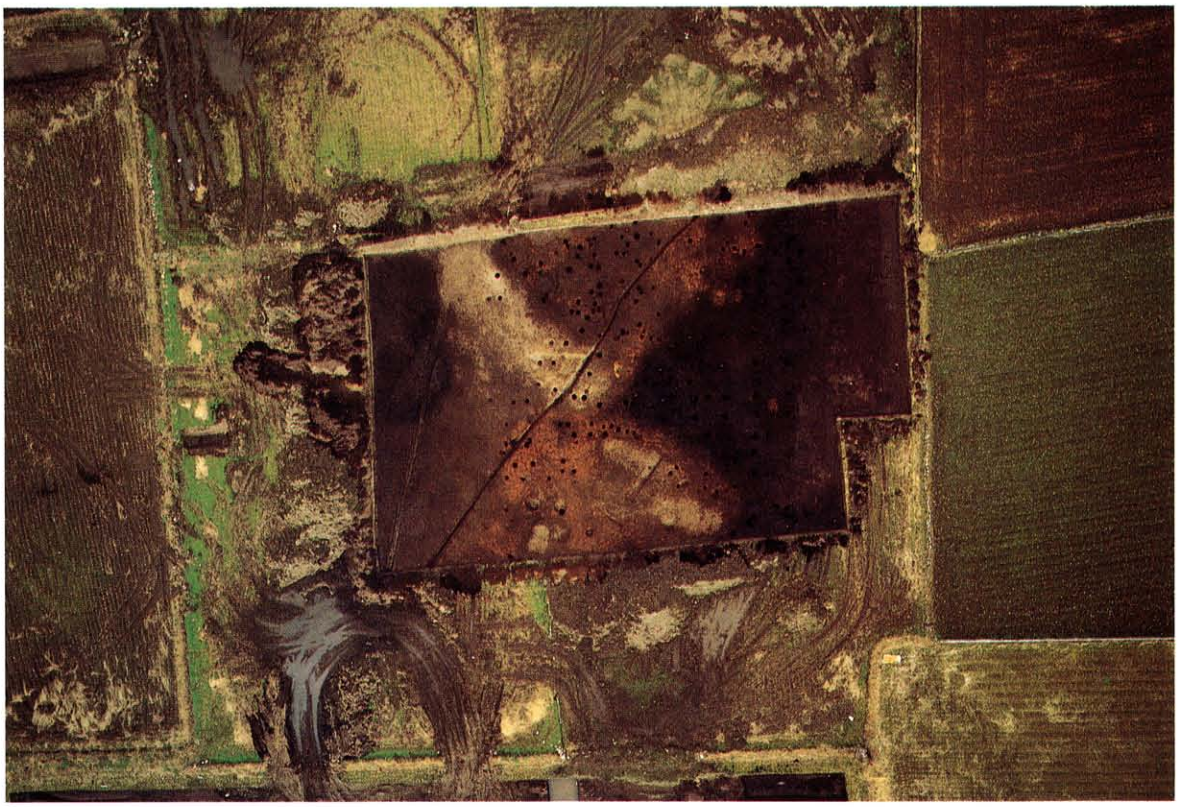
岩井口遺跡　館跡完掘状態（北西より）

岩井口遺跡　遺構検出状態（西より）

二ノ部城跡（上空より）

二ノ部遺跡　B区全景（上空より）

二ノ部遺跡　C区全景（上空より）



二ノ部遺跡　E区全景（上空より）

二ノ部遺跡出土　弥生土器（壷）

二ノ部遺跡出土　弥生土器（甕）

序

文教の町として知られる佐川町には国の史跡である不動ガ岩屋洞穴遺跡を始めとして数多くの遺跡が分布しており，高岡郡下では土佐市に次ぐ遺跡数を誇っています。今回の発掘調査は，佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴うもので，平成4年度に岩井口遺跡，平成5年度に二ノ部遺跡及び二ノ部城跡の発掘調査を実施いたしました。

この度，その結果が報告書として刊行することになりました。

埋蔵文化財は，古代住民の生活様式を解明するだけではなく，未来へ伝えるべき貴重な文化遺産でもあります。しかし，近年の各種の開発事業に伴い，一朝にして貴重な遺跡が破壊される恐れがあり，憂慮すべき事態がしばしば発生していますが，今回の調査にあたっては開発当局の深いご理解により記録保存のための発掘調査及び整理作業を終えることができました。

本書の刊行により，歴史ある佐川町の貴重な資料としてまた県内はもとより広く埋蔵文化財の研究の一助になれば幸甚の至りです。

終わりに，本調査を担当していただいた高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久氏を始め，ご指導いただいた高知県教育委員会，（財）高知県文化財団，そして文化財への暖いご理解とご協力をいただいた須崎耕地事務所，佐川町斗賀野土地改良区事務所，調査にご協力下さった地元関係者及び地域住民の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

佐川町教育委員会

教育長　國貞富滋

例言

1. 本書は，佐川町が高知県の委託を受け平成4年度に実施した岩井口遺跡と平成5年度に実施した二ノ部遺跡と二ノ部城跡の発掘調査報告書である。平成4・5年度とも地元負担分については国庫補助を受けて行った。
2. 発掘調査は，高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと佐川町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は，佐川町教育委員会の依頼を受け，高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久が担当し，同センター調査員山崎正明，同センター調査補助員竹村三菜（平成4年度）の補助を得た。調査の事務，総括は佐川町教育委員会社会教育係が当たり，同係長山本静男が行った。
4. 本書の執筆，写真撮影，編集等は廣田佳久が行った。
5. 遺構については，ST（竪穴住居跡又は竪穴状遺構），SB（掘立柱建物跡），SA（塀跡又は柵列跡），SK（土坑），SD（溝跡），SE（井戸跡），P（ピット），SX（性格不明遺構）で表示し，各遺跡，各地区ごとの通し番号である。なお，遺構番号は各遺構とも三桁で表示し，岩井口遺跡と二ノ部遺跡の双方A区が101～，B区が201～，C区が301～，D区が401～，E区が501～それぞれ始めている。また，掲載している遺構の平面図の縮尺は原則として竪穴式住居跡などの比較的規模の大きなものについては縮尺1/80，土坑など小規模な遺構については縮尺1/60，各遺構の遺物出土状態については縮尺1/40で行っており，方位（N）は真北である。なお，掘立柱建物跡や塀跡及び柵列跡などの柱穴で構成された遺構は縮尺1/200で模式図を掲載し，確認した柱穴は●，未検出の柱穴は○で表記している。
6. 遺物については，原則として弥生土器が縮尺1/4，土師質土器，瓦質土器，中世陶磁器，輸入陶磁器，土製品，金属製品，石製品が縮尺1/3，小形精製土器（ミニチュア土器），小形粗製土器（手づくね土器），勾玉が縮尺1/2，柱根及び木製品が縮尺1/6で実測図を掲載している。ただし，中には縮尺を変更しているものもあるが，それぞれに縮尺を記している。実測図の番号は，各遺跡，各地区ごとの通し番号で，図版の番号と一致している。
7. 発掘調査に当たっては，岩井口遺跡と二ノ部遺跡・城跡それぞれ真北を基準とする任意のトラバース測量を実施し，測量成果に基づく基準点を使用した。標高は，工事用の水準点を基準として実施した水準測量の成果を使用し，海抜高を示す。
8. 調査に当たっては，高知県須崎耕地事務所，佐川町斗賀野（とかの）土地改良区事務所，高知県教育委員会，佐川町文化財保護審議会委員の方々並びに地元関係者の方々に全面的協力をいただいた。また，下記の方々に洗浄，注記，接合，復元，遺物の実測，トレースなど整理作業で協力していただき，同センターの諸氏からは貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

中西純子　西内宏美　小松経子　矢野雅　井上博恵　前田玲子　田村美鈴

9. 瀬戸・美濃系については，愛知県陶磁資料館学芸課中野泰裕主任学芸員，財団法人瀬戸市埋蔵文化センター山下峰司氏，同松澤和人氏から貴重な助言をいただいた。記して謝意を表する。

10. 出土遺物は，平成4年度の岩井口遺跡が「92—24SI」，平成5年度の二ノ部城跡が「93—11NC」，平成5年度の二ノ部遺跡が「93—12SN」と注記し，佐川町教育委員会において保管している。

目次

第Ⅰ章　序章

1. はじめに ……1
2. 確認調査 ……1
（1）調査地区の状況 ……1
（2）遺跡の概要 ……3
3. 遺跡の地理的，歴史的環境 ……4
（1）地理的環境 ……4
（2）歴史的環境 ……5

第Ⅱ章　岩井口遺跡

1. 調査の契機と経過 ……9
（1）契機と経過 ……9
（2）調査日誌抄 ……9
2. 調査の概要 ……10
（1）調査の方法 ……10
（2）調査の概要 ……11
3. 遺構と遺物 ……15
（1）A区 ……15
（2）B区 ……43
（3）C区 ……46
（4）D区 ……49
（5）E区 ……52

第Ⅲ章　二ノ部遺跡

1. 調査の契機と経過 ……55
（1）契機と経過 ……55
（2）調査日誌抄 ……55
2. 調査の概要 ……57
（1）調査の方法 ……57
（2）調査の概要 ……59
3. 遺構と遺物 ……66
（1）A区 ……66
（2）B区 ……69

(3) C区 ……101
(4) D区 ……108
(5) E区 ……110

第Ⅳ章　二ノ部城跡 ……119
1. 調査の契機と経過 ……119
(1) 契機と経過 ……119
(2) 調査日誌抄 ……119
2. 調査の概要 ……119
(1) 調査の方法 ……119
(2) 調査の概要 ……120
(3) 二ノ部城跡 ……122

第Ⅴ章　考察 ……123
1. 岩井口遺跡について ……123
2. 二ノ部遺跡について ……126
3. 二ノ部城跡について ……130
4. 結語 ……130

挿図

Fig. 1　埋蔵文化財確認調査対象地区
Fig. 2　佐川町位置図
Fig. 3　斗賀野地区周辺の遺跡分布図
Fig. 4　現地説明会
Fig. 5　遺跡の範囲と調査対象区域図
Fig. 6　岩井口遺跡トラバースポイント配置図
Fig. 7　調査区全体図
Fig. 8　A～G・Jトレンチ土層柱状図
Fig. 9　H・Iトレンチ土層柱状図
Fig. 10　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図
Fig. 11　ST—101, SD—101
Fig. 12　弥生時代遺構出土遺物実測図
Fig. 13　SK—101
Fig. 14　P—101遺物出土状態
Fig. 15　SB—101
Fig. 16　SB—102
Fig. 17　SB—103
Fig. 18　SB—104
Fig. 19　SB—105
Fig. 20　SB—106
Fig. 21　SB—107
Fig. 22　SB—108
Fig. 23　SB—109
Fig. 24　SB—110
Fig. 25　SB—111
Fig. 26　SB—112
Fig. 27　SB—113
Fig. 28　SB—114

Fig. 29　SB—115
Fig. 30　SB—116
Fig. 31　SB—117
Fig. 32　SB—118
Fig. 33　SB—119
Fig. 34　SB—120
Fig. 35　SB—121
Fig. 36　SB—122
Fig. 37　SB—123
Fig. 38　SB—124
Fig. 39　SB—125
Fig. 40　掘立柱建物跡出土遺物実測図
Fig. 41　塀跡出土遺物実測図
Fig. 42　SK—102・106・107
Fig. 43　土坑出土遺物実測図
Fig. 44　SD—102遺物出土状態，SD−103
Fig. 45　SD—102出土遺物実測図1
Fig. 46　SD—102出土遺物実測図2
Fig. 47　SD—102出土遺物実測図3
Fig. 48　SD—103出土遺物実測図
Fig. 49　SD—102～104
Fig. 50　SD—104～106・111出土遺物実測図
Fig. 51　SD—111～114
Fig. 52　ピット出土遺物実測図1
Fig. 53　ピット出土遺物実測図2
Fig. 54　ピット出土遺物実測図3
Fig. 55　SB—201
Fig. 56　SB—202
Fig. 57　SB—203
Fig. 58　SB—204
Fig. 59　SB—205
Fig. 60　SB—206
Fig. 61　SB—207
Fig. 62　SK—204
Fig. 63　SB—301
Fig. 64　SB—302
Fig. 65　SB—303
Fig. 66　SB—304
Fig. 67　SB—205
Fig. 68　SD—301
Fig. 69　C区出土遺物実測図
Fig. 70　D区遺構平面図
Fig. 71　SB—401
Fig. 72　SK—402，SD—401
Fig. 73　SK—403
Fig. 74　D区出土遺物実測図
Fig. 75　E区遺構平面図
Fig. 76　SK—502
Fig. 77　SK—502出土遺物実測図
Fig. 78　現地説明会
Fig. 79　遺跡の範囲と調査対象区域
Fig. 80　二ノ部遺跡・城跡トラバースポイント配置図
Fig. 81　調査区設定図
Fig. 82　調査区全体図
Fig.83　A区Dトレンチ（サブトレンチ）セクション図
Fig. 84　B区東壁セクション図
Fig. 85　B区第Ⅱ層出土遺物実測図
Fig. 86　C区南壁セクション図
Fig. 87　D区南壁セクション図
Fig. 88　E区東壁セクション図
Fig. 89　第Ⅱ層出土遺物実測図
Fig. 90　SB—101
Fig. 91　SB—102
Fig. 92　Bトレンチ遺構平面図
Fig. 93　SB—103
Fig. 94　Cトレンチ遺構平面図
Fig. 95　Dトレンチ遺構平面図
Fig. 96　Eトレンチ遺構平面図
Fig. 97　P−101柱根実測図
Fig. 98　ST—201ベット状遺構検出状態

Fig. 99　ST—201完掘状態
Fig.100　ST—201出土遺物実測図 1
Fig.101　ST—201出土遺物実測図 2
Fig.102　ST—201出土遺物実測図 3
Fig.103　ST—201出土遺物実測図 4
Fig.104　ST—201出土遺物実測図 5
Fig.105　ST—201出土遺物実測図 6
Fig.106　ST—201出土遺物実測図 7
Fig.107　ST—201出土遺物実測図 8
Fig.108　ST—201出土遺物実測図 9
Fig.109　ST—201出土遺物実測図10
Fig.110　ST—202
Fig.111　ST—202出土遺物実測図
Fig.112　ST—203ベット状遺構検出状態
Fig.113　ST—203完掘状態
Fig.114　ST—203出土遺物実測図 1
Fig.115　ST—203出土遺物実測図 2
Fig.116　ST—204
Fig.117　ST—204出土遺物実測図
Fig.118　SK—201出土遺物実測図
Fig.119　P—201遺物出土状態
Fig.120　P—201出土遺物実測図
Fig.121　SX—201出土遺物実測図
Fig.122　SB—201
Fig.123　SB—202
Fig.124　SB—203
Fig.125　SB—204
Fig.126　SB—205
Fig.127　SB—206
Fig.128　SB—207
Fig.129　SB—208
Fig.130　SB—209
Fig.131　SB—210
Fig.132　SB—211
Fig.133　SB—212
Fig.134　SB—213
Fig.135　SB—214
Fig.136　SB—215
Fig.137　SB—216
Fig.138　SB—217
Fig.139　SB—218
Fig.140　SB—219
Fig.141　SB—220
Fig.142　SK—201
Fig.143　SK—205
Fig.144　掘立柱建物跡，塀跡，土坑出土遺物実測図
Fig.145　SD—201・202セクション図
Fig.146　SD—201・202出土遺物実測図
Fig.147　ピット出土遺物実測図
Fig.148　C区遺構平面図
Fig.149　SB—301
Fig.150　SB—302
Fig.151　SB—303
Fig.152　SB—304
Fig.153　SB—305
Fig.154　SB—306
Fig.155　SB—307
Fig.156　掘立柱建物跡，塀跡出土遺物実測図
Fig.157　SK—301
Fig.158　SD—301セクション図
Fig.159　ピット出土遺物実測図
Fig.160　柱根実測図 1
Fig.161　柱根実測図 2
Fig.162　D区遺構平面図
Fig.163　SK—401
Fig.164　SD—501セクション図
Fig.165　SD—501出土遺物実測図
Fig.166　SB—501
Fig.167　SB—502
Fig.168　SB—503
Fig.169　SB—504

Fig.170　SB—505
Fig.171　SB—506
Fig.172　掘立柱建物跡，塀跡出土遺物実測図
Fig.173　SK—501～503
Fig.174　SD—502セクション図
Fig.175　土坑，溝跡出土遺物実測図
Fig.176　ピット出土遺物実測図
Fig.177　柱根等木製品実測図
Fig.178　調査区全体図
Fig.179　A・Bトレンチセクション図
Fig.180　第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物実測図

表

Tab. 1　斗賀野地区周辺の遺跡地名表
Tab. 2　トラバース測量座標成果一覧表
Tab. 3　トラバース測量座標成果一覧表
Tab. 4　岩井口遺跡掘立柱建物跡計測表
Tab. 5　岩井口遺跡塀跡計測表
Tab. 6　二ノ部遺跡掘立柱建物跡計測表
Tab. 7　二ノ部遺跡塀跡計測表

図版

巻頭図版1　二ノ部遺跡出土弥生土器（壷）
巻頭図版2　岩井口遺跡館跡完掘状態(北西より)
巻頭図版3　岩井口遺跡遺構検出状態（西より）
巻頭図版4　二ノ部城跡　C区全景（上空より）
　　二ノ部城跡　E区全景（上空より）
巻頭図版5　二ノ部遺跡出土　弥生土器（壷）
　　二ノ部遺跡出土　弥生土器（甕）
岩井口遺跡 ……
PL. 1　調査前全景（北より）
　　調査前全景（南より）
PL. 2　試掘トレンチ（D～Fトレンチ）（南より）
　　試掘トレンチ（Eトレンチ）（南より）
PL. 3　ST—101（西より）
　　ST—101，SD—101（南より）
PL. 4　A区遺構検出状態（北西より）
　　A区遺構完掘状態（北西より）
PL. 5　A区遺構検出状態（東より）
　　A区遺構完掘状態（東より）
PL. 6　A区遺構検出状態（西より）
　　A区遺構完掘状態（西より）
PL. 7　A区遺構検出状態（南より）
　　A区遺構完掘状態（南より）
PL. 8　SB—115（南より）
　　SB—116（南より）
PL. 9　SD—102・103（北より）
　　SD—103（東より）
PL. 10　SD—111（東より）
　　SD—112～114（西より）
PL. 11　B区遺構検出状態（北より）
　　B区遺構完掘状態（北より）
PL. 12　SB—204～206（北東より）
　　SB—207（北東より）
PL. 13　C区遺構検出状態（西より）
　　C区遺構完掘状態（西より）
PL. 14　C区遺構検出状態（東より）
　　C区遺構完掘状態（東より）
PL. 15　SB—301・302，SA—301（西より）
　　SB—302・303（西より）

PL. 16　D区遺構検出状態（南より）
D区遺構完掘状態（南より）
PL. 17　E区遺構検出状態（東より）
E区遺構完掘状態（東より）
PL. 18　SD—101弥生土器（A区—17）出土状態，SD—101弥生土器（A区—16）出土状態，P—101弥生土器（A区—18～20）出土状態，SD—101（東より），SD—102土師質土器出土状態1（南より），SD—102土師質土器出土状態2（西より），SD—102土師質土器出土状態3（西より），SD—102土師質土器出土状態4（北西より）
PL. 19　円形ピット1，円形ピット2，円形ピット3，円形ピット4，円形ピット5，円形ピット6，円形ピット7，円形ピット8
PL. 20　SA—101土師質土器（A区—43・45）出土状態，P—137おろし皿（A区—197）出土状態，SD—104（南より），SD—112～114（西より），P—401弥生土器（D区—1）出土状態，SD—401瓦質土器（D区—4）出土状態，SK—502（南より），SK—502土師質土器（E区—1）出土状態
PL. 21　土師質土器（杯）
土師質土器（杯，小皿）
PL. 22　東播系須恵器（甕）
東播系須恵器（こね鉢）
PL. 23　備前（甕，擂鉢），常滑（甕）
PL. 24　弥生土器，叩石，瀬戸・美濃系
青磁（碗），白磁（碗）
PL. 25　石鏃，弥生土器，扁平片刃石斧，瓦質土器，土錘
PL. 26　土師質土器1
PL. 27　土師質土器2
PL. 28　土師質土器3
PL. 29　土師質土器4
PL. 30　土師質土器5
PL. 31　土師質土器6
PL. 32　土師質土器7
PL. 33　土師質土器8
PL. 34　土師質土器9
PL. 35　土師質土器10
PL. 36　土師質土器11

二ノ部遺跡・城跡 ……
PL. 37　調査前全景（南より）
調査後全景（南より）
PL. 38　調査区全景（上空より）
B区全景（上空より）
PL. 39　C区全景（上空より）
E区全景（上空より）
PL. 40　A区A～Cトレンチ（南より）
A区Eトレンチ（南より）
PL. 41　ST—201（東より）
ST—201ベット状遺構検出状態（東より）
PL. 42　ST—202（東より）
ST—202完掘状態（東より）
PL. 43　ST—203（東より）
ST—203ベット状遺構検出状態（東より）
PL. 44　ST—201完掘状態（東より）
ST—203完掘状態（北より）
PL. 45　ST—204（北より）
P—201遺物出土状態
PL. 46　B区遺構検出状態（北西より）
B区遺構完掘状態（北西より）
PL. 47　SB—201・203・206・208（東より）
SD—201・202（北より）
PL. 48　C区遺構検出状態（南東より）
C区遺構検出状態（南より）
PL. 49　C区遺構完掘状態（南東より）
C区遺構完掘状態（北西より）
PL. 50　SB—301・302，SA—302（北より）

SB—301・303・307（西より）
PL. 51 D区遺構検出状態（東より）
D区遺構完掘状態（東より）
PL. 52 E区遺構検出状態（南西より）
E区遺構検出状態（南東より）
PL. 53 E区遺構完掘状態（北西より）
E区遺構完掘状態（南東より）
PL. 54 SB—501（南東より）
SB—502，SA−501（南東より）
PL. 55 SD—501（北より）
SD—502（北より）
PL. 56 二ノ部城跡（西より）
二ノ部城跡（上空より）
PL. 57 二ノ部城跡調査前全景（南より）
二ノ部城跡調査前全景（北より）
PL. 58 Aトレンチ（南より）
Aトレンチ南壁セクション
PL. 59 Bトレンチ（南より）
Bトレンチ西壁セクション
PL. 60 ST—201弥生土器出土状態1，ST—201弥生土器出土状態2，ST—201弥生土器出土状態3，ST—201弥生土器出土状態4，ST—203 P—1弥生土器（166）出土状態，ST—203弥生土器（175）出土状態，ST—203勾玉（178）出土状態，ST—203砥石（181）出土状態，
PL. 61 SD—201南壁セクション，SD—202南壁セクション，SD−202常滑（228）出土状態，SB—210青磁（211）出土状態，円形ピット，柱穴並びに柱痕検出状態，柱根（C区—87）検出状態，柱根（C区—88）検出状態，
PL. 62 柱根（C区—89）検出状態，柱根（C区—90）検出状態，SB—306おろし皿（28）出土状態，D区SK—401（東より），E区SD—501（北より），SD—501弥生土器（2）出土状態，E区SD—502（南より），SB—501青磁（20）出土状態
PL. 63 弥生土器（壷）
PL. 64 弥生土器（壷）
弥生土器（甕）
PL. 65 弥生土器（甕）
弥生土器（甑）
PL. 66 東播系須恵器（こね鉢）
備前（擂鉢）
PL. 67 備前（大甕）
常滑（大甕）
PL. 68 常滑（甕）
土師質土器（小皿）
PL. 69 柱根
PL. 70 柱根，弥生土器（壷）
PL. 71 弥生土器1
PL. 72 弥生土器2
PL. 73 弥生土器3，砥石
PL. 74 弥生土器4
PL. 75 弥生土器5
PL. 76 弥生土器6
PL. 77 弥生土器7
PL. 78 弥生土器8
PL. 79 弥生土器，小形精製土器，小形粗製土器
PL. 80 小形精製土器，砥石，弥生土器
PL. 81 弥生土器
PL. 82 小形粗製土器，勾玉，土錘，弥生土器
PL. 83 弥生土器，小形粗製土器，常滑，土師質土器
PL. 84 土師質土器，青磁，土錘
PL. 85 弥生土器，瀬戸・美濃系
PL. 86 土師質土器1
PL. 87 土師質土器2
PL. 88 土師質土器3
PL. 89 土師質土器，青磁
PL. 90 土師質土器，瀬戸・美濃系，下駄

付図目次

付図 1　岩井口遺跡A区遺構平面図（S=1：200）
付図 2　岩井口遺跡B区遺構平面図（S=1：200）
付図 3　岩井口遺跡C区遺構平面図（S=1：200）
付図 4　二ノ部遺跡A区トレンチ遺構平面図（S=1：200）
付図 5　二ノ部遺跡B区弥生時代遺構平面図（S=1：200）
付図 6　二ノ部遺跡B区中世遺構平面図（S=1：200）
付図 7　二ノ部遺跡E区遺構平面図（S=1：200）

第Ⅰ章　序章

1.はじめに

本書は，高知県の委託を受け，平成4年度に実施した岩井口遺跡と平成5年度に行った二ノ部遺跡及び二ノ部城跡の緊急発掘調査の結果をまとめたものである。これらの調査は高知県が平成2年度から10ヶ年計画で実施している佐川町斗賀野(とかの)地区県営圃場整備事業に伴うもので，佐川町教育委員会が調査主体となり実施した。

今回の埋蔵文化財発掘調査の契機となったのは，高知県農林水産部長から平成元年5月19日付けで高知県教育長あてに照会のあった「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の文書からである。それによると整備地域は，高知県高岡郡佐川町斗賀野地区の95haが対象となっていた。遺跡の分布状態については昭和48年度に文化庁の全国調査の一環として実施した際の資料と昭和58年度に実施した中世城館の調査資料があり，対象地域周辺には二ノ部城跡，一ツ渕遺跡，又屋敷遺跡，伏尾城跡，西組遺跡，室原遺跡の6遺跡が所在し，実際工事区域内には一ツ渕遺跡と二ノ部城跡の堀部分がかかっているのみで，遺跡の所在の可能性が最もある斗賀野盆地の平野部ではほとんど遺跡は確認されておらず，十分な遺跡の分布状況を把握する資料とはなり得ていなかった。また，昭和48年度以来全般的な分布調査が実施されていないため高知県教育委員会では昭和61年度から10ヶ年計画で県下を5ブロックに分けた遺跡詳細分布調査を実施中であったが，平成元年当時，調査が完了しているブロックは，幡多ブロックのみで佐川町の属する高岡ブロックの分布調査予定は平成4・5年度であり，工事に先立って遺跡の分布状況を把握するには事前の確認調査が必要となった。

2.確認調査

佐川町教育委員会は高知県教育委員会の指導のもと国庫補助を受け，平成2・3年度の2ヶ年で対象地域の確認調査を実施することになった。調査は工事の予定に従い，斗賀野盆地の中央部を南北に縦断する県道（現国道）で東西に分け，平成2年度は西側の鳥の巣，二ノ部，塚谷，岩井口地区，平成3年度は東側の下美都岐，上美都岐，野添地区の確認調査 を実施した。

調査は，農道等が十分整備されていない水田や畑地が多く，かつ，工事までにはまだ期間があり確認調査後も耕作の必要があったため，機械力の導入は難しく，すべて人力で行うこととなった。試掘トレンチは2×2mの大きさとし，承諾の得られない土地もあったが，ほぼ全域に設置することができ，平成2年度に58ヶ所，平成3年度に82ヶ所を調査した。

（1）調査地区の状況

鳥の巣地区

16ヶ所に試掘トレンチを設定して調査したが，表土層以下，下層部ではほとんどが灰色粘土層であり，遺物包含層や遺構は全く検出されなかった。平野部の大半が以前は湿地帯であったものと推察される。

二ノ部地区

35ヶ所に試掘トレンチを設定して調査した結果，二ノ部城跡の堀部分と二ノ部城跡の南西部から集落跡（弥生時代・平安時代・室町時代）を確認した。遺構が検出された部分は，表土層直下に暗褐色を呈する遺物包含層が認められ，地山が褐色粘質土層となっていた。

塚谷地区

3ヶ所に試掘トレンチを設定して調査したが，遺物包含層や遺構は全く確認されず，多くが表土層直下が2次堆積層（瓦用の粘土を採掘後に赤土等で埋め戻したもの）となっていた。

岩井口地区

4ヶ所に試掘トレンチを設定して調査した結果，谷の入口部分で表土層直下から遺物包含層を確認した。遺物包含層以下には黒ボク層並びに鬼界カルデラの噴火によって降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積が認められた。一方，谷部では表土層以下に粘土の堆積が顕著であった。

下美都岐地区

53ヶ所に試掘トレンチを設定して調査したが，遺物包含層や遺構は確認されなかった。表土層以

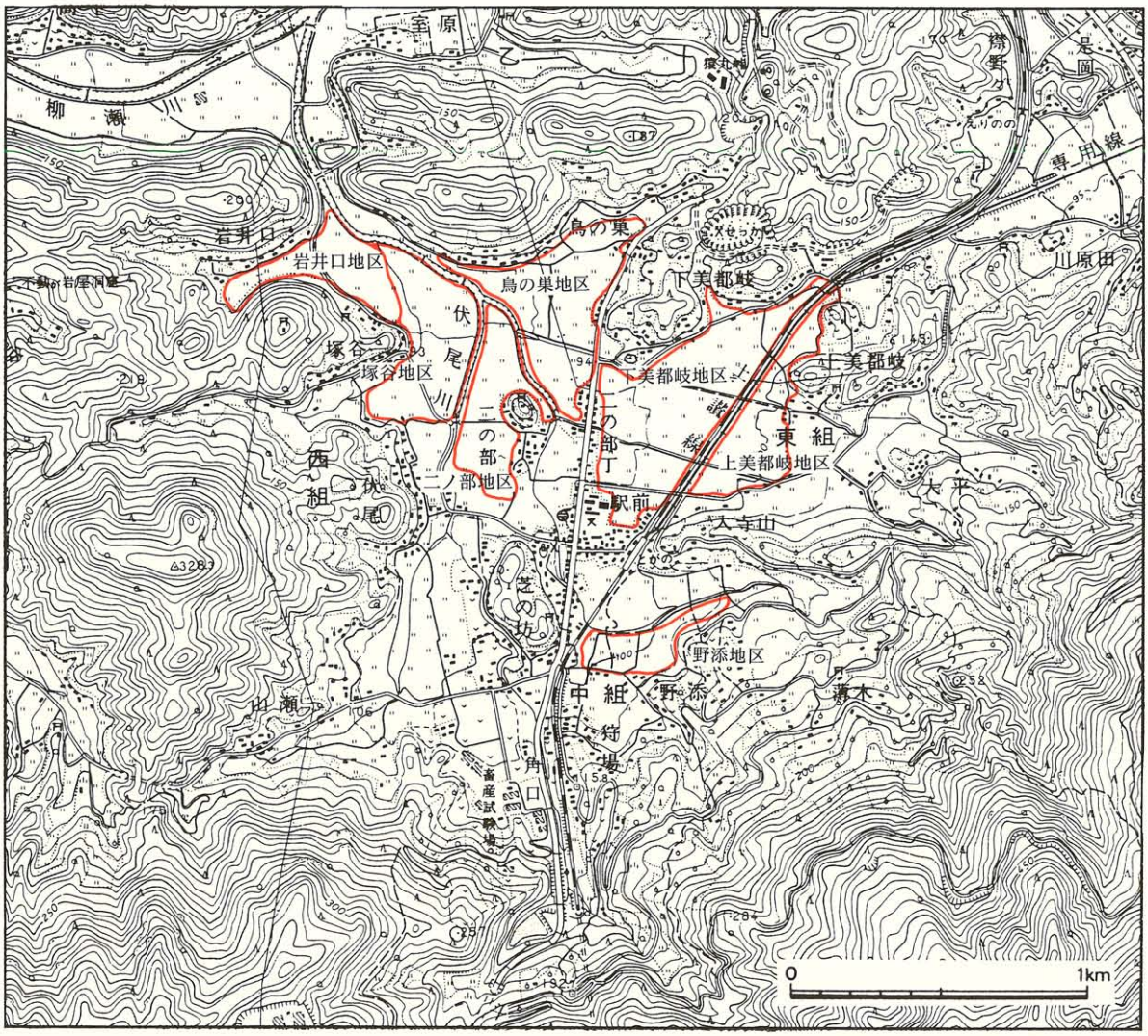


Fig. 1　埋蔵文化財確認調査対象地区（S＝1：25,000）

下は灰色～黄灰色シルト，青灰色～黒色粘土層，黒色砂礫土層となっており，粘土の堆積の厚い部分では瓦用の粘土の採取が行われたとみられ，赤土を主とする2次堆積層が認められた。

上美都岐地区

22ヶ所に試掘トレンチを設定して調査したところ，山麓部分を中心に平安時代とみられる遺物包含層並びに遺構を検出した。遺構が検出された部分の土層は，岩井口地区のそれに同じく表土層以下は，遺物包含層，黒ボク層，火山灰層（アカホヤ）の順に堆積していた。

野添地区

7ヶ所に試掘トレンチを設定して調査したところ，内1ヶ所のトレンチから中世の遺物包含層と遺構を検出することができた。層序は，表土層直下が遺物包含層で，下層が地山の火山灰層（アカホヤ）となっていた。

(2) 遺跡の概要

平成2・3年度の2ヶ年の確認調査によって対象地域内に新たに4遺跡の所在が確認され，既存の1遺跡を加え，全部で5遺跡所在することが判明した。なお，以前瓦用の粘土採取の際，弥生土器が発見されたことによりその所在が判明した一ツ渕遺跡については，今回関連する遺物包含層や遺構などは全く確認できなかったことからすると比較的限定された部分で行われた祭祀的要素の強い遺跡ではなかったかと判断され，すでに粘土採取の時に破壊された可能性が考えられる。以下，対象区域内に所在する5遺跡の概要をみてみる。

二ノ部城跡

斗賀野盆地中央部の独立丘陵上に所在する山城で，別名斗賀野城跡とも呼ばれ，城主は米森幻蕃と伝えられる。元亀2年(1571)に長宗我部氏の侵攻によって落城している。今回対象区域内には掘部分が含まれ，城の南東部で現地表下60～90cmに遺物包含層を確認した。他の部分では確認されず，明確な掘方を持った堀ではなく，河川を利用した堀ではなかったかと推察される。

二ノ部遺跡

弥生時代，平安時代，室町時代の遺構が確認された。遺構は地表下約40cmと比較的浅い部分に所在し，上層に厚さ約25cmの遺物包含層も残存する。遺構は比較的広い部分で検出され，規模の多きな集落跡であることが考えられた。なお，本調査の際には平安時代の遺物包含層が確認された部分は区域外となり，調査は行っていない。

岩井口遺跡

試掘調査の際は，遺物包含層が確認されたが明確な遺物がなく，遺構の分布状況なども判然とせず，また，立地的にも斗賀野盆地の北西端であり，大規模な集落が存在するとは考え難かった。しかし，実際本調査を行ってみると県下でも調査例の少ない在地領主の館跡であることが判明した。また，弥生時代の住居跡も確認された。

上美都岐遺跡

平安時代を中心とする遺構並びに遺物が検出された。立地及び検出範囲からみて遺跡は広範囲に及ぶものとみられる。また，方形の掘方を持つ柱穴が検出されており，遺跡内に「国衙領」の地名

が残っていることと考え合わすと官衙関連遺跡である可能性も考えられよう。これら遺構は地表下約30cmのところから検出されている。なお，本調査は平成7年度に予定されている。

テラ川遺跡

室町時代とみられる溝跡が検出された。立地からみて，遺跡の範囲は比較的狭いものと考えられ，遺構の状況からすると小規模な集落跡ではないかと考えられる。また，遺構は，厚さ約20cmの表土層，厚さ約5cmの黒褐色を呈する遺物包含層の下層で検出されており，地表下約25cmと浅い部分に所在する。なお，本調査の時期は未定である。

3.遺跡の地理的，歴史的環境

(1) 地理的環境

佐川町は，高知県の中西部に位置し，行政区画では高岡郡に属す。東を日高村と土佐市，南を須崎市，西を葉山村，北を越知町の2市1町2村と境を接し，周囲を四国山地の支脈に囲まれた盆地となっている。集落は大きく黒岩，佐川，尾川，斗賀野，加茂に分かれており，東西13.2km，南北12.8km，総面積は101.21km^2，人口は15,454人（平成6年11月現在）を有し，江戸時代以来代々の文教重視政策により宮内大臣田中光顕をはじめ，牧野富太郎そのほか多くの著名な文教人が輩出し，以来文教の町として知られている。また，江戸時代城主山内一豊から佐川領を賜った主席家老深尾和泉守重良に従って佐川に来た御酒屋以来の伝統を受け継いだ醸造が今日まで続けられており，土佐を代表する蔵元となっている。この他にも，国の史跡不動ガ岩屋洞穴遺跡，国の重要文化財大乗院薬師如来像，県の名勝である青源寺と乗台寺の庭園をはじめ多くの指定文化財を保有している。

この佐川町を地理的にみれば，東経133°17′，北緯33°30′に位置し，仁淀川の支流によって形成された沖積平野と四国山地の支脈である山間部からなる盆地地形をなす。河川でみると大きく二つに分かれ，一つが東流する日下川流域の加茂地区，残る一つが北流する柳瀬川流域の地区で，下流より黒岩，佐川，尾川そして斗賀野地区がある。また，柳瀬川には春日川（佐川地区），尾川川（尾川），斗賀野川（斗賀野）の支流が流れる。町の南方には蟠蛇森（769m），虚空蔵山（675m）の山々が連なり，そこを源とする柳瀬川の流れに添って地勢は北にやや傾斜している。一方，加茂地区は佐川地区の東側の山を源とする日下川の流れに沿って地勢はやや東に傾斜している。

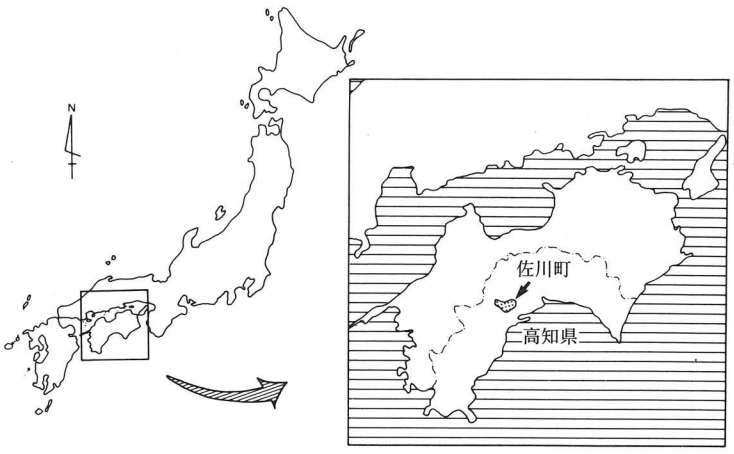


Fig. 2　佐川町位置図

今回調査の対象となった斗賀野地区は，丁度佐川地区の南に位置し，周囲を山に囲まれた盆地地形をなすが，佐川地区のそれに比べ裾野の広い虚空蔵山に抱かれており，開けた印象を受ける。この盆地には虚空蔵山を源とする斗賀野川及びその支流

である伏尾川，幸田川があり，これら河川は北西方向に向かって流れており，地勢もそれに添って傾斜している。遺跡も標高が高い南部に多く，標高が低くなる北部では遺跡はほとんど確認されておらず，以前は低湿地地帯であったものと考えられる。低湿地であったが故に良質の粘土が形成され，その粘土が古代以降須恵器生産さらには瓦産業に結びついたのであろう。今回対象となった遺跡は，この斗賀野盆地の北西端部に岩井口遺跡，中央部に二ノ部遺跡・城跡，東端部に上美都岐遺跡，南東部にテラ川遺跡がそれぞれ所在する。

(2) 歴史的環境

佐川町の歴史は国の史跡である不動ガ岩屋洞穴遺跡に始まり，現代のところ79遺跡が確認されている。高岡郡の中では土佐市に次ぐ遺跡数を誇る。高知県の場合，南国市を中心とする高知平野，中村市を中心とした四万十川下流域，安芸川，伊尾木川のある安芸平野に遺跡の大半が所在しており，それ以外にあって佐川町のように比較的多くの遺跡が確認されているところは少ない。また，奈良・平安時代の遺跡は先の地域にあっても比較的少なく，特に古代窯業跡は生産地が限定され県下的にみても少なく，10地区足らずが確認されているに過ぎず，その中の1地区が佐川町に所在することは注目すべきことであろう。以下，確認されている遺跡を中心に時代を追って佐川町の歴史をみてみることにする。

現在確認された中で最も古い遺跡は，先述の不動ガ岩屋洞穴遺跡である。丁度岩井口遺跡とは山を挟んだ反対側に位置する。昭和39・41年に調査され，縄文時代草創期から早期の遺物が検出された。特に，当時日本最古の土器の一つに考えられていた細隆起線文土器の出土は注目され，昭和53年12月19日国の史跡に指定されている。最近では，この土器より遡るとみられる豆粒文土器が十和村十川駄馬崎遺跡から出土しており，縄文時代では県下で2番目に古い遺跡となっている。不動ガ岩屋洞穴遺跡から約3km柳瀬川を下った左岸の岩陰からも縄文時代早期の押型文土器が発見されており，城ノ台遺跡として町指定の史跡となっている。その他にも柳瀬川の下流域の黒岩地区では黒原遺跡，坂東遺跡，西ノ芝遺跡，中ノ芝遺跡，岬遺跡などの縄文時代早期から前期にかけての遺跡や庄田遺跡，太田川遺跡などの縄文時代後期の遺跡が丘陵上や段丘上で発見されている。縄文時代後期の遺跡は佐川町各地で確認されているが，大半が遺物単独の出土であり，その詳細については不明である。県下の昨今の発掘調査では，立地条件の決して良いとは思われない谷筋などからも遺構が検出されており，今後新たな発見も十分期待できるのではなかろうか。

弥生時代の遺跡では，今回の遺跡以外に佐川地区中央部で町道工事の際発見された假又(かりまた)遺跡があり，発掘調査で確認された唯一の遺跡である。ここからは弥生時代前期後半の土器が出土し，現在のところ弥生時代では最も古い遺跡となっている。また，先述の一ツ渕遺跡からも粘土採取の際弥生時代後期後半の土器が比較的まとまって出土している。これ以外の遺跡は，遺物の単独出土が多く，性格は判然としないが，永野遺跡などからは中期とみられる石包丁が発見されており，弥生時代前期後半以降弥生時代を通じ居住地となっていたものと推察される。中でも後期後半に最も遺跡数が多く，弥生時代の中で最も繁栄した時期であったとみることができよう。

この弥生時代を過ぎ古墳時代になると遺跡は全く確認されなくなる。当然，古墳時代となり生活

に変化が生じ，居住地が移動したことにより遺跡数の減少も十分考えられるが，全く居住しなくなったとは考え難く，将来発見される可能性も捨てることはできないであろう。ただ，古墳などは全く存在しない。

律令制度になると徐々に遺跡数が増加してくる。現在確認されている遺跡は佐川地区の南東部に位置する永野から斗賀野地区にかけて集中している。この時代に関連して，当地には猿丸太夫の伝承が残っており，町史跡に指定された伝猿丸太夫の墓が現存する。墓は五輪塔となっているが，形態からみて近世初頭のものとみられ，直接関連したものとは考えられない。因みに，猿丸太夫は通称で，実名は弓削浄人広方といい道鏡の弟でもあり，宝亀元年(770)土佐に配流されたと伝えられるが，配流地は確かではなく，また，没したところも定かではない。ただ，墓のある場所は猿丸山といわれその名が今日まで伝えられている。実際，遺跡として確認されているものは，芝ノ端窯跡，花ノ木窯跡，円能ケタキ窯跡，堂ヶ端窯跡など須恵器窯跡が4ヶ所と今回県営圃場整備事業に伴う試掘調査で確認した上美都岐遺跡などがある。上美都岐遺跡は，本調査がまだ実施されていないため，詳細は不明であるが，官衙関連遺跡ではないかとみられ注目される。また，この遺跡のある斗賀野地区には先の国衙領や大坪などの古代名称も残り，条理制が施行されていた可能性も考慮される。

中世以降は平成4・5年度に実施された遺跡詳細分布調査によってその数が増え，分布状況も比較的把握しやすく，「佐伯文書」を始めとしていくつかの古文書も現存し，人間の活発な活動が見受けられる。まず，現況で最も確認しやすい城館跡をみてみると，現在20ヶ所が確認されており，時期的には南北朝時代からとみられ戦国期のものが数的には多いものと推察される。各地区に残存し，黒岩地区には平野城跡，菖蒲城跡，黒岩城跡，陣ヶ奈路城跡，八幡城跡，フスボリ城跡，佐川地区には中山館跡，城ノ台城跡，神明山城跡，三野土居跡，沖之古城跡，佐川城跡，松尾城跡，加茂地区には長竹城跡，斗賀野地区には二ノ部城跡，伏尾城跡，木陰山城跡，尾川地区には尾川城跡，小森城跡，城台山城跡がそれぞれ所在する。このうち城主が伝えられるものもあり，黒岩城主の片岡氏，松尾城主の中村氏，尾川城主の近沢氏，二ノ部（斗賀野）城主の米森氏などが知られている。中でも，松尾城は佐川四郎左衛門に始まり，津野氏の縁族佐川越中守，中山信家，中村越前守信義，片岡出雲，久武内蔵介と城主が代々代わっており，佐川城に久武氏が移るまで佐川の中心的な城であった。現状では二つの郭を中心に，二ノ段，三ノ段，物見台，竪堀20条以上，堀切14条などが残存し，他の城跡とは比較にならないほどの規模を誇っている。なお，どの遺構がどの城主の代に造られたものかは未調査のため定かではない。一方，文献から中世をみてみると元弘3年(1333)に黒岩氏の名が見え，南北朝時代には佐伯文書に佐河（佐川）四郎左衛門入道と度賀野又太郎入道が南朝方としての姿を現す。今回報告する岩井口遺跡と二ノ部遺跡も正にこの時期が舞台となっている。これ以外にも城跡の周辺でこの時期の集落遺跡が散見される。このように展開してきた佐川も元亀2年(1571)には西進してきた長宗我部氏に降伏し，筆頭家老久武氏を中心とした体制に組み込まれ，城も松尾城から佐川城に移り，中世も最終段階に入ってくる。天正17・18年(1589・1590）には長宗我部氏による検地が行われ，それぞれ所領が決められるが，慶長5年(1600)長宗我部氏が滅亡し，翌慶長6年(1601)土佐24万石の城主山内氏の主席家老深尾氏が佐川入城により，中世の終焉そして近世へと移り変っていく。

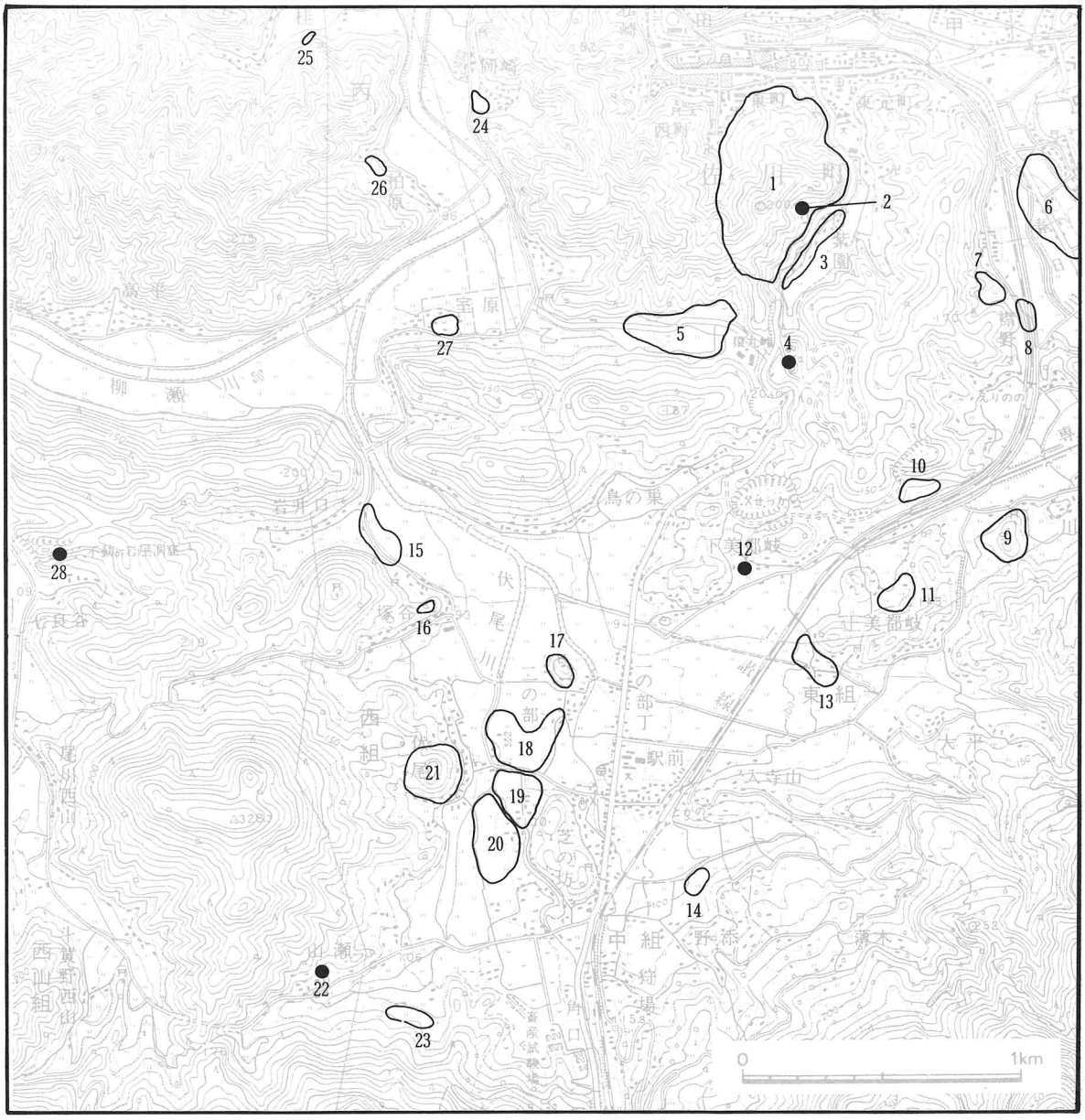


Fig. 3 斗賀野地区周辺の遺跡分布図(S=1:25,000)

Tab.1 斗賀野地区周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	佐川城跡	中・近世	11	又屋敷遺跡	弥生	21	伏尾城跡	中世
2	深尾家の供養塔	近世	12	一ツ渕遺跡	〃	22	椎木谷遺跡	弥生
3	佐川土居跡	〃	13	上美都岐遺跡	古代・中世	23	山瀬遺跡	古代
4	猿丸太夫伝説の墓	奈良（中世）	14	野添遺跡	中世	24	岡崎遺跡	弥生
5	サギノス遺跡	中・近世	**15**	**岩井口遺跡**	**弥生・中世**	25	桂遺跡	縄文
6	永野遺跡	弥生	16	塚谷遺跡	弥生	26	柏原遺跡	〃
7	花ノ木窯跡	古代	**17**	**二ノ部城跡**	**中世**	27	室原遺跡	〃
8	襟野々窯跡	〃	**18**	**二ノ部遺跡**	**弥生・中世**	28	不動ガ岩屋洞穴遺跡	〃
9	甑巌遺跡	中世	19	二ノ部南遺跡	中世			
10	芝ノ端窯跡	古代	20	芝の坊遺跡	古代			

江戸時代は深尾氏の佐川領1万石として繁栄を遂げていく。遺跡としては佐川城跡が元和2年(1616)一国一城令により廃城となるが石垣など近世の城の面影を留め，土居跡（通称御土居）も当時のものとみられる石垣が現存する。その他，中世から続く寺跡の所在を各地区で確認することができる。

以後，明治22年4月市町村制施行により佐川，斗賀野，尾川，黒岩，加茂村ができ，同33年に佐川村が町制を施行し，昭和29年には賀茂村を除く1町3村が合併，同30年に賀茂村の一部を合併し今日に至っている。

参考文献

『佐川町史』上巻　佐川町　1982年

『高知県地名大辞典』　角川書店　1986年

第Ⅱ章　岩井口遺跡

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

岩井口遺跡は，平成2年度に実施した事前の試掘調査によってその所在が確認された遺跡である。確認調査の際，調査したのは約7,000m²にも及んだ遺跡の内の4m²足らずで，かつ遺跡の縁辺部であったが，遺物包含層を確認でき，その所在が想定できた。しかし，遺構の範囲などは不明確であったため，本調査ではトレンチ調査を併行して行い遺構の拡がりを確認しつつ調査を進めていった。その結果，遺跡は，斗賀野盆地を北流する斗賀野川左岸の低位段丘上に立地し，岩井口の谷部を挟んだ両側に遺構が存在することが判明した。

本調査は，平成4年度に計画されていた岩井口地区の県営圃場整備事業に伴うもので，佐川町が高知県（須崎耕地事務所）の委託を受け，佐川町教育委員会が調査主体となり高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと実施した。調査対象となったのは，工事によって掘削並びに削平される部分であった。調査期間は平成4年10月12日から12月12日までの実働44日間であった。なお，調査と工事は通年施行で実施されたため，調査終了と共に遺跡は掘削された。

(2) 調査日誌抄

1992年10月12日～12月12日

10.12　本日から発掘調査を実施する。まず，8ヶ所にトレンチを設定して調査したところ，内7ヶ所から中世の遺構を多数検出する。

10.13　須崎耕地事務所及び隣接する県道の改良工事を担当する越知土木事務所の担当に遺構の状況について説明する。谷の反対側からも遺構検出を検出する。

10.14　E区の調査並びにA区の表土剥ぎを行う。

10.15　E･D区の調査並びにA区の表土剥ぎを行う。

10.19　D区の調査とB区の遺構検出を行う。トラバースポイント1～10を設置する。

10.20　B区の遺構検出状態の写真撮影，A区の精査，トラバース測量を行う。

10.21　A区の精査，B区の杭打ち並びに水準測量を実施する。

10.22　A区の遺構検出並びに杭打ち，B区の遺構略図を作成する。

10.23　雨天のため現場作業は中止する。

10.24　水汲み並びにA区の遺構略図を作成する。

10.26　B区の調査と完掘写真並びにC区の表土剥ぎと遺構検出を行う。

10.27　A区の精査並びに残りの杭打を行うと共にローリングタワーを移設する。

10.28　A区の遺構検出状態の写真撮影を行う。

10.29　A区の調査にかかる。C区の遺構検出状態の写真撮影並びに遺構略図を作成する。

11. 2　A区の調査を中心に行う。

11. 3　A区の館を囲む溝跡の調査を行う。

11. 4　A区の調査並びにD・E区の平板測量を行う。

11. 5・6　C区の調査を行う。

11. 7　A区の溝跡の調査を中心に行う。

11. 9　雨天のため現場作業は中止する。

11.10　A区，館跡南西部の調査を行う。

11.11　A区の調査に併行してB区の平面測量を開始する。

11.12　A区の溝跡の調査並びにB区の平面測量を行う。

11.13 A区，館跡外の遺構の調査を行う。

11.14 A区のピット群，土坑を中心に調査する。

11.16 A区径約80cmのピットが比較的まとまって検出された北部から北西部にかけての調査を行う。

11.17 A区東部の調査を行う。

11.18 本日もA区東部の調査を行い，3棟の建物跡を確認する。

11.19 A区南東部の調査を行い，遺構の調査をほぼ完了する。

11.20 昨夜来の雨のため終日水汲みをする。

11.21 A区遺構の完掘状態の写真撮影を行う。

11.23 A区の平面測量を行う。

11.24 A区の平面測量，B区の水準測量を行う。

11.25 A区の平面測量，C～E区の水準測量を行う。

11.26 A区の平面測量，C区の水準測量を行う。

11.27 記者発表を行い，午後からA区の平面測量を行う。

11.28 A区の平面測量を行い，すべての平面測量を終了する。

11.29 現地説明会を開催する。午前，午後の2度行い，合計約300名の参加があった。

11.30 レベル実測並びに遺構の再調査と平面図のチェックを行う。

12. 1 午前中は雨天のため，午後からレベル実測を行う。

12. 2 本日もレベル実測を行う。

12. 3 本日も残りのレベル実測を行い圃場部分の調査を完了する。

12. 7 雨天のため現場作業は中止する。

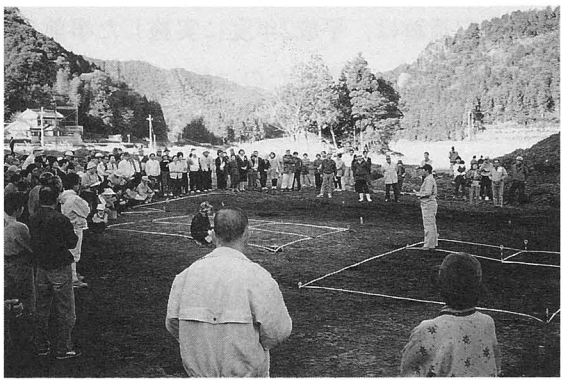


Fig. 4 現地説明会

12. 8 本日から県道を横断する水路部分の調査を実施する。本日で検出作業は終了する。

12. 9 遺構の調査を行う。A区の南端部に位置し，遺構も柱穴が大半であった。

12.10 残りの遺構の調査終了後，完掘状態の写真撮影を行う。

12.11 平面測量を行う。

12.12 レベル実測を行い，すべての現場作業を完了する。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

第Ⅰ章で記したように，事前の確認調査 が十分行えなかったことと調査対象地が広範囲に及ぶためまず，10本の試掘トレンチ（2×10mが2本，2×8mが8本）を設定して遺構の広がりを調査した。その結果，遺構の範囲が約7,000m²にも及び，その内の約3,800m²が今回の調査対象に含まれることが判明した。それを受け，遺構の検出に併行して，トラバース測量を行い合わせて水準測量も実施した。基準点は任意座標とし，X軸は真北に向かう値を正とし，Y軸はX軸に直行する軸とし真東に向う値を正とするようにとり，TP－1～10までを設定した。トラバース測量はTP－1の座標をX=500.000，Y=500.000とし，20秒読みのセオドライト，GUUPY（GTS－3.20）を使用して行った。

なお，調査区西方約400mの標高200メートルの山頂にある鉄塔を方位標とし，鉄塔Aとした。測量結果はTab.2に記し，同時に実測した水準測量（工事用基準点KBM.2　H＝91.926mを使用）の結果も同表に記載した。

また，調査では調査区が水路，農道などで区分され，かつ段差もあるため，調査区をA～E区の5区に分けて行った。調査対象面積は約5,000m²であり，各調査区の発掘調査面積は，A区が2,787m²，B区が528m²，C区が265m²，D区が139m²，E区が117m²となり，最終的な発掘調査面積は3,836m²であった。

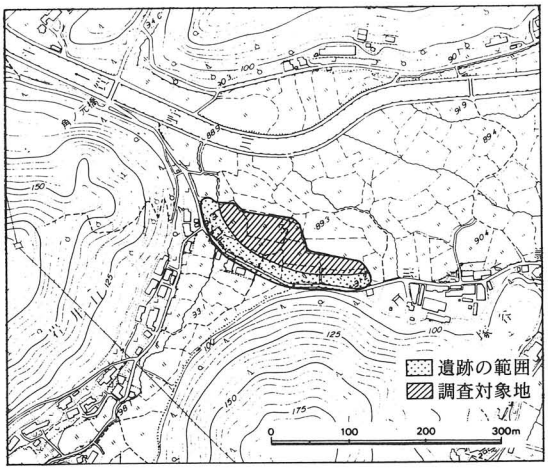


Fig. 5　遺跡の範囲と調査対象区域図（S＝1：10,000）

(2) 調査の概要

調査はA区からE区までの5区に分けて行ったが，遺構が検出された部分の基本層序は削平の状況によって残存状況の違いはみられるもののほぼ同じであった。

A区には2×10mの試掘トレンチ1本と2×8mの試掘トレンチ5本（A～Eトレンチ），B区には2×8mの試掘トレンチ1本（Fトレンチ），C区には2×10mの試掘トレンチ1本（Gトレンチ），E区には2×8mの試掘トレンチ1本（Jトレンチ），そしてA・B区とC・D区との間に2×8mの試掘トレンチ2本（H·Iトレンチ）をそれぞれ設定して調査した結果，H·Iトレンチを除く各トレンチから遺構が検出された。遺物包含層は標高の比較的低い東部を中心に認められた一方で標高の比較的高い南部と北西部では遺物包含層さらに下層の黒ボク層までもが削平されていた。以下，層序及び堆積層から出土した遺物について記す。

Tab.2　トラバース測量座標成果一覧表　（路線名　岩井口遺跡　測角点　TP－1～10　実測精度　1/63,068）

測角点	方向角	正整方向角	水平距離（m）	X（m）	Y（m）	座標点	標高（m）
TP－10	TP－1	171° 10′ 30"		500.000	500.000	TP－1	91.601
TP－1	TP－2	158° 35′ 17"	74.881	430.287	527.337	TP－2	91.968
TP－2	TP－3	128° 55′ 13"	118.297	355.963	619.378	TP－3	91.057
TP－3	TP－4	316° 59′ 14"	68.430	405.999	572.689	TP－4	90.898
TP－4	TP－5	317° 12′ 36"	40.451	435.684	545.219	TP－5	91.073
TP－5	TP－6	326° 25′ 21"	39.902	470.037	524.921	TP－6	91.114
TP－6	TP－7	62° 33′ 47"	46.313	491.377	566.025	TP－7	90.336
TP－7	TP－8	331° 15′ 55"	56.332	540.772	538.943	TP－8	90.745
TP－8	TP－9	339° 24′ 31"	24.365	563.580	530.374	TP－9	90.245
TP－9	TP－10	278° 45′ 19"	41.717	569.930	489.143	TP－10	91.928
TP－10	TP－1	171° 10′ 30"	70.268	500.000	500.000	TP－1	91.601
TP－1	鉄塔A	315° 53′ 54"	297.091	713.343	293.245	鉄塔A	
TP－2	鉄塔A	320° 24′ 31"	367.314	〃	〃	鉄塔A	

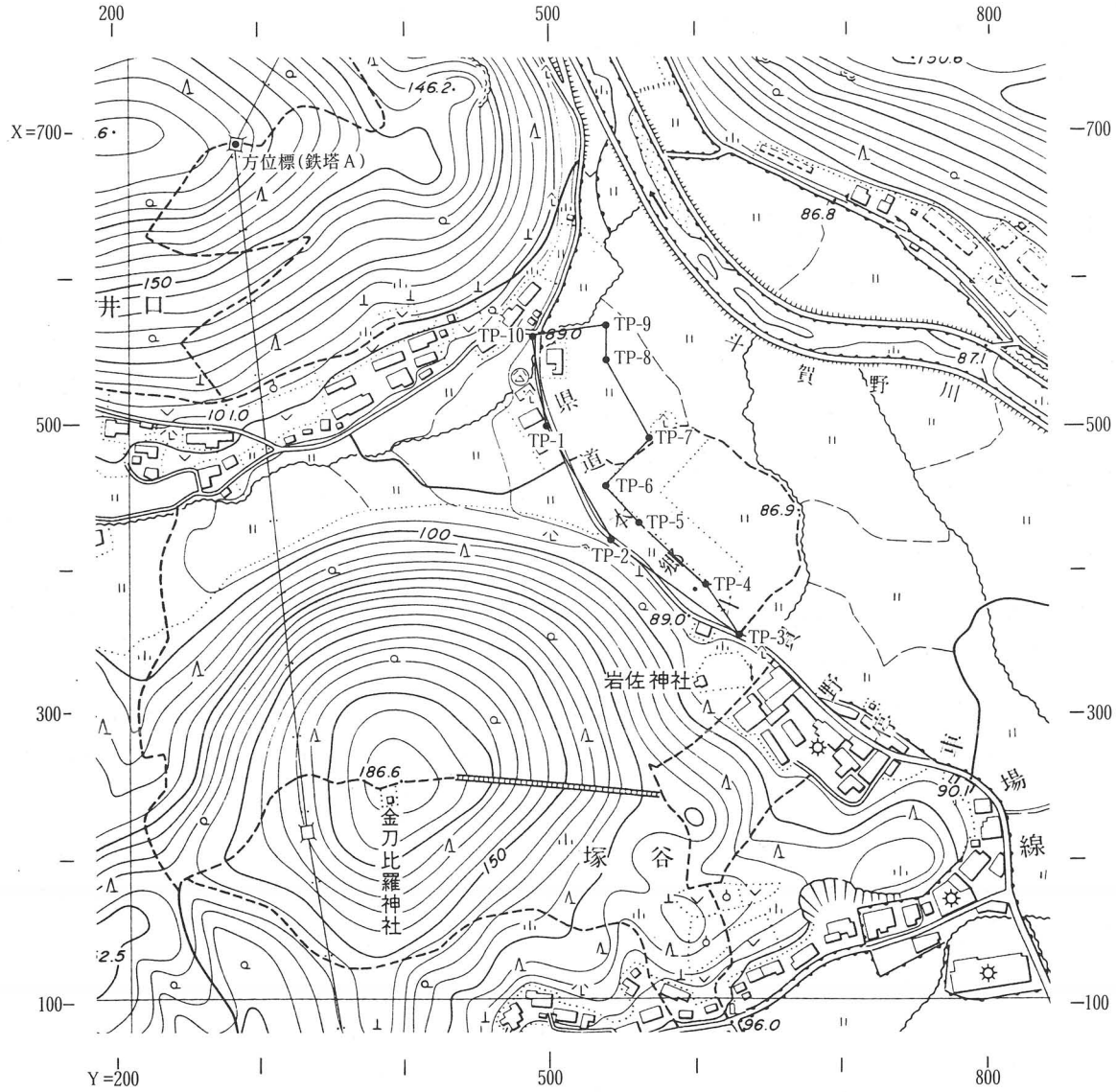


Fig. 6　岩井口遺跡トラバースポイント配置図(S=1:5,000)

層序

遺構が検出されたA～G・Jトレンチで認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　暗灰褐色粘質土層

第Ⅲ層　黒色粘質土層

第Ⅳ層　黄褐色火山灰層

第Ⅴ層　褐色粘質土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅲ層，第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面であった。ただ，遺構埋土が黒色を基調としており，ほぼ同系色を呈する第Ⅲ層上面での検出が難しいため第Ⅳ層上面まで掘り下げた部分もある。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測る。現況は水田と畑地で，畑地の場合は大半が畝状をなす。

第Ⅱ層は遺物包含層である。全般に包含する遺物量は少ない。今回検出した中世の館跡に伴う時期のものとみて良さそうである。

第Ⅲ層は第Ⅳ層の火山灰が風化，腐食し土壌化した土層（黒ボク層）で東部を中心に確認され，13～25cmの厚さで堆積していた。基本的には，第Ⅱ層の包含層に伴う遺構がこの上面で検出されるはずであるが，前述のようにほぼ同系色を呈するため遺構検出を困難にしている。また，弥生時代の遺構も検出されていることからこの上面には弥生時代の包含層もかつては形成されていたものと考えられるが残存していない。第Ⅱ層の形成段階に削平されたのではなかろうか。なお，弥生時代の遺構の埋土は黒褐色を呈し，ほぼ同色であり，この上面で検出することは極めて難しい。

第Ⅳ層は約6,300年前に降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積層であり，ほぼ全域で確認され，10～50cmの厚さの堆積が認められた。遺構の大半はこの上面で検出された。

第Ⅴ層は自然堆積層で，北西部での遺構検出面となっている。なお，この下層は灰褐色砂礫土層

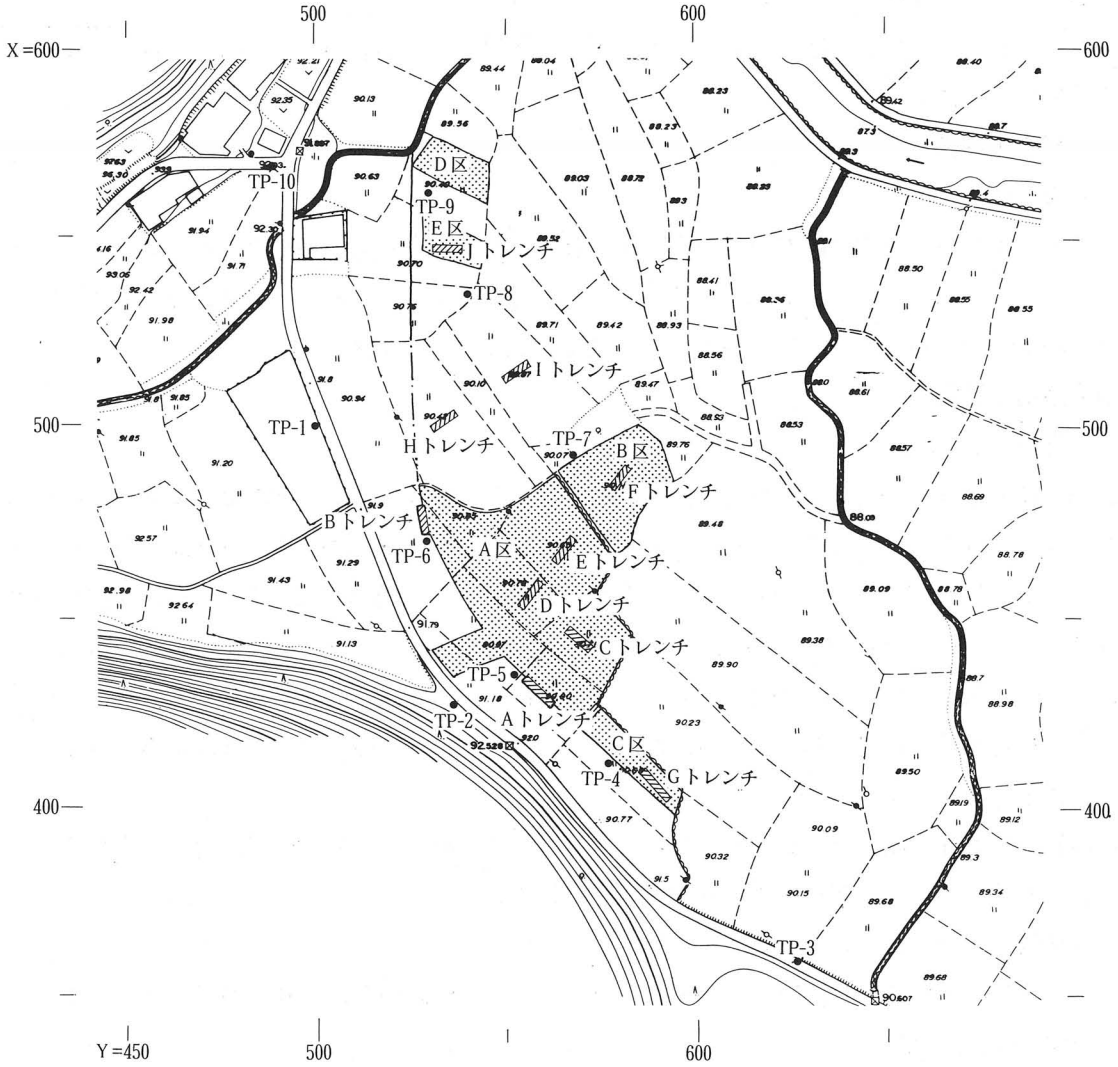


Fig. 7 調査区全体図（S＝1：2,000）

となっていた。

次に，遺構の検出されなかったH·Iトレンチの土層は以下のとおりであった。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　暗灰色粘土層

第Ⅲ層　灰白色粘土層

第Ⅳ層　黄灰色粘土層

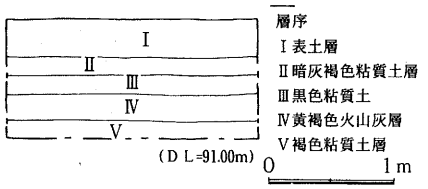


Fig. 8　A～G · Jトレンチ土層柱状図

層位中，第Ⅱ層で流れ込みとみられる遺物が若干認められたが，遺物包含層と考えられる土層は確認されなかった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土で厚さ約20cmを測る。現況はすべて水田であった。

第Ⅱ層以下第Ⅳ層はすべて自然堆積土層とみられ，丁度この部分が岩井口の谷筋に当たることから，谷水によって粘土化したものと考えられる。当時もこの部分を避けて標高の高い両側に居住区を構えていたものと判断される。

また，E区南東部も粘土化されていたとみられ，瓦用の粘土採取の跡が認められた。

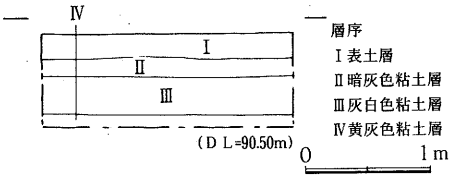


Fig. 9　H · Iトレンチ土層柱状図

第Ⅰ層出土遺物

石鏃（Fig.10－1）

抉りのやや強い石鏃で今回唯一の縄文時代の遺物である。全く遺構が検出されていないことから流れ込み等2次堆積によるものとみられる。先端と両基部が欠損するが，全長2.3cm，全幅1.8cm，全厚1.6cmと推定される。重さは0.6gである。材質は頁石で，風化が進んでいる。

第Ⅱ層出土遺物

土師質土器（Fig.10－2～9）

2～5は杯であり，2・3は器高が低く，口縁部から内面にかけて回転ナデ調整，体部外面は未調整，底部外面は回転糸切り底となっている。2の口縁部の回転ナデ調整は強く，口唇部が細くなっている。4・5は口縁部が欠損するため全体の形状は不明であるが，底部外面は回転糸切り底で，5の底部は深い。6～8は小皿である。底部は平らで，外面は回転糸切り底となっている。口縁部は外上方に短く上がる。8は口唇部で僅かに外反する。9は鍋で，口縁部の一部が残存する。外面口縁部下には小さな鍔が付く。口縁部から内面にかけてヨコナデ調整，外面には煤の付着がみられる。

東播系須恵器（Fig.10－10）

こね鉢の口縁部の破片である。体部から口縁部にかけて斜め上方を向き，口唇部で小さく上方を向く。口縁部はヨコナデ調整，体部外面にはナデ調整がみられる。

備前焼（Fig.10－11）

甕の口縁部の破片である。口縁部は玉縁をなし，ヨコナデ調整がみられ，他はナデ調整である。

青磁（Fig.10－12）

龍泉窯の碗とみられる。口縁部を欠損するが，見込には鎬による界線と草花文，体部外面には細

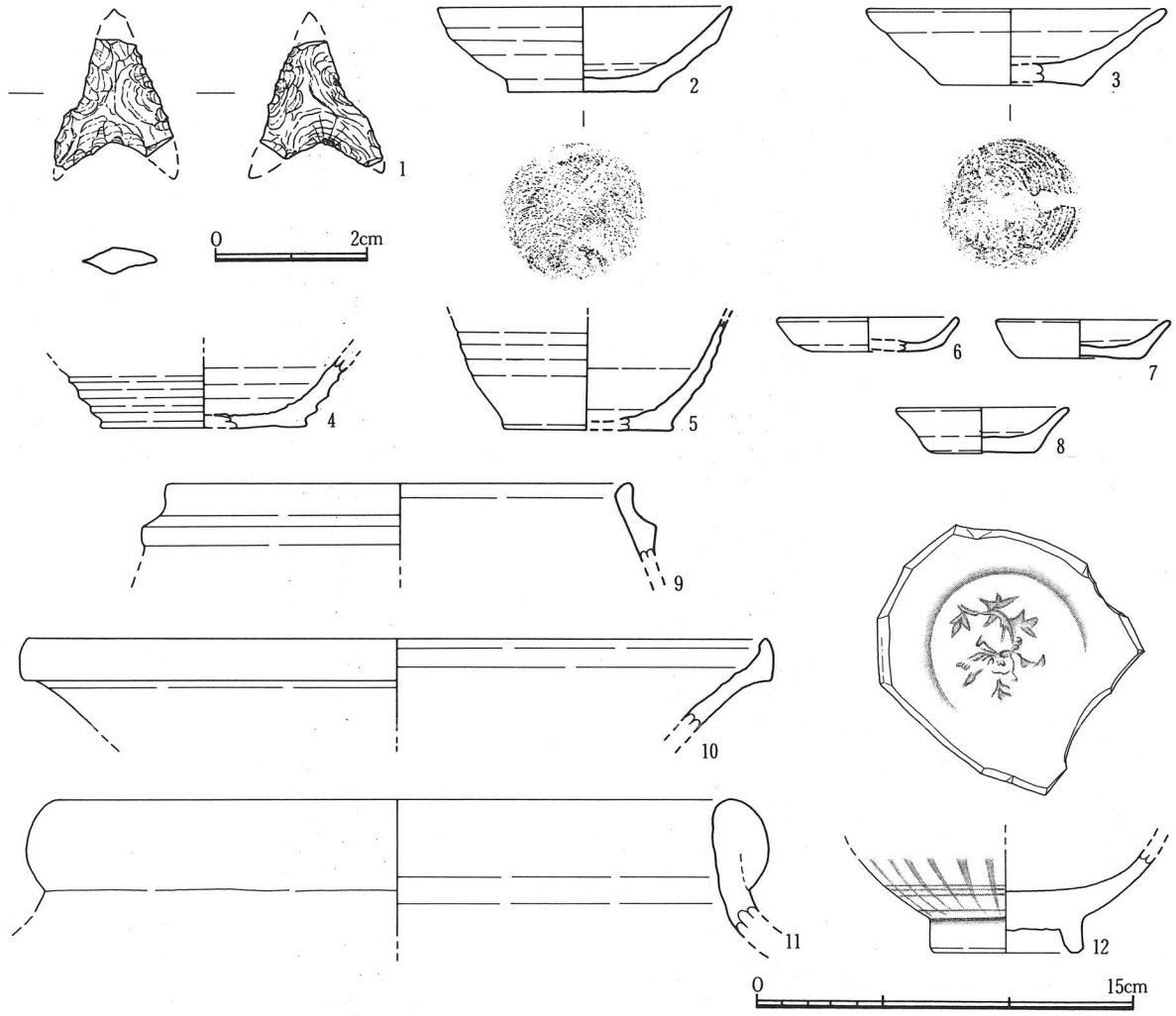


Fig. 10 第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図

蓮弁文がみられる。

3. 遺構と遺物

本項では，調査区ごとに竪穴住居跡又は竪穴状遺構（ST），掘立柱建物跡（SB），塀跡又は柵列（SA），土坑（SK），溝跡（SD），ピット(P)，性格不明遺構（SX）の順に主だった遺構について記している。なお，弥生時代の遺構と中世の遺構が明確に区分されるA区とE区についは弥生時代と中世に分けて記述している。なお，遺構番号は各地区で通し番号とし，時代での区別はしていない。

（1）A区

岩井口遺跡の中心部をなす地区で，溝に囲まれた中世の館跡を確認した。弥生時代では住居跡としては県下で初めて屋外に排水用の溝を設けたとみられる竪穴住居跡を検出した。なお，近世以降のものも一部見られるが，それらは中世の項で一括して記している。

①弥生時代

A 竪穴住居跡

ST−101 (Fig.11)

北部で検出した竪穴住居跡である。北半分がすでに削平されており現存しない。平面形は方形で一辺約4.50mを測り，長軸方向はN−8°−Wである。遺存する壁高は約25cmで，壁は平らな床面から急角度で上がる。床面の標高は90.150m前後を測る。付属遺構として住居跡内から主柱穴2個と壁高の一部を検出した。主柱穴は径20〜25cm，深さ36〜40cmの規模である。また，屋外からは住居の排水用とみられる溝跡（SD−101）を検出した。住居跡の検出面の端から2.0〜2.5mの間隔をとって配置されていた。埋土はレンズ状の2層の堆積が認められ，上層が黒色粘質土に黄褐色火山灰土粒を僅かに含み，下層が黒色粘質土に黄褐色火山灰土粒及びブロックを多量に含むものであった。住居内からの遺物の出土は僅かで細片であり図示できるものはなかったが，SD−101から完形の土器が数点出土しており，住居跡の時期もほぼその時期に該当さすことができよう。

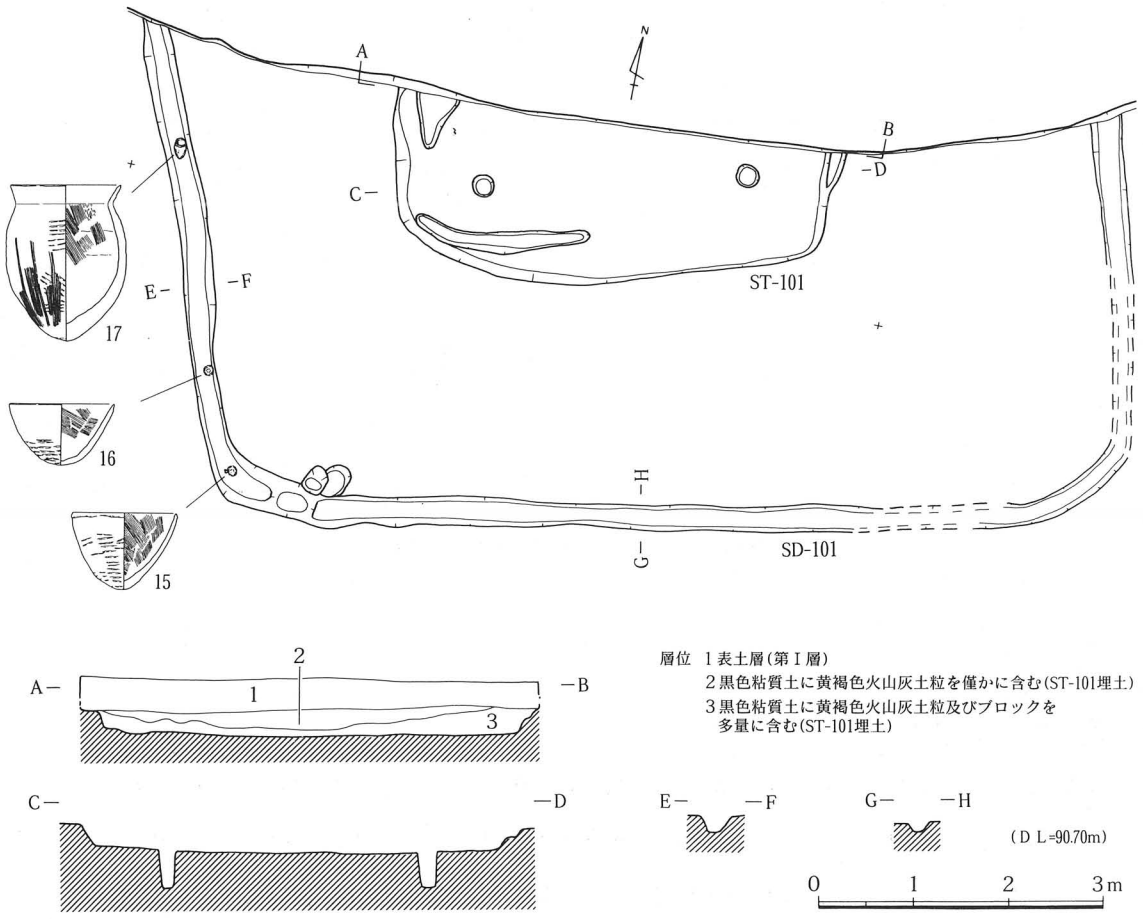


Fig. 11 ＳＴ−101，ＳＤ−101

B 土坑

SK−101 (Fig.13)

調査区中央部で検出した舟形土坑である。多くの館跡に伴う円形のピットに掘り込まれていた。平面形は南北に長い舟形を呈し，長辺4.70m，短辺0.80m，深さ22〜35cmを測る。断面形は逆三角形状をなし，底面は中央部が最も深く，南北両端に向って浅くなる。埋土は黒色粘質土を主体とし，

黄褐色火山灰土の小ブロックを若干含んでいた。遺物は弥生土器が数点出土している。

出土遺物

弥生土器（Fig.12－13・14）

13は壷の口縁部の破片で，口唇部両端には棒状工具による刻み目が施され，口唇部内側には径2㎜の円孔を8㎜間隔で穿っている。14は壷の底部とみられる破片で，底部はしっかりした平底で，外面にはナデ調整の後にヘラ磨きが施される。

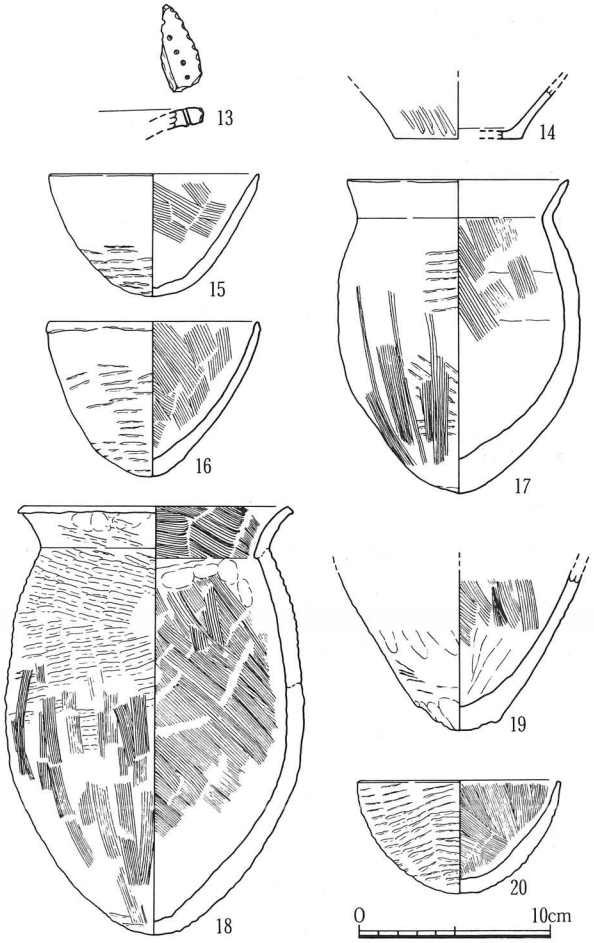


Fig. 12 弥生時代遺構出土遺物実測図

C 溝跡

SD－101（Fig.11）

前述のST－101に伴うとみられる溝跡で住居跡の上端から2.0～2.5m離れたところで検出した。住居をほぼこの間隔で巡るものとみられる。幅約30cm，深さ約23cmで，検出長は15.5mである。溝の東端部は中世の溝跡によって切られている。断面形は逆三角形状を呈し，埋土は黒色粘質土を主体に黄褐色火山灰土粒及び小ブロックを若干含んでいた。遺物は弥生土器の細片以外に完形の小形鉢2点，甕1点が出土している。

出土遺物

弥生土器（Fig.12－15～17）

15・16は小形の鉢で，断面逆三角形状を呈する。体部から口縁部にかけては斜め外上方に上がり，口唇部は細く仕上げる。外面には叩き，内面にはハケ調整が施される。17は甕で，底部は先尖底で，胴部は倒卵形を呈し，口縁部は外上方に短く上がる。胴部外面には叩きの後にハケ調整，内面にもハケ調整を施す。

D ピット

P－101（Fig.12）

調査区北部，ST－101の南東部，SD－101から東に約1.5mのところで検出した南北がやや長い円形のピットである。長径57cm，短径45cm，深さ19cmを測る。埋土は黒色粘質土を主体とする。土器は据えられた状態で，甕2点，鉢1点が出土した。

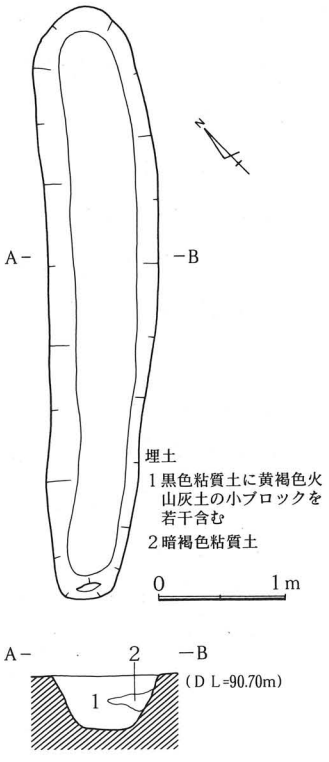


Fig. 13 ＳＫ－101

出土遺物

弥生土器（Fig.14－18～20）

18・19は甕で，それぞれ先尖底であり，19は胴部から上が欠損する。18は，倒卵形の胴部をなし，口縁部は短く外反する。外面には叩きの後にハケ調整，内面にもハケ調整を施す。19の底部外面には指頭で調整した痕が残る。20は小形の鉢で，口縁部は丸底をなした底部から内湾気味に上がる。外面には叩目，内面にはハケ目がそれぞれ残る。

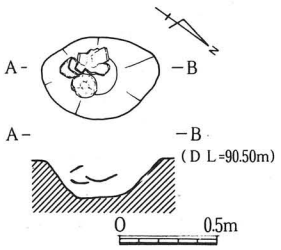


Fig. 14　P－101 遺物出土状態

②中世

A 掘立柱建物跡

SB－101

調査区南部で検出した梁間2間（4.65m），桁行3間（6.75m）の東西棟総柱建物である。館の中央部に位置する建物の内の一棟である。棟方向はN－53°－Wで，SB－102と隣接する。柱間寸法は梁間（南北）が2.1mと2.55m，桁行（東西）も2.1mと2.55mで身舎北半分は40cmほど広くなっている。柱穴は30～40cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は2点が復元できた。

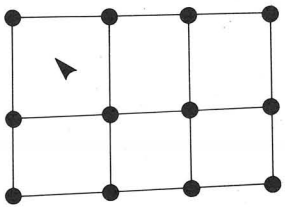


Fig. 15　S B－101

出土遺物

土師質土器（Fig.40－21・22）

21は杯で，口縁部を欠く。底部外面は回転糸切り底となり，外面は未調整，内面は回転ナデ調整の後，内底面のみにナデ調整を加える。22はやや大きめの小皿である。底部外面は回転糸切り底で，口縁部はやや外反気味に上がり，端部を丸く仕上げる。口縁部内外面とも回転ナデ調整で内底面にはナデ調整を加える。

SB－102

調査区南部で検出した梁間2間（3.90m），桁行3間（5.85m）の身舎に東庇付きの南北2間（3.90m），東西4間（6.75m）の東西棟総柱建物である。館の中央部に位置する建物の内一棟である。棟方向はN－53°－Wで，SB－101と隣接する。柱間寸法は梁間（南北）が1.95m等間隔，桁行（東西）は区々で西から2.30m，1.75m，1.80mで庇部分が0.90mとなっている。柱穴は径40～50cmの円形で，柱径は約25cmと推定され，SB－101のそれより一回り大きい。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は7点が復元できた。

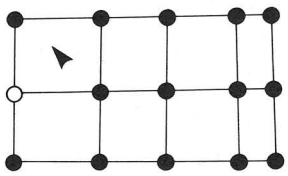


Fig. 16　S B－102

出土遺物

土師質土器（Fig.40－23～27）

23・24は全く同形態の杯で，底部は回転糸切り底となり，体部から口縁部にかけて斜め外上方に上がり，端部を丸く仕上げている。内外面とも回転ナデ調整が施される。25～27は小皿で，口縁部は斜め外上方に短く上がる。27の底部はやや切り高台風となっている。底部外面はすべて回転糸切り底で，内外面とも回転ナデ調整を施す。

白磁（Fig.40－28）

碗で口縁部の破片である。体部は内湾気味に上がり，口縁部で短く外反する。内外面には灰白色の釉を施釉する。

石製品（Fig.40－29）

叩石で，両面に比較的深い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。弥生の遺構等から混入したものと考えられる。

SB－103

調査区南部で検出した梁間2間（4.00m），桁行3間（6.00m）の東西棟建物である。SB－102の南隣に位置し，SB－104・105と重なっている。棟方向はN－53°－Wであり，SB－101・102と同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.60mと2.40m，桁行（東西）は区々で西から2.40m，2.00m，1.60mである。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はなかった。

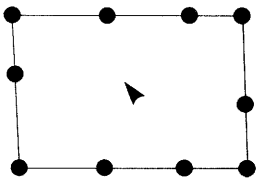


Fig. 17 ＳＢ－103

SB－104

調査区南部で検出した梁間2間（3.30m），桁行2間（3.70m）の南北棟建物である。SB－102の南隣に位置し，SB－103・105と重なっている。棟方向はN－37°－Eであり，SB－103にほぼ直行する。柱間寸法は梁間（東西）が1.50mと1.80m，桁行（南北）は1.60mと2.10mである。柱穴は径30～45cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを僅かに含むものである。遺物は1点が復元できた。

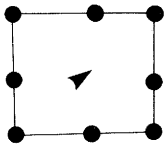


Fig. 18 ＳＢ－104

出土遺物

土師質土器（Fig.40－30）

小皿で，約1/3が残存していた。底部外面は回転糸切り底で，口縁部が外上方に短く上がる。口縁部内外面は回転ナデ調整，内底面は後でナデ調整を加える。

SB－105

調査区南部で検出した梁間2間（4.30m），桁行3間（5.90m）の身舎に南庇付きの南北3間（5.60m），東西3間（5.90m）の東西棟総柱建物である。SB－102の南隣に位置し，SB－103・104と重なっている。棟方向はN－56°－Wであり，SB－103・104とは棟方向をやや異にする。柱間寸法は梁間（南北）が2.15m等間隔，桁行（東西）は区々で西から1.60m，2.10m，2.20mで，庇幅は1.30mとなっている。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は約20cmと推定され，庇部分の柱穴の規模がやや小さい。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は2点が復元できた。

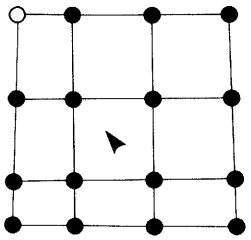


Fig. 19 ＳＢ－105

出土遺物

土師質土器（Fig.40－31・32）

2点とも同形態の杯である。切り高台風の底部から体部は内湾気味に上がり，口縁部で若干外傾する。口唇部は丸く仕上げる。底部外面は回転糸切り底，口縁部から内面にかけては回転ナデ調整，

内底面にはナデ調整を加える。体部外面は未調整である。

SB－106

調査区南部で検出した梁間2間（3.90m），桁行3間（6.10m）の身舎に東庇付きの南北2間（3.90m），東西4間（6.70m）の東西棟建物で，身舎東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－102の東隣に位置し，SB－107～110と重なっている。棟方向はN－52°－Wであり，SB－101・102とほぼ同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.60mと1.70m，桁行（東西）は区々で西から2.60m，1.50m，2.00mで庇部分が0.60mである。柱穴は30～40cmの円形で，柱径は径約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はなかった。

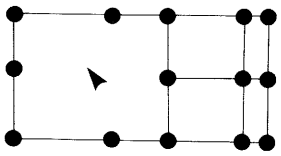


Fig. 20　S B－106

SB－107

調査区南部で検出した梁間2間（3.90m），桁行3間（6.60m）の東西棟建物で，東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－102の東隣に位置し，SB－106・108～110と重なっている。棟方向はN－53°－Wであり，SB－101・102と同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.60m～2.30m，桁行（東西）は2.20m等間隔である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はなかった。

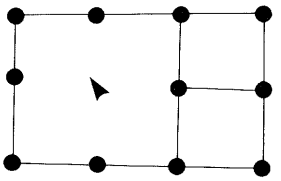


Fig. 21　S B－107

SB－108

調査区南部で検出した梁間2間（3.50m），桁行3間（6.10m）の東西棟建物で，SB－107同様東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－102の東隣に位置し，SB－106・107・109・110と重なっている。棟方向はN－52.5°－Wであり，SB－101・102とほぼ同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.60mと1.90m，桁行（東西）は区々で東から1.80m，2.40m，1.90mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はなかった。

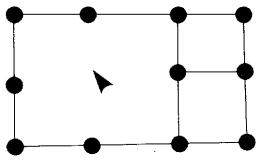


Fig. 22　S B－108

SB－109

調査区南部で検出した梁間2間（4.00m），桁行2間（4.60m）の東西棟建物で，東妻柱の柱穴1個が未検出である。SB－102の東隣に位置し，SB－106～108・110と重なっている。棟方向はN－53°－Wであり，SB－101・102と同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.90mと2.10m，桁行（東西）は2.10mと2.50mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを僅かに含むものである。復元できた遺物はなかった。

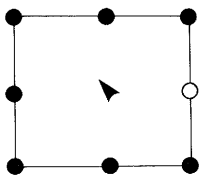


Fig. 23　S B－109

SB－110

調査区南部で検出した梁間2間（2.30m），桁行2間（2.90m）の小さな南北棟建物で，北妻柱の柱穴

1個が未検出である。SB－102の東隣に位置し，SB－106～109と重なっている。棟方向はN－38°－Eであり，SB－101・102の棟方向にほぼ直行する。柱間寸法は梁間（東西）が1.10mと1.20m，桁行（南北）は1.40mと1.50mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを僅かに含むものである。復元できた遺物はなかった。

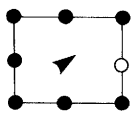


Fig. 24　S B－110

SB－111

調査区中央部で検出した梁間2間（3.80m），桁行3間（5.90m）の東西棟建物である。SB－101の北隣に位置し，SB－112と重なっている。棟方向はN－52°－Wであり，SB－101・102とほぼ同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.50m～2.30mと区々で，桁行（東西）は西側2間が1.80m，東側1間が2.30mである。柱穴は径25～35cmの円形で，柱径は10～15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はなかった。

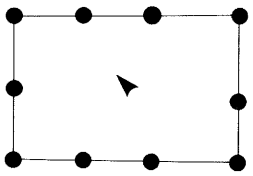


Fig. 25　S B－111

SB－112

調査区中央部で検出した梁間2間（3.40m），桁行2間（5.00m）の東西棟の身舎に北側1間の張出が付く建物である。SB－101の北隣に位置し，SB－111と重なっている。棟方向はN－58°－Wであり，SB－101・102の棟方向とはやや異なる。柱間寸法は梁間（南北）が1.60mと1.80mで，桁行（東西）は2.40mと2.60mであり，張出は南北2.00～2.20m，東西2.60mである。柱穴は身舎が径30～35cmの円形で柱径は径20～25cm，張出が径20～25cm，柱径は10～15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを僅かに含むものである。復元できた遺物はなかった。

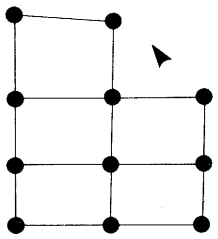


Fig. 26　S B－112

SB－113

調査区中央部東よりで検出した梁間2間（3.60m），桁行4間（6.30m）の東西棟の身舎に北側1間の張出が付く建物で建替えが認められる。また，身舎の東から2間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－112の東隣に位置し，SB－114と重なっている。棟方向はN－50°－Wであり，SB－101・102の棟方向とはやや異なる。柱間寸法は梁間（南北）が1.80m等間隔で，桁行（東西）は東西1間分が1.50m，中1間分が1.65mであり，張出は南北が2.10m，東西が西から1.35m，1.65m，1.65mとなっている。柱穴は身舎が径30～35cmの円形で柱径は20～25cm，張出が径20～25cm，柱径は10～15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は3点が復元できた。

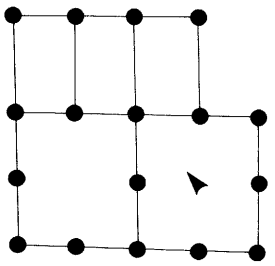


Fig. 27　S B－113

出土遺物

土師質土器（Fig.40－33）

小皿で，底部外面は回転糸切り底で，口縁部は斜め上方に短く上がる。口縁部内外面とも回転ナ

デ調整，内底面は後でナデ調整を加える。

青磁（Fig.40－34）

碗で口縁部のみ残存する。外面には鎬蓮弁文がみられ，全面に緑色釉を施釉する。

土製品（Fig.40－35）

紡錘形の土錘で，長さ5.6cm，幅1.5cm，重さ8.1gで，孔径は0.6cmを測る。

SB－114

調査区中央部やや東寄りで検出した梁間2間（3.30～3.50m），桁行3間（4.80～5.10m）と歪みのある東西棟建物で，西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－113と重なっている。棟方向はN－51～58°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.65mと1.85m，桁行（東西）は1.35～2.25mと区々である。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は3点が復元できた。

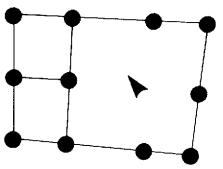


Fig. 28　S B－114

出土遺物

土師質土器（Fig.40－36・37）

2点とも小皿である。底部外面は回転糸切り底で，口縁部は斜め外上方へ短く上がる。口唇部は36が丸く，37が細く仕上げられる。器面は底部外面以外回転ナデ調整とみられる。

土製品（Fig.40－38）

紡錘形の土錘で，長さ4.4cm，幅1.5cm，重さ7.5gで，孔径は0.6cmを測る。

SB－115

調査区東部で検出した梁間2間（3.30～3.60m），桁行2間（4.70～4.90m）の歪みのある東西棟総柱建物である。SB－113の東隣，SB－116の西隣に位置する。棟方向はN－58～59°－Wであり，SB－101・102とほぼ同じ棟方向を呈す。柱間寸法は梁間（南北）が1.50mと1.80mで，桁行（東西）は東西は1.90～3.00mと区々である。西1間分が東1間分の約1.5倍あり，SB－114など間仕切りを持つ建物の縮小形とみることもできよう。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は20～25cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

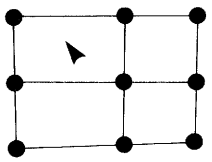


Fig. 29　S B－115

SB－116

調査区東部で検出した梁間2間（3.60～3.80m），桁行3間（5.80～5.85m）とやや歪みのある南北棟建物で，北から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－115の東隣に位置する。棟方向はほぼN－34°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が1.80mと2.00m，桁行（南北）は1.65～2.50mと区々であるが中央部の柱間が南北両1間分より約1.5倍広くなっている。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は約20～25cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

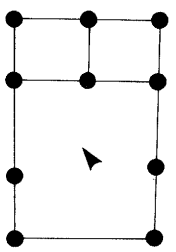


Fig. 30　S B－116

SB－117

調査区東部で検出した梁間2間（3.00m），桁行3間（4.50m）と若干歪みのみられる東西棟建物で，西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB－116の南隣に位置する。棟方向はほぼN－58°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.50m等間隔，桁行（東西）は1.20mと2.10mで中央部の柱間が東西両1間分より1.75倍広くなっている。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は1点が復元できた。

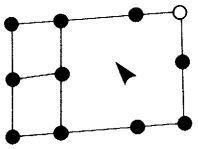


Fig. 31 ＳＢ－117

出土遺物

土製品（Fig.40－39）

紡錘形の土錘で，長さ4.9cm，幅1.6cm，重さ11.4gで，孔径は0.45cmを測る。

SB－118

調査区北部で検出した梁間2間（4.30m），桁行2間（4.90～5.00m）の身舎に東庇付きの南北2間（4.30m），東西3間（6.10～6.20m）と若干歪みがみられる東西棟建物で，北側に1間分の張出を持つ。館の北隣に位置し，SB－120と重なる。棟方向はほぼN－46°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が2.10mと2.20mで，桁行（東西）は2.10～2.80mで庇部分は北で1.1mと南で1.3mの出である。張出は北側柱西1間分が北に1.25m出ている。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は2点が復元できた。

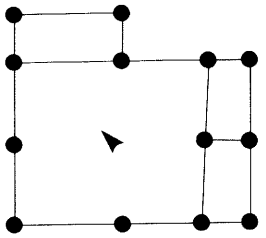


Fig. 32 ＳＢ－118

出土遺物

土師質土器（Fig.40－40）

杯で口縁部を欠損する。底部外面は回転糸切り底で，体部はやや内湾気味に上がる。内面には回転ナデ調整を施した後内底面にナデ調整を加える。外面は未調整である。

石製品（Fig.40－41）

河原石を利用した叩石で，欠損部分も多いが，中央部には比較的深い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。弥生時代の遺構からの混入とみられる。

SB－119

調査区北部で検出した梁間1間（1.65～1.80m），桁行2間（3.40m）と若干歪みのみられる東西棟建物である。SB－118の北隣に位置する。棟方向はほぼN－43.5°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.65mと1.80m，桁行（東西）は1.00～2.40mと区々である。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを比較的多く含むものである。復元できた遺物はない。

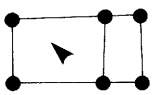


Fig. 33 ＳＢ－119

SB－120

調査区北部で検出した梁間1間（2.25m），桁行2間（3.80～3.90m）と若干歪みのみられる南北棟建物である。SB－119の南隣に位置し，SB－118と重なっている。棟方向はほぼN－39°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が2.25m，桁行（南北）は1.80～2.10mと区々である。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は約20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は1点が復元できた。

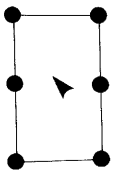


Fig. 34　S B－120

出土遺物

土師質土器（Fig.40－42）

杯で底部は平らで，口縁部は体部から内湾気味に外上方に上がり，口唇部を丸く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部から内面にかけては回転ナデ調整を施し，内底面に後でナデ調整を加える。外面は未調整である。

SB－121

調査区北部で検出した梁間2間，桁行2間（4.70m）ではないかとみられる東西棟建物である。SB－119の東隣に位置する。棟方向はほぼN－40.5°－Wである。柱間寸法は桁行（東西）が2.30mと2.40mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

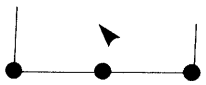


Fig. 35　S B－121

SB－122

調査区北東部で検出した梁間2間（2.30～2.40m），桁行2間（5.25m）の南北棟建物であり，南から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。北妻柱の柱穴1個が未検出である。SB－118の南側に位置する。棟方向はほぼN－34°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が1.10m～2.40m，桁行（南北）は1.50～2.10mと区々である。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

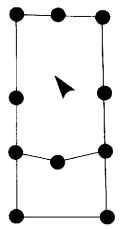


Fig. 36　S B－122

SB－123

調査区北部で検出した梁間2間（2.10～2.25m），桁行1間（2.75m）と若干歪みのみられる東西棟建物である。SB－118の北隣に位置する。棟方向はほぼN－53°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.00～2.25m，桁行（東西）は2.75mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

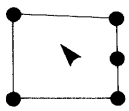


Fig. 37　S B－123

SB－124

調査区西端部で検出した梁間2間（3.00m），桁行3間（4.95m）の東西棟建物で，南側柱は未検出である。館の西側，SB－125の北側に位置する。棟方向はN－58°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）

が1.50m等間隔，桁行（東西）は1.50mと1.95mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

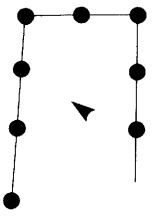


Fig. 38　S B－124

SB－125

調査区西部で検出した梁間2間（2.15m），桁行3間（2.60～3.00m）とやや歪みのある東西棟建物であるが，北側が3間であるのに対し南側は1間と変則である。館の西側，SB－124の南側に位置する。棟方向はN－56°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.00mと1.15mで，桁行（東西）は1.00mと2.60mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmと推定される。丁度，建物内には，切り合った状態の2個のピットが2組並列して検出されており，それらを覆っていたのではなかろうか。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

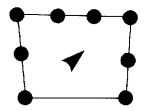


Fig. 39　S B－125

B 塀跡及び柵列

SA－101

調査区中央部で検出したコの字形をなす塀である。南側ではSB－101の北側柱と約60cmの間隔で並列している。13間分（25.00m）を検出し，柱間は1.50～2.10mである。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は2点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.41－43～45）

3点とも杯である。43は体部から口縁部にかけてやや内湾気味に上がり，44・45のそれは上外方にほぼ真直ぐ上がる。3点とも底部外面は回転糸切り底で，口縁部から内面にかけて回転ナデ調整，内底面は後からナデ調整を施す。

SA－102

調査区中央部で検出した南北塀（N－42°－E）である。SD－102・103と約1.8mの間隔でSA－103と共に並行して設置され，館の西の境をなすものとみられる。7間分（14.80m）を検出し，柱間は1.75～2.70mである。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－103

調査区中央部で検出した南北塀（N－40°－E）である。SD－102・103と約1.8mの間隔でSA－102と共に並行して設置され，館の西の境をなすものとみられる。3間分（6.00m）を検出し，柱間は1.90～2.10mで，さらに南側に延びるものと考えられる。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－104

調査区中央部，館の北部で検出したL字形の塀である。SB－111，SA－101とは切り合っている。

5間分（10.40m）を検出し，柱間は1.80～2.70mである。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－105

調査区中央部，館の北部で検出した南北塀（N－35°－E）である。SB－113・114の西側，約1.50m

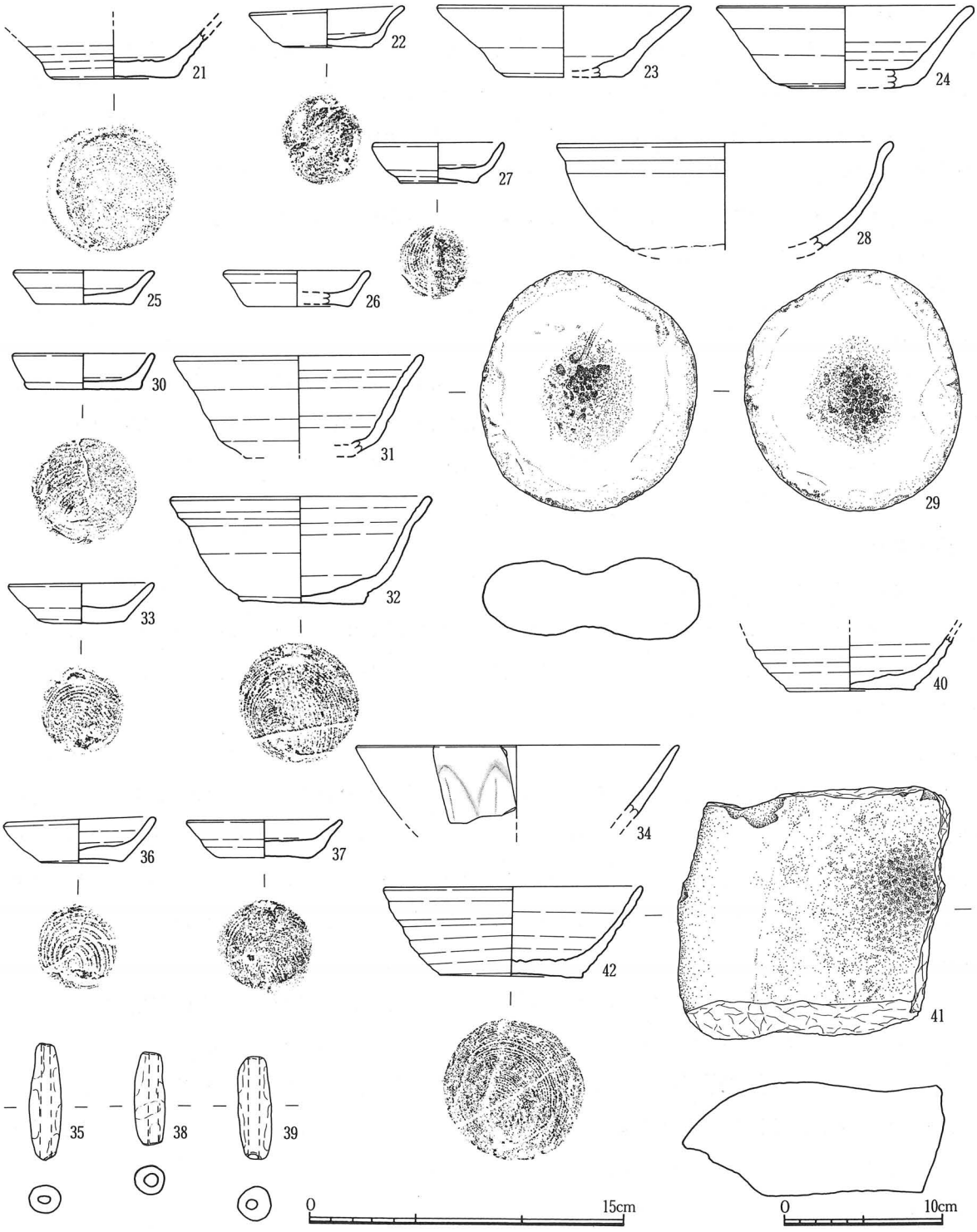


Fig. 40　掘立柱建物跡出土遺物実測図

の所に設置されている。4間分（7.80m）を検出し，柱間は1.80mと2.10mである。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.41－46）

杯で口縁部を欠損する。底部外面は回転糸切り底で，体部は内湾気味に上がる。内外面には回転ナデ調整が施される。

SA－106

調査区中央部，館の北端で検出した小規模な東西塀（N－54°－W）である。SB－104の北側に位置する。2間分（3.30m）を検出し，柱間は1.50mと1.80mである。柱穴は径25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は1点が復元できた。

SA－107

調査区南部，館の中央部東寄りで検出したL字形の塀である。SB－107の丁度北側と東妻から約60cm離して設置されていることから建物との関連性が考えられる。6間分（11.70m）を検出し，柱間は1.40～2.30mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は約20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－108

調査区南部，館の中央部東寄りで検出した東西塀（N－42.5°－W）である。SB－106・107の南側に位置するが，方向は異なる。6間分（5.70m）を検出し，柱間は0.70～1.10mである。柱穴は径20～25cmの円形で，柱径は約10cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は1点が復元できた。

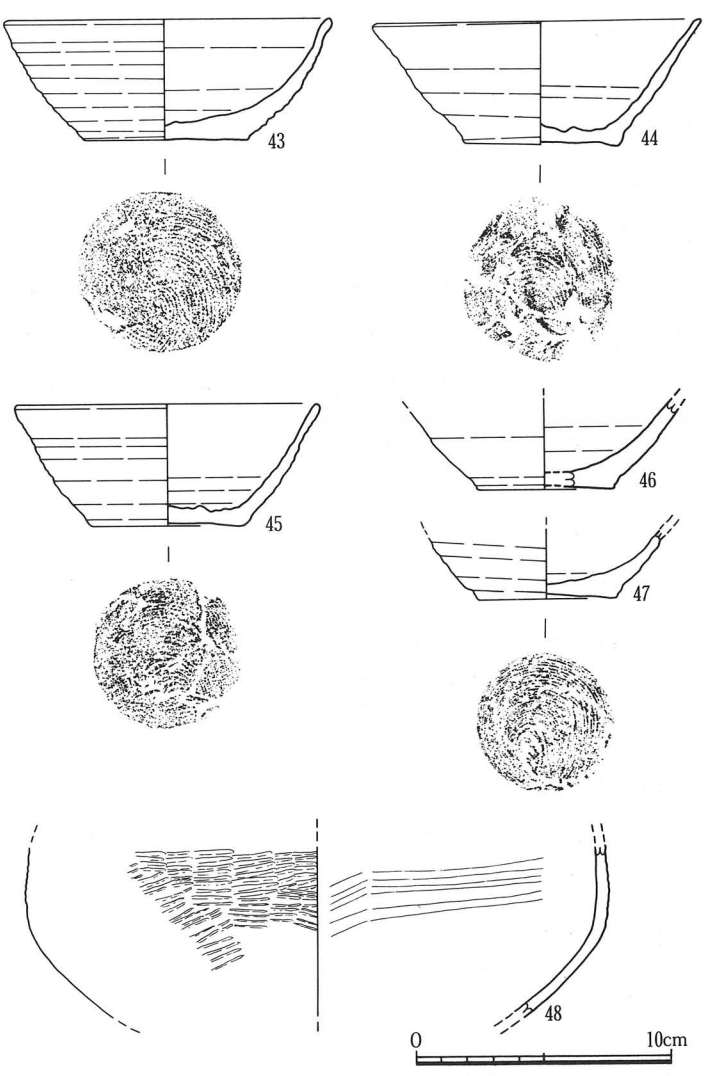


Fig. 41 塀跡出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器（Fig.41－47）

杯で口縁部を欠損する。底部は平らで，体部は内湾気味に上がる。底部外面は回転糸切り底である。他は器面が摩耗しているため調整不明である。

SA－109

調査区北部，館の北側で検出した小規模な南北塀（N－48°－E）である。SB－119の北側に隣接する。2間分（3.00m）を検出し，柱間は1.40mと1.60mである。柱穴は径30cmの円形で，柱径は約20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－110

調査区西部，館の西側で検出した東西塀（N－64°－E）である。SB－124の西側に位置する。4間分（6.35m）を検出し，柱間は1.50～1.65mである。柱穴は径20cmの円形で，柱径は約10cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.41－48）

鍋の胴部の破片である。外面には叩目が残り，煤が付着し，内面はヨコ方向のハケ調整の後ナデ調整を加える。

SA－111

調査区西部，館の西側で検出した東西塀（N－61°－W）である。SB－124の北東側に位置する。4間分（8.05m）を検出し，柱間は1.30～2.90mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

C 土坑

SK－102（Fig.42）

調査区中央部で検出した方形土坑で，丁度SA－101の内側に位置する。長辺2.35m，短辺1.45m，深さは6cmと浅い。長軸方向はN－45°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。遺物は3点復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.43－49）

器高が3.7cmと低い杯である。口縁部は体部から斜め外上方に上がり，口唇部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。

東播系須恵器（Fig.43－50）

口縁部の破片で杯ではないかとみられる。口唇部は丸く仕上げられる。

土製品（Fig.43－51）

紡錘形の土錘で，長さ4.3cm，幅1.4cm，重さ7.3gで，孔径は0.45cmを測る。

SK－103

調査区中央部で検出した不整楕円形土坑で，丁度SB－101の下に位置する。長径2.40m，短径1.45m，深さは21cmである。長軸方向はほぼN－52°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。遺物は1点復元できた。

出土遺物

土製品（Fig.43－52）

紡錘形の土錘であるが，両端が欠損する。残存長2.7cm，幅1.3cmで，孔径は0.6cmを測る。

SK－104

調査区中央部で検出した不整形土坑で，丁度館の中央に位置する。長辺2.40m，短辺2.30m，深さは5～11cmで底面は東側に傾斜する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒を僅かに含むものであった。遺物は1点復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.43－53）

杯で底部のみ残存する。底部は切り高台となり，外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。

SK－105

調査区中央部で検出した隅丸方形土坑で，SK－106の南隣に位置する。長辺1.40m，短辺0.90m，深さは22cmである。長軸方向はN－65°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。遺物は1点復元できた。

出土遺物

常滑（Fig.43－54）

口縁部の破片である。口縁部は内傾して上がった後，端部でN字状をなす。

SK－106（Fig.42）

調査区中央部で検出した長楕円形土坑で，SK－105の北隣に位置する。長径1.55m，短径1.07m，深さは16cmである。長軸方向はN－54°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰

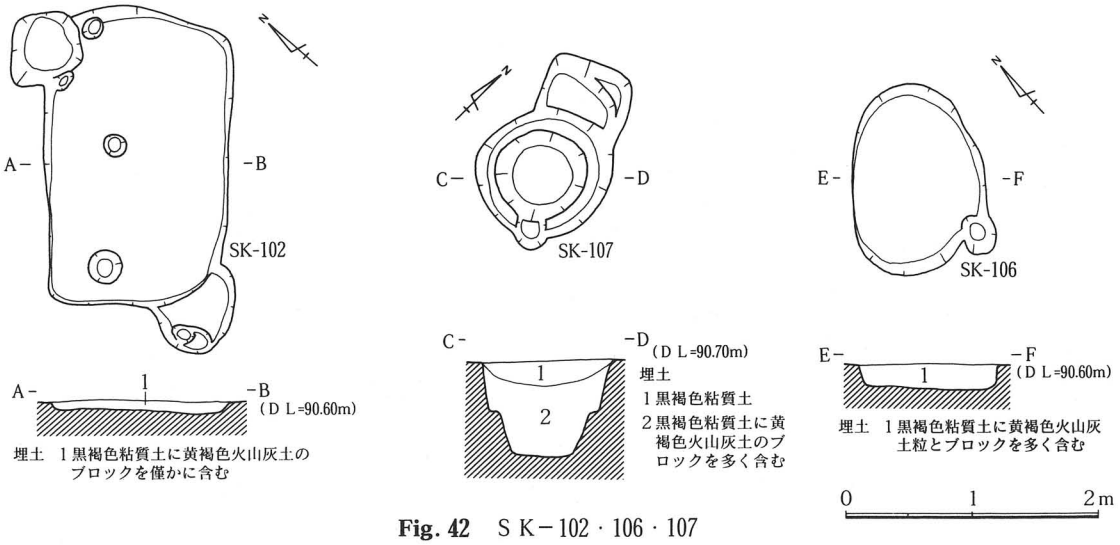


Fig. 42 ＳＫ－102・106・107

土粒とブロックを多く含むものであった。復元できた遺物はない。

SK－107（Fig.42）

調査区中央部で検出した円形土坑で，SB－108の北側柱と切り合う。遺構は2段掘りとなっており，径1.05m，深さは74cmを測る。埋土は2層に分層され，上層は黒褐色粘質土で，下層は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを多く含むものであった。復元できる遺物はない。

SK－108

調査区南部で検出した隅丸方形土坑で，SB－103の東隣に位置する。長辺1.40m，短辺0.95m，深さは33cmである。長軸方向はN－50°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。復元できる遺物はない。

SK－109

調査区東部で検出した舟形土坑で，SA－108の東隣に位置する。長辺3.50m，短辺0.60m，深さは14cmで，中央に向かって傾斜している。長軸方向はN－50°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを比較的多く含むものであった。復元できる遺物はない。

SK－110

調査区西部で検出した方形土坑で，SB－124と重なる。長辺1.40m，短辺1.30m，深さは9cmである。長軸方向はN－57°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを若干含むものであった。復元できる遺物はない。

SK－111

調査区西部で検出した不整楕円形土坑で，SB－124と重なる。長径1.80m，短辺1.17m，深さは7cmで西側に向って傾斜する。長軸方向はN－17°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを若干含むものであった。復元できる遺物はない。

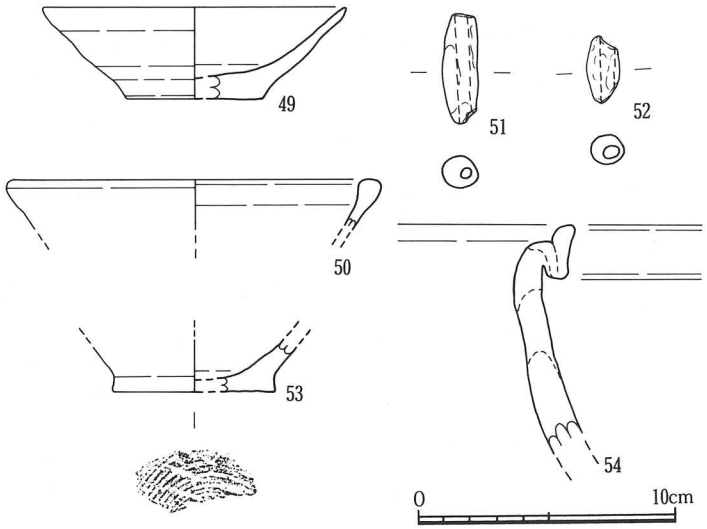


Fig. 43　土坑出土遺物実測図

D 溝跡

SD－102（Fig.49）

館を囲む内側の溝で，掘り直している（SD－103）。西側では外側に拡張しているため重複関係が判明するが，北側ではほぼ同じ位置に掘り直したとみられ当初の溝は残っていない。幅約70cm，深さ20cm前後で，北に向って傾斜し，約30mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含むものであった。遺物は，SB－101の西裏側の部分を中心に多量の土師質土器が投棄された状態で出土した。

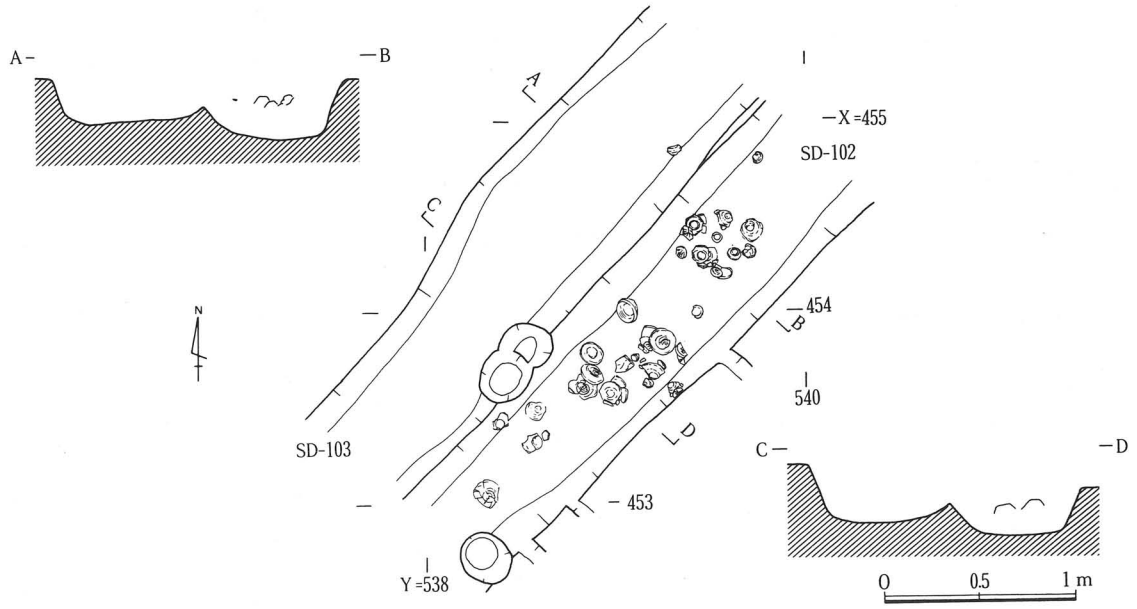


Fig. 44 ＳＤ－102 遺物出土状態，ＳＤ－103

出土遺物

土師質土器（Fig.44～46－55～108）

55～91は杯である。形態的にも調整技法でもほぼ同じで大きな違いはみられない。強いて言えば，口径に比べ器高が低い，やや扁平な感じを与えるもの（55～57）が数点散見される。底部は外面の回転糸切りによってほぼ平らで，体部から口縁部にかけては外上方にほぼ直線的に上がる。口唇部は比較的丸く仕上げている。口縁部外面から内面にかけては回転ナデ調整が施され，体部外面は未調整となっている。内底面にナデ調整を加えるものはほとんどない。口径は12～13cm，器高は4～5cm，底径5～7cmである。92～108は小皿である。杯同様ほぼ同じ形態，調整技法であり，際だった差異は認められない。底部は外面の回転糸切りによってほぼ平らで，口縁部は外上方に短く上がる。口縁部から内面にかけては回転ナデ調整が施される。また，底部外面に板状圧痕が残るもの（98・103・107）がある。口径は7cm前後，器高は1.6～2.0cm，底径は4～5cmである。

東播系須恵器（Fig.47－109）

魚住窯のものとみられる甕で，口縁部の一部が残存する。胴部は緩やかに上がり，口縁部で大きく外反し，端部は細く仕上げている。肩部外面には叩目が残り，内面にはハケ調整の後ナデ調整を加える。口縁部はヨコナデ調整である。

備前（Fig.47－110・111）

110は擂鉢で，内面には6本単位の条線が残る。111は甕の底部で，外面はナデ調整，内面もナデ調整であるが，ヘラナデと指ナデの痕が残る。

青磁（Fig.47－112）

碗で，口縁部の一部が残存する。外面には鎬蓮弁文が残り，器面には緑色釉を施釉する。

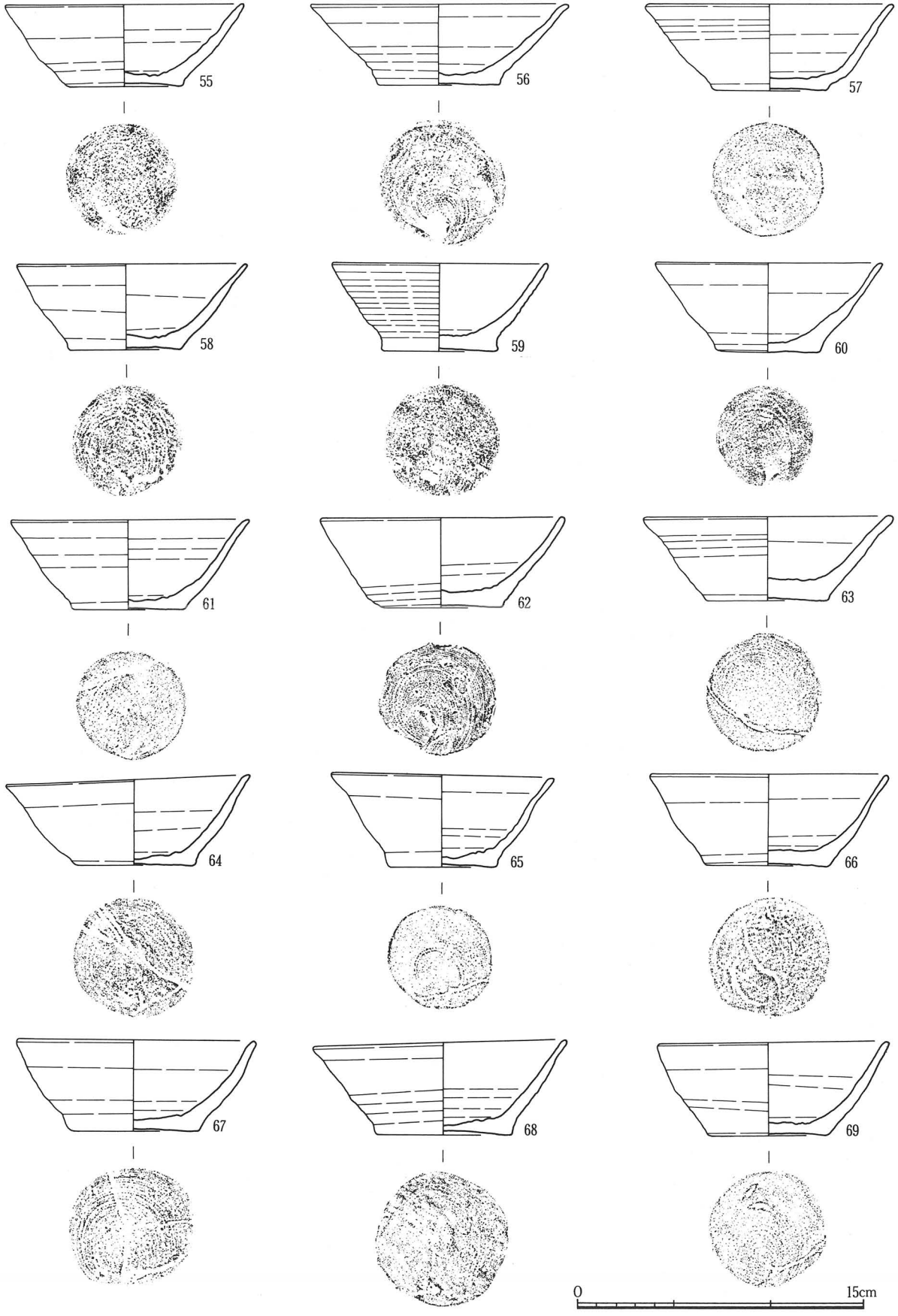


Fig. 45 ＳＤ－102 出土遺物実測図1

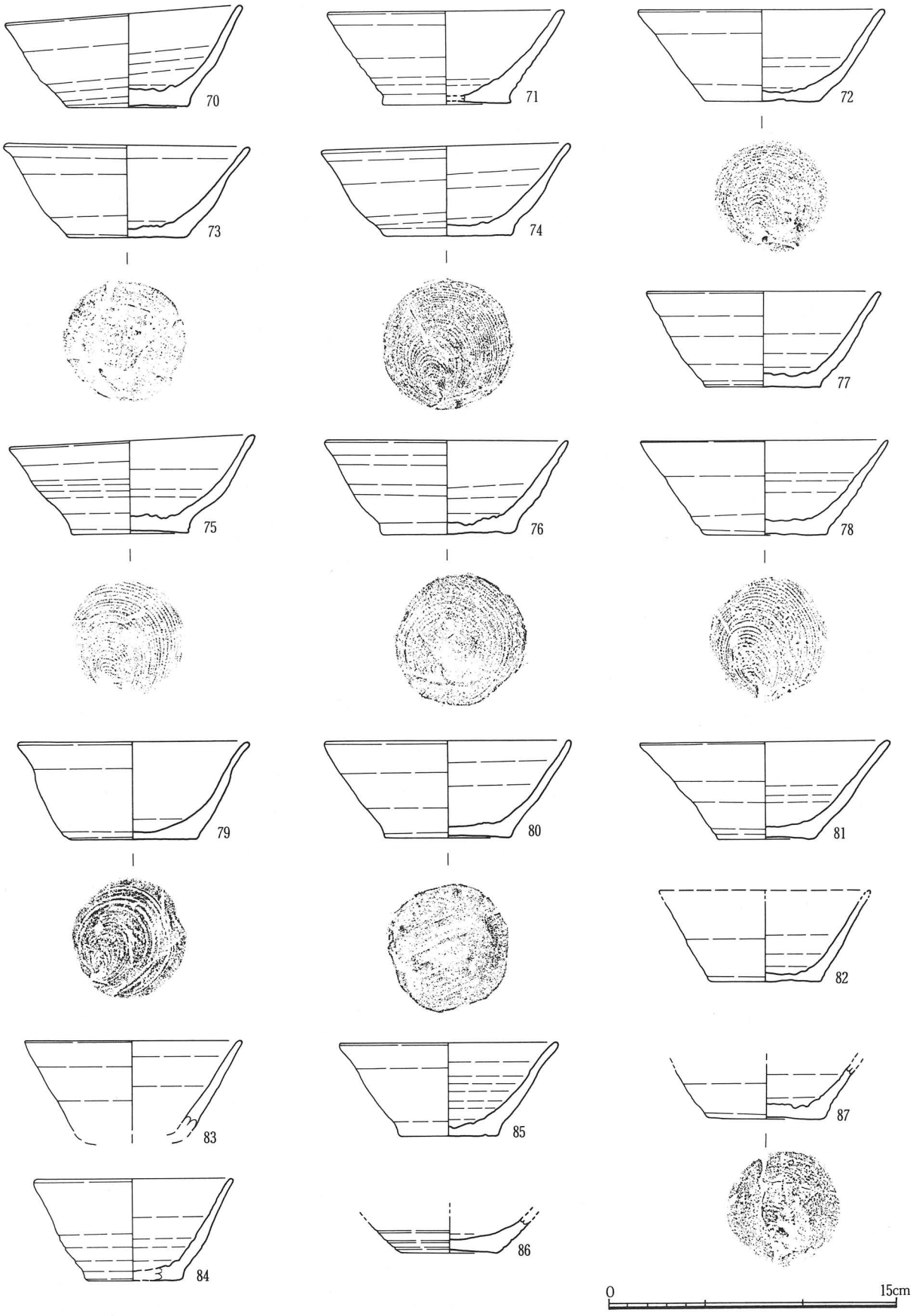


Fig. 46 ＳＤ－102 出土遺物実測図2

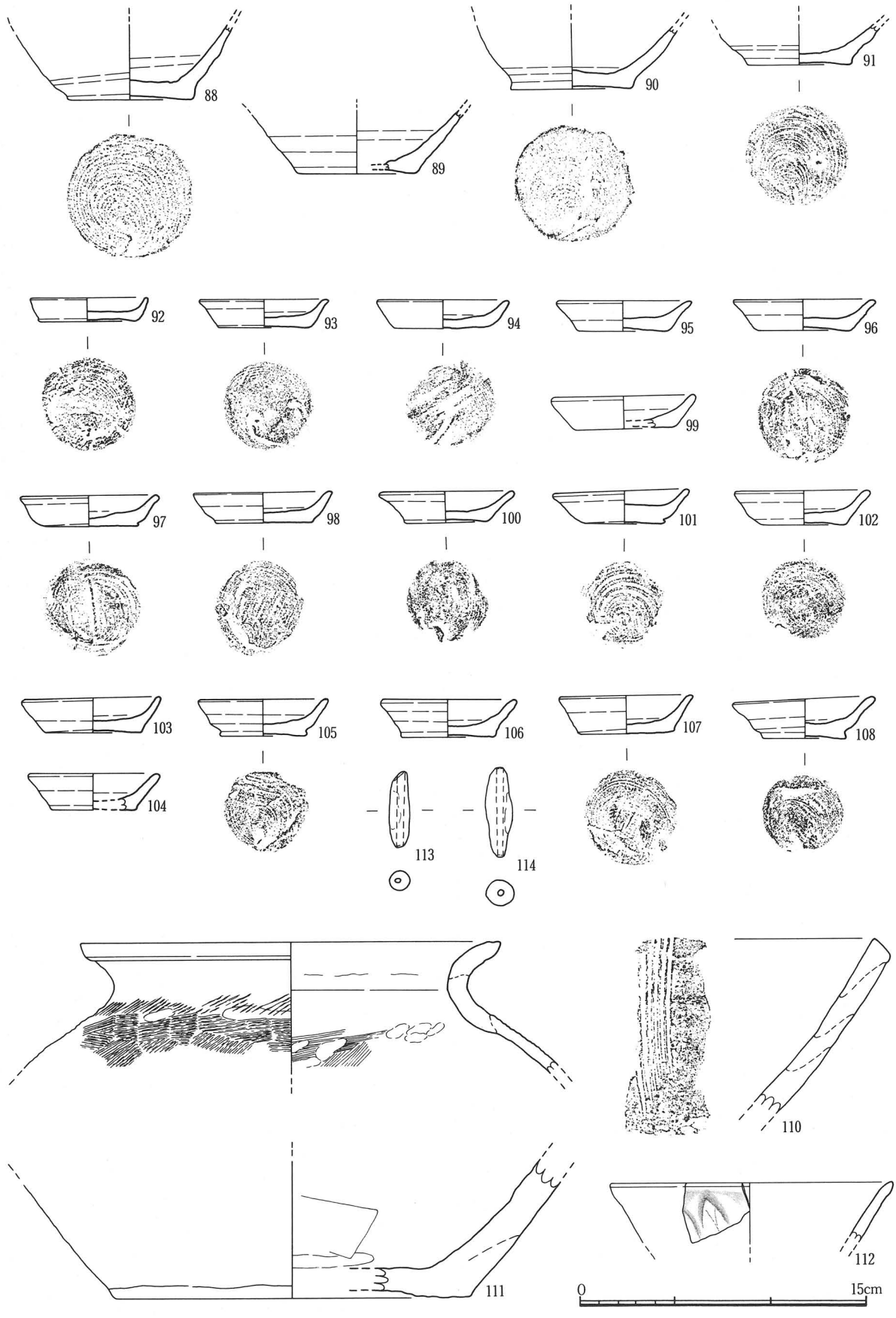


Fig. 47　ＳＤ－102 出土遺物実測図3

土製品（Fig.47－113・114）

2点とも紡錘形の土錘で，113は長さ3.9cm，幅1.1cm，重さ3.4g，孔径0.3cm，114は長さ4.7cm，幅1.4cm，重さ6.2g，孔径0.3cmである。

SD－103（Fig.49）

館を囲む内側の溝で，掘り直した方の溝であり，コの字形を呈する。西側ではSD－102の外側に

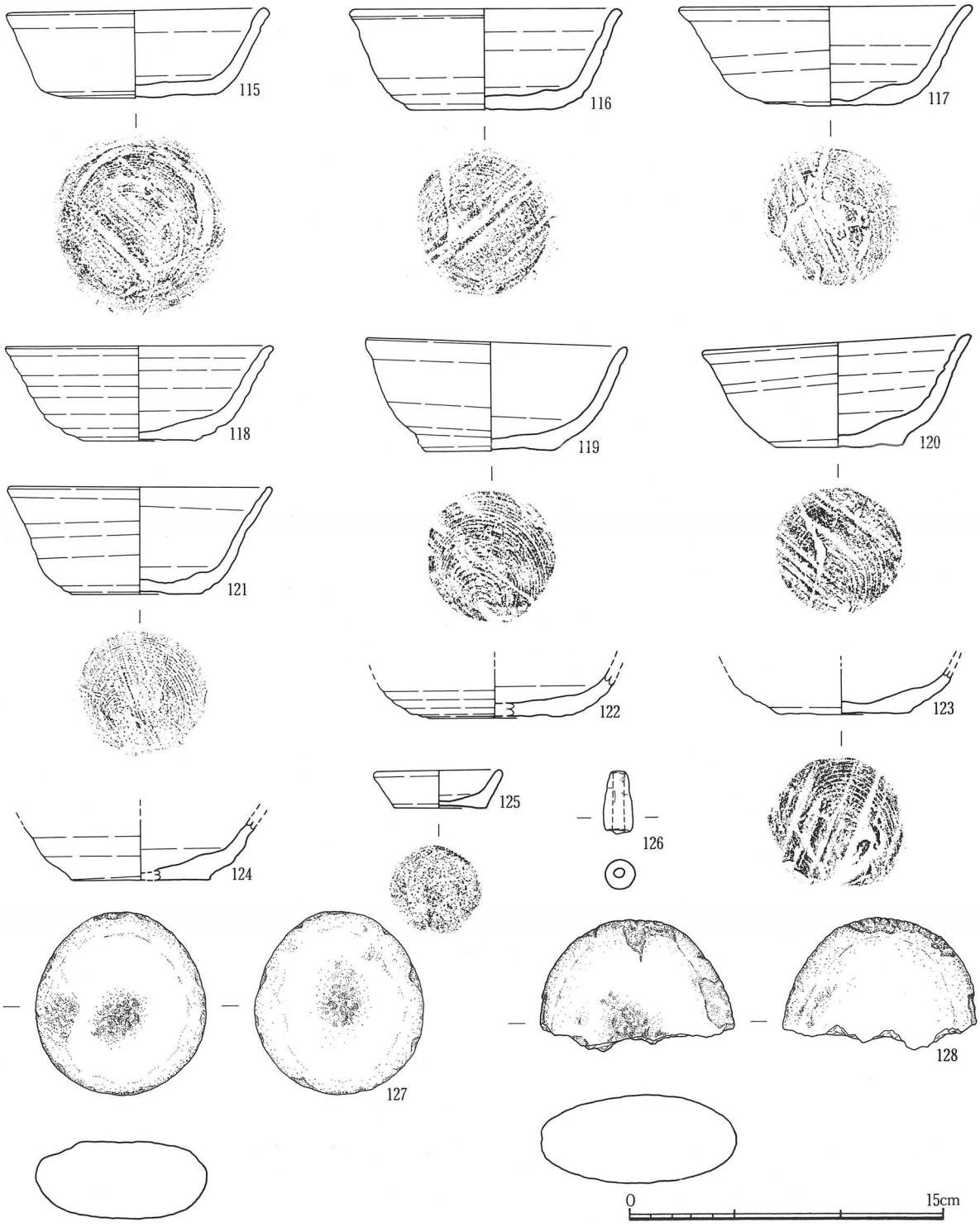


Fig. 48 ＳＤ－103 出土遺物実測図

拡張し，北側ではほぼ同じ位置に掘り直している。幅約1.2m，深さ50cm前後で，北に向って傾斜しており，約60mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを若干含むものであった。遺物は，SB－101に比べ，少なく14点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.48－115～125）

115～124は杯である。口径に対し底径の割合が大きいもの（115・116）がみられる。115・116は底部は外面の回転糸切りにより平らで，体部から口縁部にかけて上外方に上がり，端部は内傾する面をなす。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整を施した後，内底面にナデ調整を加える。他の杯も底部は回転糸切り底で，体部から口縁部にかけて外上方に上がり，端部は丸くないし細く仕上げられる。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整で，体部外面は未調整である。125は小皿である。底部外面は回転糸切り底である。

土製品（Fig.48－126）

紡錘形の土錘であるが，約半分が欠損する。幅1.4cm，孔径0.6cmである。

石製品（Fig.48－127・128）

河原石を使用した叩石で，両面及び側面に弱い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。128は約半分が欠損する。

SD－104（Fig.49）

館を囲む外側の溝で，西側では約6mの間隔を取っている。内側の溝のような拡張の跡はみられない。また，北側ではSD－111に切られており，SD－103のようにコの字形をなしていたかはっきりしないが，位置関係からみてSD－105に繋がる可能性も考えられ，SD－103と同じ形状であったものとみられる。幅約80cm，深さ40cm前後で，北に向って傾斜し，約27mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを若干含むものであった。遺物は8点が復元できた。

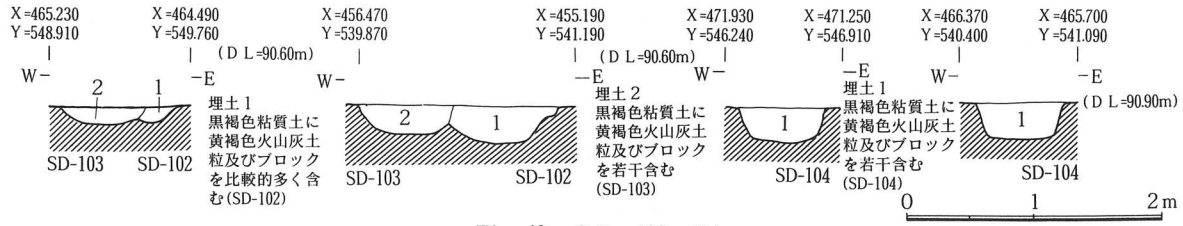


Fig. 49　SD－102～104

出土遺物

土師質土器（Fig.50－129～134）

129・130は杯である。双方とも口縁部が欠損する。129の体部は内湾気味に上がり，130の体部は真直ぐ上がる。底部外面はそれぞれ回転糸切り底である。131～134は小皿である。底部外面は回転糸切りであり，口縁部は斜め上方に短く延びる。134は口径が8.0cmとやや大きめの小皿である。

瓦質土器（Fig.50－135）

羽釜で鍔の部分が残る。鍔は水平に約2cm延びる。器面にはヨコナデ調整がみられ，鍔から下には煤が付着する。

SD－105

調査区北部，SD－104の北隣で検出した溝である。溝の西側をSD－111に掘削されているが，位置関係からみてSD－104と同一の可能性が考えられる。幅約60cm，深さ20cm前後で，東に向って傾斜し，約16mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを僅かに含む程度であった。遺物は2点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.50－136・137）

2点とも杯である。136は底部は平らで，体部から口縁部にかけて内湾気味に上がり，端部は丸く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。口縁部から内面にかけては回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。137も底部は平らで，口縁部は体部から外上方へ上がり，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底であり，口縁部から内面にかけては回転ナデ調整を施す。

SD－106

調査区東部で検出した鍵形に屈曲している南北溝である。溝はSD－107によって切られる。検出位置からみてSD－103との関係も考慮され，館を囲む溝となる可能性も考えられる。幅約70cm，深さ18cm前後で，北に向って傾斜し，約12mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを若干含むものであった。遺物は4点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.50－138）

小皿である。底部は外面の回転糸切りによって平らで，口縁部は屈曲して上方に短く上がる。

土製品（Fig.50－139）

紡錘形の土錘であり，長さ4.9cm，幅1.4cm，重さ8.1g，孔径0.45cmである。

東播系須恵器（Fig.50－140）

こね鉢で底部を欠く。体部は斜め上方に上がり，口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部にはヨコナデ調整，他には指ナデ調整の痕が残る。

青磁（Fig.50－141）

碗で口縁部の一部が残る。表面には0.5㎜の厚さに灰オリーブ色の釉を施釉する。

SD－107

調査区東部で検出した南北溝で，SD－106を切って掘り込まれていた。幅1.0～1.25m，深さ24㎝前後で北に向って傾斜し，約8.5mを検出した。断面は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを多く含むものであった。復元できた遺物はない。

SD－108

調査区中央部北寄りで検出した溝である。溝はSD－102・103に切られている。幅約30cm，深さ8cm前後と浅く，約9.7mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，

黄褐色火山灰土粒及びブロックを僅かに含む程度であった。復元できた遺物はない。

SD－109

調査区中央部北寄りで検出した溝である。溝はSD－103に両端を切られている。幅約50cm，深さ10cm前後で，約6.0mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを僅かに含む程度であった。復元できた遺物はない。

SD－110

調査区中央部北寄りで検出した溝である。溝はSD－103に南側を切られている。幅約20cm，深さ5cm前後と極めて浅く，約3.2mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを若干含む程度であった。復元できた遺物はない。

SD－111（Fig.51）

調査区北部で検出した溝である。溝はSD－104・105を切って東西に延び，さらに西側は発掘区外に続いている。幅約1m，深さ50cm前後で，約38mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含むものであった。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

備前（Fig.50－142）

擂鉢で口縁部の破片である。外上方に上がる体部から口縁部は屈曲して真上に短く上がる。

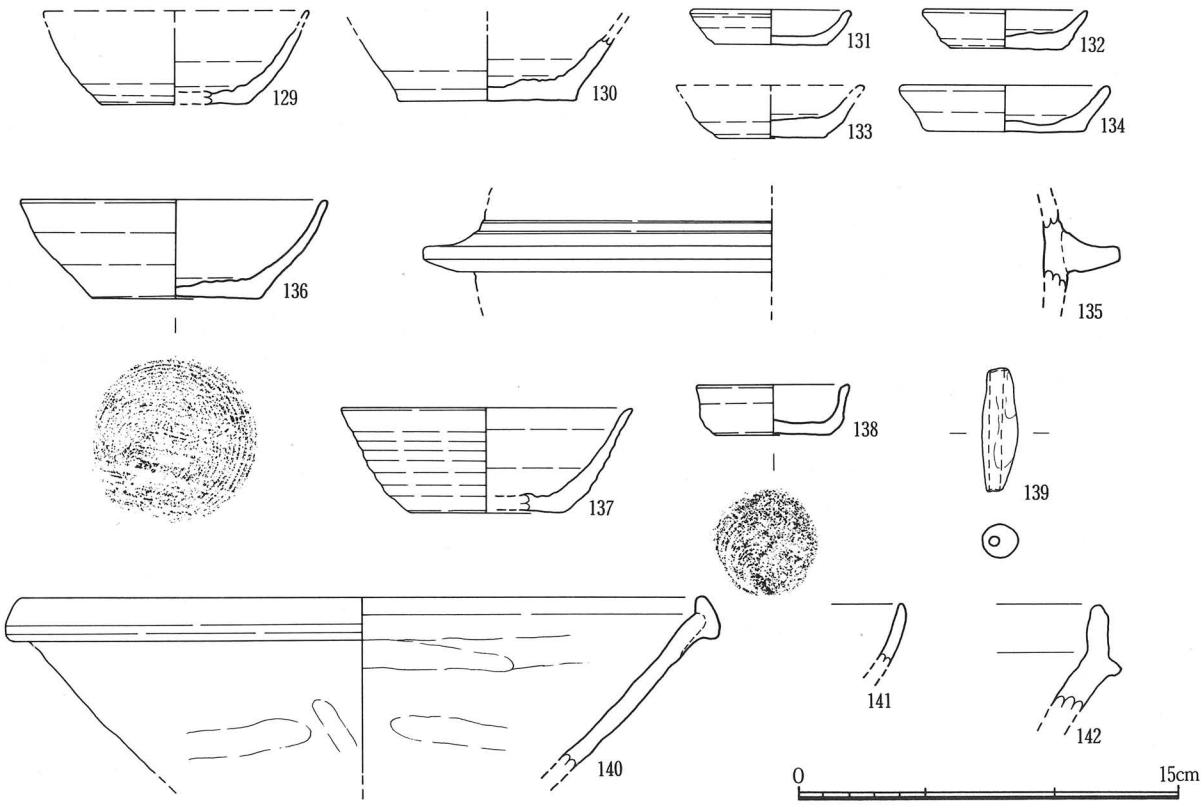


Fig. 50　ＳＤ－104～106・111 出土遺物実測図

SD－112（Fig.51）

調査区北部で検出した東西溝である。溝はSD－113・114を切り，さらに東西に続いている。幅約30cm，深さ15cm前後で，約28mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含むものであった。出土遺物は皆無に近く，復元できたものはない。

SD－113（Fig.51）

調査区北部で検出した東西溝で西にさらに続いている。溝はSD－112に切られる。幅約40cm，深さ25cm前後で，約24mに亙って検出した。断面はU字形を呈す。埋土は2層に分層され，上層が黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含み，下層は黄褐色火山灰土粒及びブロックを僅かに含むものであった。出土遺物は皆無に近く，復元できたものはない。

SD－114（Fig.51）

調査区北部で検出した東西溝でさらに西に続く。溝はSD－112に切られる。幅約35cm，深さ9cm前後で，約19mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを僅かに含むものであった。出土遺物は皆無に近く，復元できたものはない。

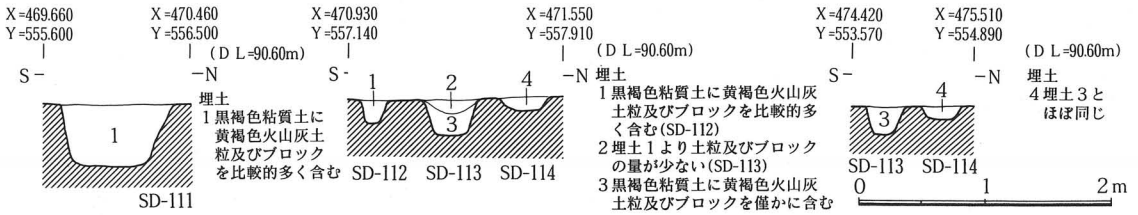


Fig. 51 ＳＤ－111～114

SD－115

調査区西部で検出した短い東西溝である。溝はSD－104に切られる。幅約25cm，深さ5cm前後で，約6mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり，近世以降の所産とみられる。出土遺物は皆無に近く，復元できたものはない。

SD－116

調査区西部で検出した短い東西溝である。検出位置からみてSD－115に繋がる可能性も考えられる。幅約20cm，深さ3cm前後で，約3.5mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり，近世以降の所産とみられる。出土遺物は皆無に近く，復元できたものはない。

SD－117

調査区西端部で検出した南北溝である。溝はさらに発掘区外に続く。幅約50cm，深さ12cm前後で北に向って傾斜し，約6mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はない。

SD－118

調査区西端部で検出した南北溝である。溝は北側で土坑状の落ち込みに切られ，南はさらに発掘区外に続く。幅約60cm，深さ14cm前後で北に向って傾斜し，約4.5mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックはほとんど含まなかった。

復元できた遺物はない。

E ピット

円形ピット群

今回の調査では，径0.8～1.0m，深さ10～30cmの円形ピット群を館内から検出した。特に，SD－102・103とSB－101・102及びSA－101に挟まれた館の西端部と北東部に集中している。壁は平坦な底面からほぼ垂直に上がっている。埋土はすべて黒褐色粘質土を主体とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックの含む量によって区別できる。概して，黄褐色火山灰土粒及びブロックを多く含むものが多い。遺物の出土状況は後述するその他のピットと変わった点や特異な状況を呈するものはなく，また，多量に遺物が出土したこともなく性格的な意味付けが難しく，今回は一括して「円形ピット群」として取り挙げた。なお，出土遺物については一括して後述する。

その他のピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられる。掘方は，大半が円形で径20～40cm，深さは20～60cmで，径30cm前後，深さ50cm前後のものが多い。埋土は円形ピット群と同じで，黒褐色粘質土を主体とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックの含む量によって区別できる。このピットの場合概して，黄褐色火山灰土粒及びブロックを含む量が少ない。

出土遺物

土師質土器（Fig.52・53－143～194）

143～173は杯で，器高指数によって大きく3類に分けることができる。第1は器高指数20～26のグループで143～145があり，形態的には皿に近いものとみられる。第2は器高指数29～32のグループで146～150がある。第3は器高指数が36～40のグループで151～156がある。形態的には，器高指数の違いにより口縁部の立ち上がりの角度に違いがみられる以外はほぼ同じで，平らな底部から口縁部は外上方に上がり，端部は丸くまたは細く仕上げている。調整は，口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施し，体部外面は未調整のものが多い。底部外面はすべて回転糸切り底で，155・157・159には板状圧痕が残る。176～194は小皿で，杯同様器高指数により大きく3類に分けることができる。第1は器高指数20以下のグループで174・175がある。第2は器高指数21～26のグループで176～185がある。第3は器高指数28～29のグループで186～194がある。口径はすべて6.4～6.7cmの範囲内にある。形態的にはほぼ同じで，口縁部は平らな底部から外上方に短く上がる。口縁部内外面は回転ナデ調整を施し，底部外面は回転糸切り底で，176・177・178・181・191・192には板状圧痕が残る。（P－143から143.144，P－102から145，P－103から146，P－104から147，P－105から148，P－106から149，P－107から150，P－108から151・152・169，P－109から153，P－110から154・160・161，P－111から155・157・165～167・176・187・190・191・193，P－112から156，P－113から158，P－114から159，P－115から162，P－116から163，P－117から164，P－118から168，P－119から170，P－120から171，P－121から172，P－122から173，P－123から174・175，P－124から177，P－125から178，P－126から179，P－127から180，P－128から181・186，P－129から182，P－130から183・185・188・192，P－131から184，P－132から189，P－133から190，P－134から194がそれぞれ出土している。）

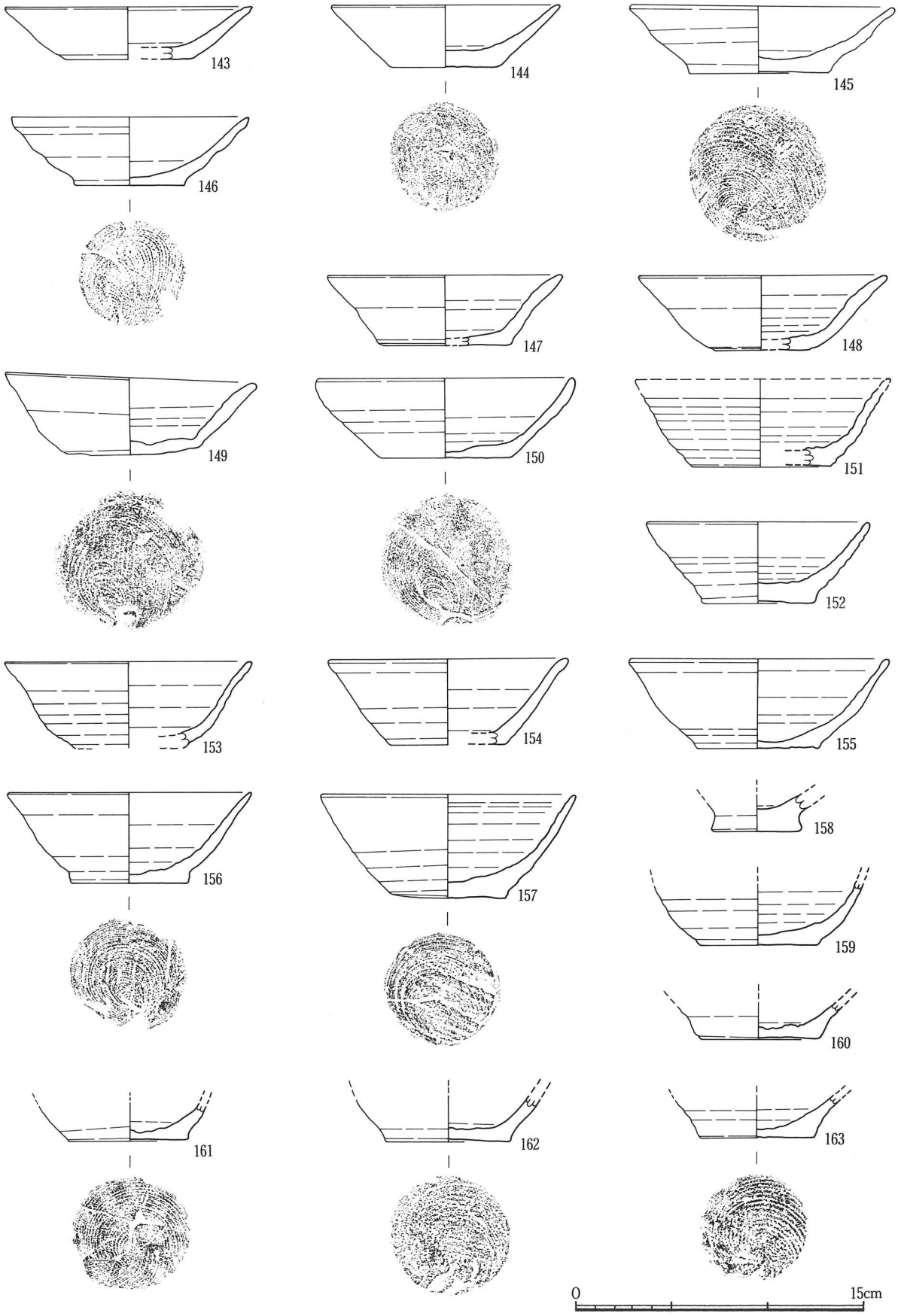


Fig. 52 ピット出土遺物実測図1

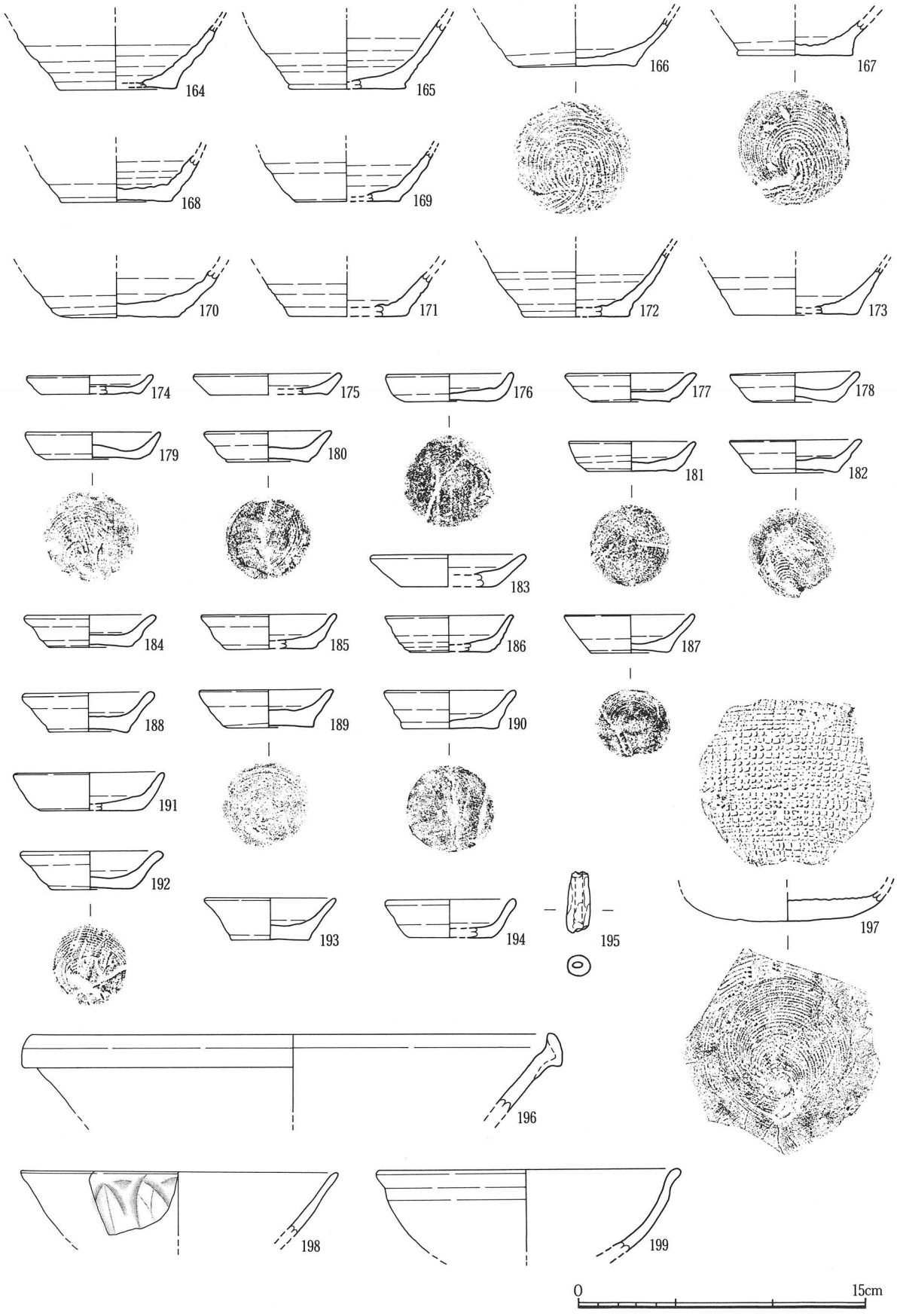


Fig. 53 ピット出土遺物実測図2

土製品（Fig.53－195）

紡錘形の土錘で両端が欠損する。幅1.2cm，重さ3.1g，孔径0.3cmである。（P－135）

東播系須恵器（Fig.53－196）

こね鉢で体部の一部と口縁部が残る。体部は外上方に上がり，そのまま口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部から内面にはヨコナデ調整，体部外面にはナデ調整を施す。（P－136）

瀬戸・美濃系（Fig.53－197）

おろし皿で，口縁部を欠く。底部内面には格子目状に条線が施され，底部外面は回転糸切り底である。（P－137）

青磁（Fig.53－198）

碗で口縁部が残存する。口縁部外面には鎬蓮弁文が施される。器面には淡青緑色釉を施釉する。（P－138）

白磁（Fig.53－199）

碗で底部が欠損する。体部は内湾気味に上がり，口縁部で小さく外反し，端部は丸く仕上げる。器面には灰白色釉を施釉する。（P－139）

石製品（Fig.54－200～202）

200は扁平片刃石斧である。弥生時代中期のものとみられるが，土師質土器に混じって出土したのでここで混入品として取り挙げた。刃部は一部欠損するが，比較的よく残っている。石材は粘板岩で，全長5.0cm，全幅4.3cm，全厚1.0cm，重さは49.5gである。（P—140）201は砥石である。両端が欠損するが，4面に使用痕が残る。石材は細粒砂岩である。（P—141）202は叩石で，両面と側面に弱い敲打痕が残る。（P－142）

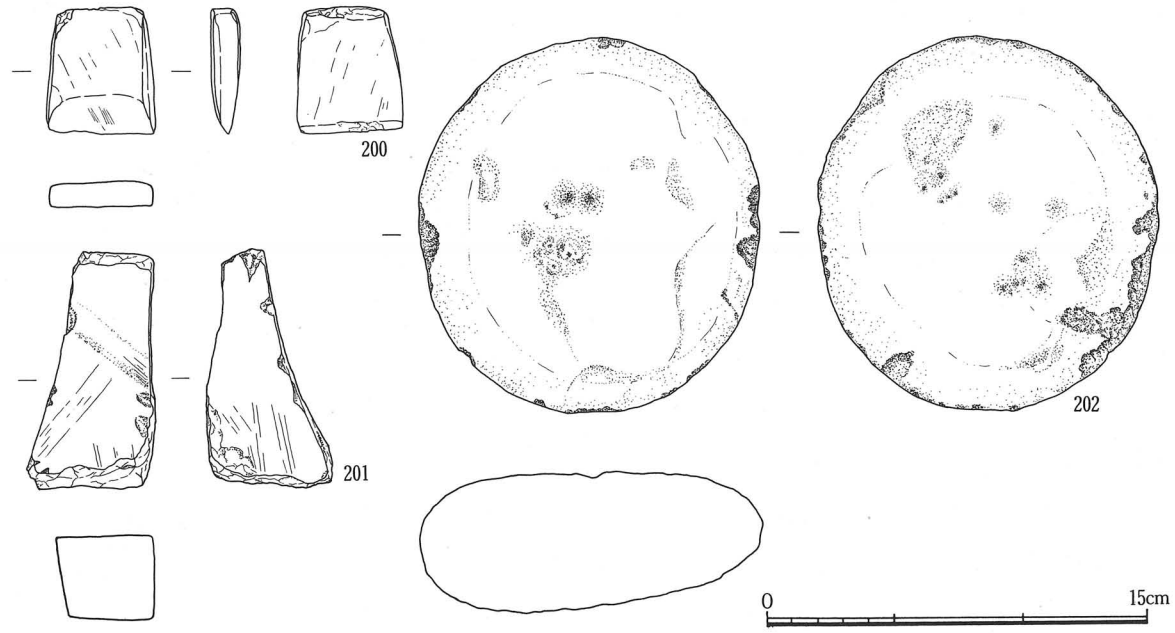


Fig. 54 ピット出土遺物実測図3

(2) B区

A 掘立柱建物跡

SB−201

調査区北部で検出した梁間1間（2.20～2.30m），桁行3間（5.25～5.65m）と歪みのある東西棟建物である。SB−202・203と重なっている。棟方向はほぼN−50°−Wである。柱間寸法は梁間（南北）が2.20mと2.30m，桁行（東西）は1.00～2.25mと区々である。柱穴は径20～35cmの円形で，柱径は10～15cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はないが，弥生土器片が僅かに出土している。

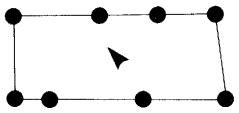


Fig. 55　S B−201

SB−202

調査区北部で検出した梁間2間（2.40～2.60m），桁行2間（4.15m）と歪みのみられる東西棟建物で，南妻柱の1個が未検出である。SB−201・203と重なっている。棟方向はほぼN−56°−Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.25と1.35m，桁行（東西）は2.00mと2.15mと区々である。柱穴は径20～25cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

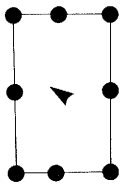


Fig. 56　S B−202

SB−203

調査区北部で検出した梁間1間（2.15m），桁行3間（4.60～4.75m）と歪みのみられる東西棟建物である。SB−201・202と重なっている。棟方向はほぼN−61°−Eである。柱間寸法は梁間（南北）が2.15m，桁行（東西）は1.40～1.75mである。柱穴は約20cmの円形で，柱径は径10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

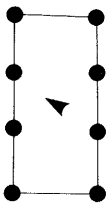


Fig. 57　S B−203

SB−204

調査区中央部で検出した梁間1間（2.85～3.00m），桁行3間（4.55～4.70m）と歪みのみられる東西棟建物で，建て替えが行われている。SB−205・206と重なっている。棟方向はほぼN−70°−Eである。柱間寸法は梁間（南北）が2.85mと3.00m，桁行（東西）は1.15～2.10mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

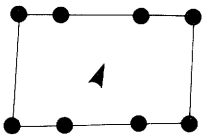


Fig. 58　S B−204

SB−205

調査区中央部で検出した梁間1間（3.10m），桁行2間（3.90～4.30m）と歪みのみられる東西棟建物である。SB−204・206と重なっている。棟方向はほぼN−88°−Eである。柱間寸法は梁間（南北）が3.10m，桁行（東西）は1.40～2.50mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

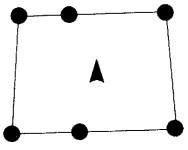


Fig. 59　S B−205

SB－206

調査区中央部で検出した梁間2間（3.25～3.35m），桁行2間（4.00m）と歪みのみられる南北棟建物である。SB－204・205と重なっている。棟方向はほぼN－43°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.55～1.80m，桁行（南北）は2.00m等間隔である。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

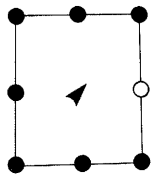


Fig. 60 ＳＢ－206

SB－207

調査区南東端部で検出した梁間1間（2.15～2.20m），桁行2間（3.25～3.60m）と歪みのみられる南北棟建物である。SB－204～206の東側に位置する。棟方向はほぼN－41°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が2.15mと2.20m，桁行（南北）は1.60～2.00mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

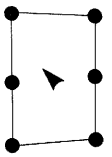


Fig. 61 ＳＢ－207

B 塀跡及び柵列

SA－201

調査区北部で検出したL字形をした塀である。SB－201～203の東側に位置する。6間分（10.40m）を検出し，柱間は1.30～2.10mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－202

調査区北部で検出した東西塀（N－58°－E）である。SB－201～203の東側に位置する。3間分（3.90m）を検出し，柱間は1.15～1.50mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－203

調査区中央部で検出した短い南北塀（N－37°－W）である。SB－204～206の北側に位置する。2間分（2.45m）を検出し，柱間は1.20mと1.25mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－204

調査区南西部で検出した短い南北塀（N－40°－W）である。SB－201～203の西側に位置する。2間分（3.45m）を検出し，柱間は1.65と1.80mである。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

C 土坑

SK－201

調査区北端部で検出した不整方形土坑で，発掘区外に続く。長辺1.95m，短辺1.25m以上，深さは15cmである。長軸方向はN－34°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを比較的多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK－202

調査区中央部で検出した細長い方形土坑である。長辺2.25m，短辺0.52m，深さは5cmである。長軸方向はN－72°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを比較的多く含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SK－203

調査区東部で検出した不整方形土坑である。長辺1.18m，短辺0.64m，深さは11cmである。長軸方向はN－30°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。復元できた遺物はない。

SK－204（Fig.62）

調査区南東部で検出した不整隅丸方形土坑である。長辺1.34m，短辺0.94m，深さは8cmである。長軸方向はN－42°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。復元できた遺物はなかったが，弥生時代前期新段階の土器片が出土している。

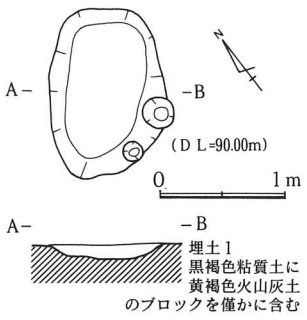


Fig. 62　S K－204

SK－205

調査区南東部で検出した不整楕円土坑で西側が1段低い円形状の落ち込みとなっている。長径1.50m，短径0.98m，深さは11cmである。長軸方向はN－87°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを僅かに含むものであった。弥生土器の細片が僅かに出土した程度で復元できた遺物はない。

（3） C区

A 掘立柱建物跡

SB－301

調査区西部で検出した梁間1間（2.20m），桁行4～5間（7.40～7.45m）と南北の側柱の数が異なり、やや歪みのみられる東西棟建物である。SB－302の北側に位置する。棟方向はほぼN－48.5°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が2.20m，桁行（東西）は1.50～1.90mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は10～20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

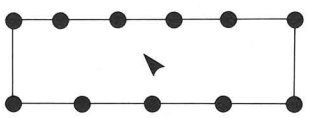


Fig. 63　S B－301

SB－302

調査区中央部西寄りで検出した梁間2間（3.20～3.40m），桁行3間（5.50m）とやや歪みのみられる東西棟総柱建物である。SB－301の南側に位置する。棟方向はほぼN－48°－Wである。柱間寸法は

梁間（南北）が1.30mと1.90m，桁行（東西）は1.30～2.30mである。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は約25cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

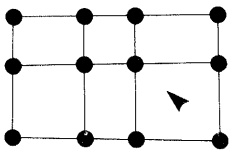


Fig. 64　S B－302

SB－303

調査区中央部で検出した梁間2間（2.40m），桁行2間（3.30m）の南北棟建物で北妻柱の1個が未検出である。SB－302の南側に位置する。棟方向はほぼN－43°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が1.20m等間隔，桁行（南北）は1.50～1.80mである。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は10～20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

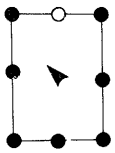


Fig. 65　S B－303

SB－304

調査区東部で検出した梁間1間（2.35m），桁行2間（3.50m）の南北棟建物である。SB－303の南側に位置する。棟方向はほぼN－45°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が2.35m，桁行（南北）は1.60～1.90mである。柱穴は径20～35cmの円形で，柱径は10～20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

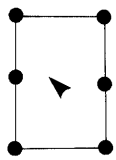


Fig. 66　S B－304

SB－305

調査区東部で検出した梁間2間（4.10m），桁行2間（4.15m）の東西棟総柱建物で北隅の柱穴が未検出である。SB-304の南側に位置する。棟方向はほぼN－47°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.90mと2.20m，桁行（東西）は2.00mと2.15mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15～20cmと推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

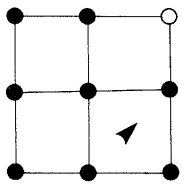


Fig. 67　S B－305

B 塀跡及び柵列

SA－301

調査区中央部で検出したL字形の塀である。SB－302の北側と約0.8m，東妻と約1.2mの間隔を取って設置されており，SB－301に伴うものとみられる。6間分（10.25m）を検出し，柱間は1.20～2.10mである。柱穴は径20～35cmの円形で，柱径は10～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－302

調査区中央部で検出した南北塀（N－43°－E）である。SB－303の南側，SB－304の北側に位置する。3間分（5.10m）を検出し，柱間は1.65～1.80mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は径20cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA－303

調査区東端部で検出した東西塀（N－48°－E）である。SB－305の南側に位置する。2間分（2.70m）を検出し，柱間は1.35m等間隔である。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

C 土坑

SK－301

調査区東端部で検出した不整形土坑で，発掘区外に延びる。長辺約2.00m，短辺約1.10m，深さは12cmである。長軸方向はN－13°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを比較的多く含むものであった。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.69－1）

小皿で，底部外面は回転糸切り底である。口径6.8cm，器高1.5cm，底径5.0cmで，口縁部は外上方に短く上がり，端部を丸く仕上げている。

D 溝跡

SD－301

調査区北側で検出した東西溝で何らかの区画をなすものとみられる。さらに北に続くが，現況で北側の水田は約70cmほど低くなっており，すでに削平されているものと考えられる。建物群はこの溝にほぼ並行している。幅約70cm，深さ10cm前後で東に向ってやや傾斜している。約27mに亙って検出した。断面は舟底形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含むものであった。出土遺物は少なく，1点が復元できた。

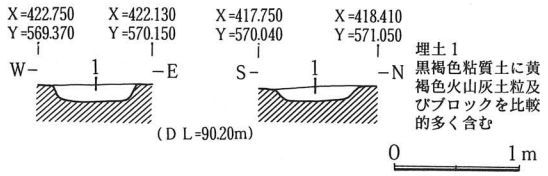


Fig. 68 ＳＤ－301

出土遺物

備前（Fig.69－2）

擂鉢の口縁部の破片である。口縁部は斜め上方に上がり，端部は内傾する平面をなす。内面には7本単位の条線が残る。口縁部内外面は回転ナデ調整が施される。

E ピット

円形ピット

A区でみられたような径70cm前後，深さ約15cmの円形ピットを数個検出した。A区に比べ密度が低いのは館の内と外における用途の違いかもしれない。埋土は黒褐色粘質土を主体とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックを比較的多く含むものであった。

その他のピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられる。掘方は，大半が円形で径20～40cm，深さは20～50cmで，径25cm前後，深さ30cm前後のものが多い。埋土は円形ピット群

と同じで，黒褐色粘質土を主体とし，黄褐色火山灰土粒及びブロックの含む量によって区別できるが，概して，黄褐色火山灰土粒及びブロックを含む量が少ない。

出土遺物

土師質土器（Fig.69－3・4）

3は杯で，口縁部を欠く。底部は回転糸切りによって平らで，体部は外上方に上がっている。4は小皿で，口縁部は平らな底部から外上方に短く上がる。口縁部内外面は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加えている。底部外面は回転糸切り底である。（P－301から3，P－302から4が出土）

青磁（Fig.69－5・6）

2点とも碗で，5は口縁部の一部が残存し，外面には4条の波状文が施される。器面には灰緑色釉を施釉する。6も口縁部の破片で，外面には鎬蓮弁文が施される。器面には5同様灰緑色釉を施釉する。（P－303から5，P－304から6が出土）

木製品（Fig.69－7）

柱根で基部の一部が残存する。調整痕は残存していない。残存長は25.4cm，残存幅は17.5cmである。樹種はコナラとみられる。（P－305）

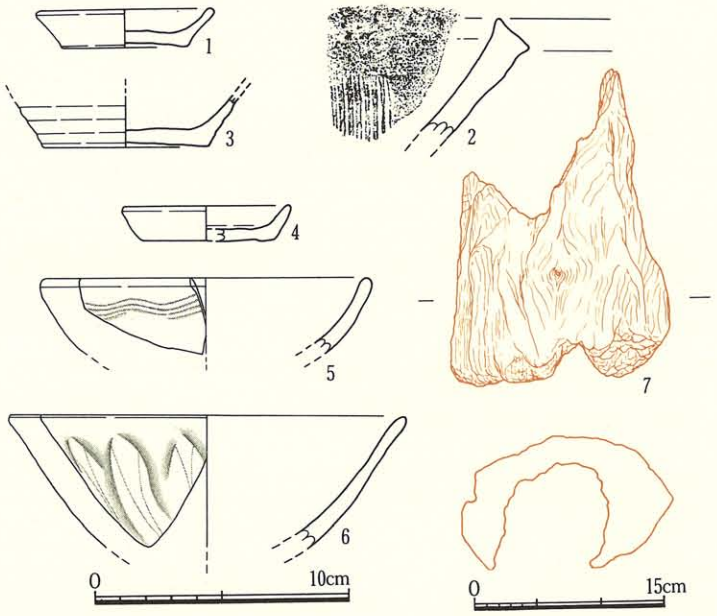


Fig. 69 C区出土遺物実測図

（4）D区

① 弥生時代

A ピット

P－401

D区で確認した唯一の弥生時代のピットで，調査区の東北部に位置する。径15cmの円形で，深さは29cmである。中世のピットに掘り込まれていた。形状から柱穴とみられるが，周辺では弥生のピットは確認していない。

出土遺物

弥生土器（Fig.70－1）

壷で，口頸部が残存する。頸部は外反気味に上がり，口縁部で外上方に外反する。肩部との境に粘土紐を2条貼付した上に棒状工具で刺突文を加えている。口縁部外面にも幅広の粘土紐を貼付した上にヘラ状工具でタテ方向の細い刻み目を加える。

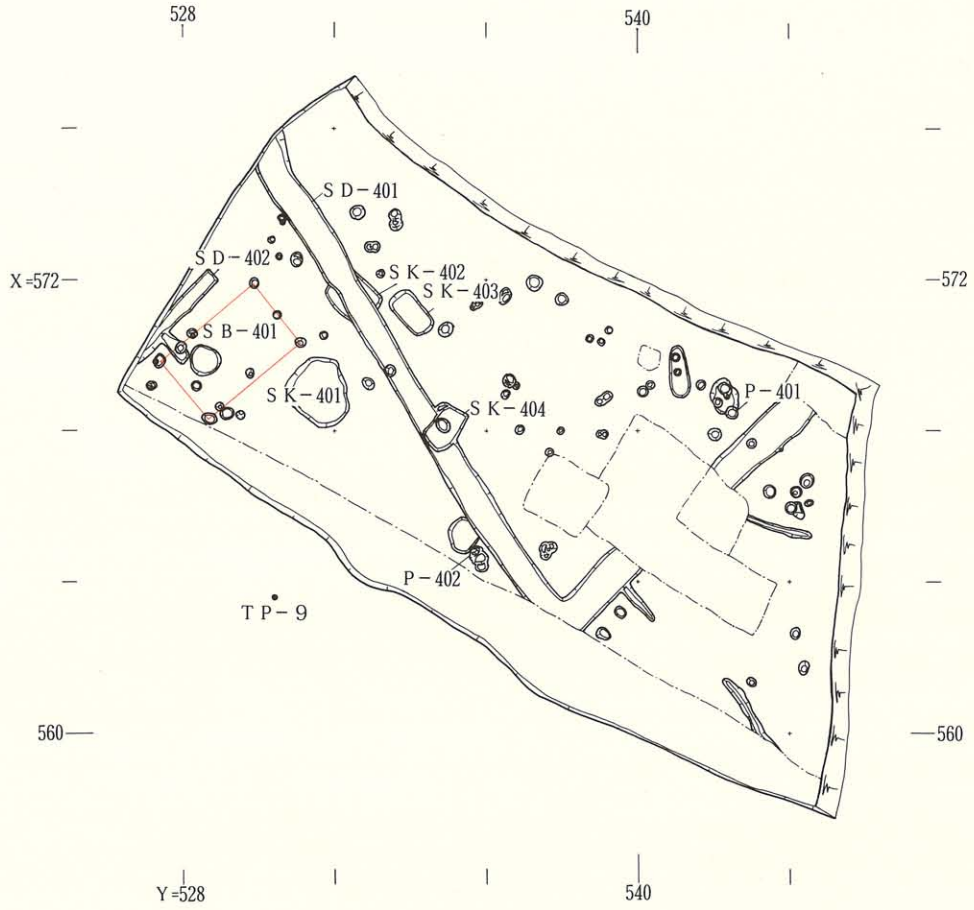


Fig. 70　D区遺構平面図（S＝1：200）

② 中世

A 掘立柱建物跡

SB－401

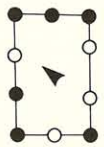


Fig. 71　SB－401

調査区西部で検出した梁間2間（2.00m），桁行3間（3.20m）の南北棟建物で南妻柱の柱穴1個，西側柱の柱穴1個，東側柱の柱穴2個が未検出である。棟方向はほぼN－41°－Eである。柱間寸法は梁間（東西）が1.00m等間隔，桁行（南北）は1.00mと1.10mである。柱穴は径約25cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

B 土坑

SK－401

調査区南西部で検出した不整形土坑である。長辺1.70m，短辺1.50m，深さは16cmである。長軸方向はN－40°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを僅かに含むものであった。復元できた遺物はなかった。

SK－402（Fig.72）

調査区西部で検出した方形土坑でSD－401を掘り込んでいた。長辺1.35m，短辺1.05m，深さは5cmである。長軸方向はN－48°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と

小ブロックを多量に含むものであった。復元できた遺物はなかった。

SK－403（Fig.73）

調査区西部で検出した方形土坑である。長辺1.28m，短辺0.69m，深さは27cmである。長軸方向はN－37°－Wである。埋土は埋土は2層に分層でき，上層が黒褐色粘質土で，下層が黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを若干含むものであった。復元できた遺物はなかった。

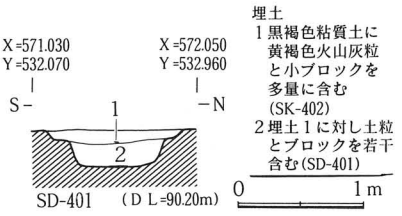


Fig. 72　S K－402・S D－401

SK－404

調査区中央部で検出した隅丸方形土坑でSD－401を掘り込んでいた。長辺1.20m，短辺0.76m，深さは28cmである。長軸方向はN－38°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを多量に含むものであった。復元できた遺物はなかった。

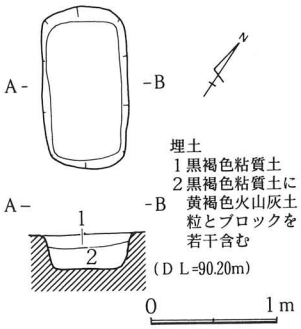


Fig. 73　S K－403

C 溝跡

SD－401（Fig.72）

調査区中央部で検出したL字形の溝で何らかの区画をなすものとみられる。さらに西と北に続くが，現況で西側は水路，北側は約1mほど低く水田となっており，すでに削平されているものと考えられる。また，東側では現代の撹乱によって掘削されているところがある。幅約80cm，深さ28cm前後で西に向ってやや傾斜している。約24mに亙って検出した。断面は箱形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを若干含むものであった。遺物は4点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.74－2・3）

2は杯で口縁部を欠く。体部は平らな底部から内湾気味に上がる。体部内外面には回転ナデ調整を施し，底部外面は回転糸切り底となる。3は小皿で，口縁部は外上方に短く上がり，端部は丸く仕上げる。口径6.3cm，器高1.3cm，底径4.8cmである。

瓦質土器（Fig.74－4）

羽釜で胴部以下が欠損する。口縁部は胴部から内湾気味に上がり，端部は上方を向く平面をなす。口縁部外面は3段の稜となり，その下に幅2.5cmの鍔が付く。鍔から内面にかけてはヨコナデ調整，胴部外面にはヘラ削りを施す。また，鍔下端には煤が付着する。

石製品（Fig.74－5）

棒状を呈する叩石で，両端に弱い敲打痕が残る。祖粒砂岩の河原石を使用している。

SD－402

調査区西端部で検出した南北溝である。さらに南に続くが，現況で南側は水路ですでに削平されているものと考えられる。幅約40cm，深さ15cm前後で南に向ってやや傾斜している。約3.2mに亙って検出した。断面は箱形を呈す。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はない。

D ピット

P−402

調査区南部で検出したピットで，径35cmの円形で，深さは21cmである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒とブロックを若干含むものであった。遺物は1点復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.74−6）

杯で，口縁部は底部から斜め上方に真直ぐ上がり，端部は細く仕上げられる。内面は回転ナデ調整，外面は未調整である。底部外面は回転糸切り底である。

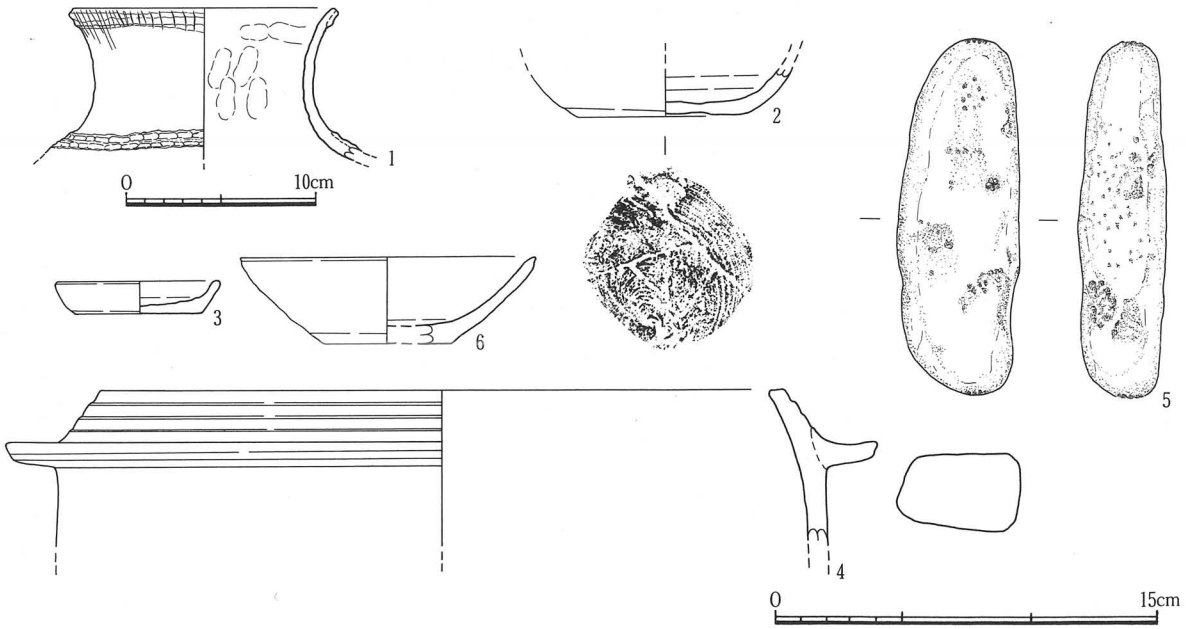


Fig. 74　D区出土遺物実測図

（5）E区

A 塀跡及び柵列

SA−501

調査区中央部で検出した東西塀（N−48°−W）である。SA−502の東側に位置する。3間分（4.85m）を検出し，柱間は1.35〜1.95mである。柱穴は径20〜25cmの円形で，柱径は径約10cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

SA−502

調査区中央部で検出したL字形の塀である。SA−501の西側に位置する。5間分（5.80m）を検出し，柱間は1.00〜1.30mである。柱穴は径20〜25cmの円形で，柱径は径約10cmとみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を基調とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものである。復元できた遺物はない。

B 土坑

SK−501

調査区西部で検出した不整方形土坑である。長辺0.89m，短辺0.78m，深さは7cmである。長軸方向はN−17°−Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はなかった。

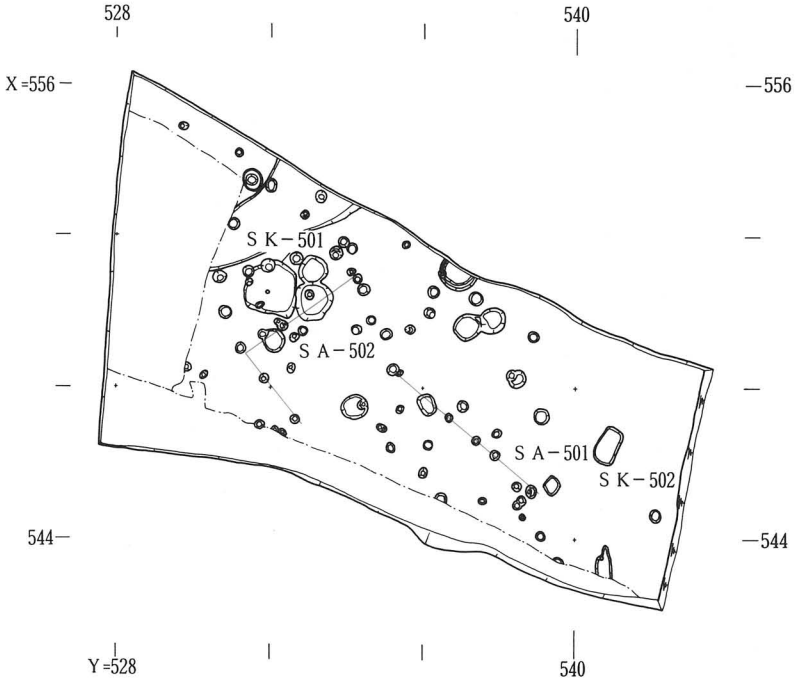


Fig. 75 E区遺構平面図(S=1:200)

SK−502 (Fig.76)

調査区東部で検出した方形土坑である。長辺0.82m，短辺0.54m，深さは28cmである。長軸方向はN−27°−Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土のブロックを比較的多く含むものであった。遺物は1点が復元できた。

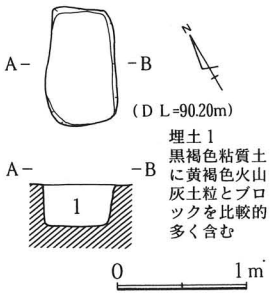


Fig. 76 SK−502

出土遺物

土師質土器 (Fig.77−1)

杯で，口径に対して底径が極めて小さなものである。口縁部は斜め上方に真直ぐに上がり，端部を細く仕上げる。口縁部から内面にかけては回転ナデ調整が施され，底部外面は回転糸切り底である。口径13.5cm，器高3.4cm，底径4.5cmで内外面とも灰褐色を呈す。

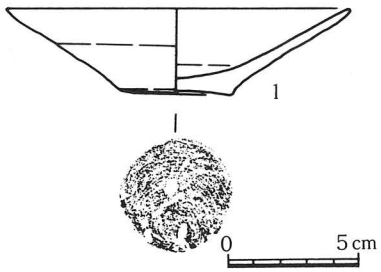
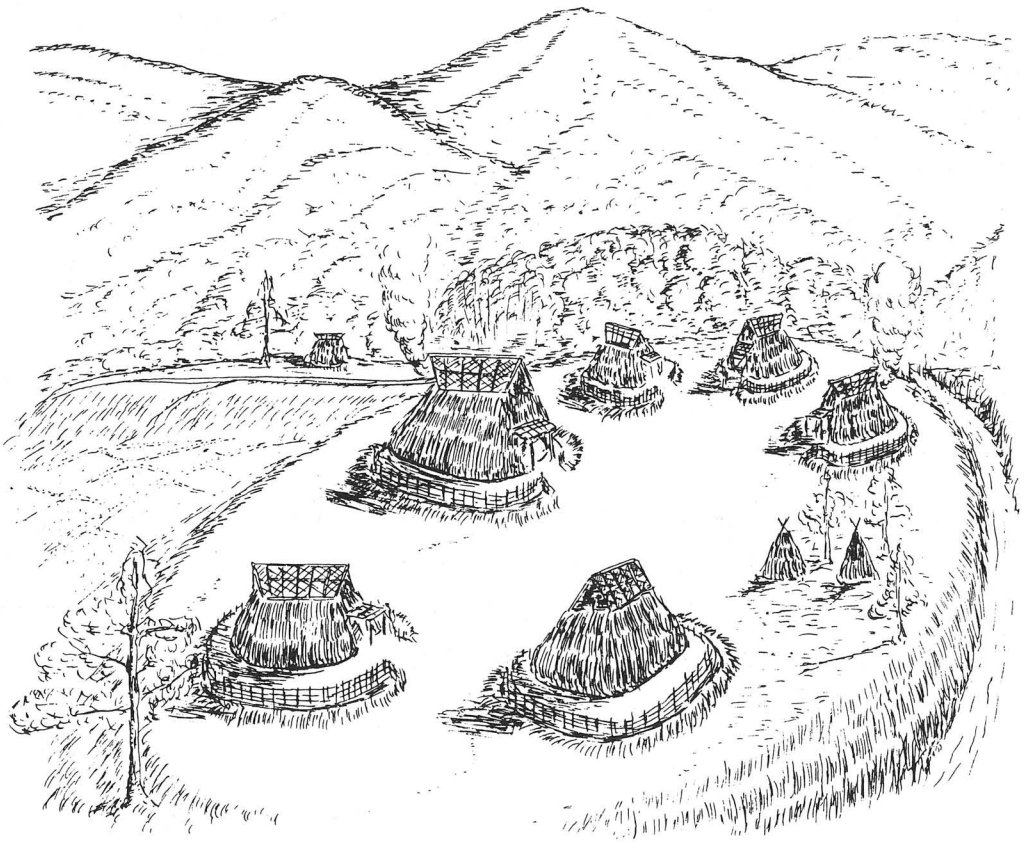


Fig. 77 SK−502 出土遺物実測図



弥生時代の二ノ部遺跡　復元想像図

第Ⅲ章　二ノ部遺跡

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

二ノ部遺跡は，平成2年度に実施した事前の試掘調査によってその所在が確認された遺跡である。確認調査の際，二ノ部地区で設定したトレンチは14ヶ所（56m²）で，内7ヶ所から遺物包含層と遺構を検出し，遺跡の範囲は14,000m²に及ぶものと考えられた。今回調査対象となったのはこの内の約10,000m²であり，調査対象範囲が広範囲に及ぶため本調査ではトレンチ調査を並行して行い遺構のより正確な分布範囲を　把握しつつ調査を進めていった。その結果，当初考えていた範囲すべてに遺構が所在するのではなく，大きく3ヶ所に遺構が遺存することが判明した。すなわち遺跡は伏尾川右岸に形成された沖積平野の東西に起伏する微高地上に立地していることが確認された。

調査は，平成5年度に計画されていた二ノ部地区の県営圃場整備事業に伴うもので，佐川町が高知県（須崎耕地事務所）の委託を受け，佐川町教育委員会が調査主体となり高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと実施した。調査対象となったのは，工事によって掘削並びに削平される部分であった。調査期間は平成5年9月20日～平成6年2月8日までの実働72日間であった。なお，調査と工事は通年施行で実施されたため，調査終了と共に遺跡は削平された。

(2) 調査日誌抄

1993年9月20日～1994年2月8日

9.20　本日から発掘調査を実施する。まず，水路予定部分（A区）にAトレンチを設定して調査する。遺物の包含量は僅かではあるが遺物包含層を確認する。

9.21　雨天のため現場作業は中止する。

9.22　雨天のため現場作業は中止する。現場事務所を設置する。

9.27　Aトレンチ（6×50m）の調査を行う。南約三分の一は瓦用の粘土を抜きとられ，表土下が赤土となっていた。

9.28　AトレンチとBトレンチ（6×19m）の調査を行う。

9.29　BトレンチとDトレンチ（7×25m）の調査を行う。

9.30　雨天のため現場作業は中止する。

10. 1　水汲みを行う。

10. 4　Cトレンチ（6×21m）の調査とDトレンチの水汲みを行う。

10. 5　C・Dトレンチの調査を行う。

10. 6　C·Dトレンチへの杭打ちと平面測量を行う。

10.12　A～Dトレンチの平面実測並びにA区の地形測量を実施する。

10.13　A～Dトレンチの平板測量，水準測量及びトラバースポイント（TP—1～16）の埋設を行う。

10.18　Eトレンチ（7×34m）の調査を行う。

10.19　Eトレンチの調査とレベル実測を実施し，トラバースポイントに標高を設置する。

10.20　Eトレンチの調査，B区の表土剝ぎ並びにトラバース測量（TP—1～12）を実施する。

10.21　Eトレンチの平面実測，B区の表土剝ぎ並びにトラバース測量（TP—13～16）を実施する。

10.22　Eトレンチの測量とB区の表土剝ぎを行う。

10.25　B区（東西約55m，南北約50m）の表土剝ぎに引き続き，遺構検出作業に移る。

10.26　B区の遺構検出作業を行い，南部と西部

を中心に遺構を検出する。

10.27　B区の遺構検出作業に併行して杭打ちを行う。

10.28　B区の遺構検出作業に併行して杭打ち並びに検出遺構略図を作成する。

11. 1　B区の遺構検出作業並びに検出遺構略図を作成する。C区にトレンチを設定する。

11. 2　B区の再精査を行った後，遺構検出状態の写真撮影を行うと共にC区の調査を行う。

11. 4　B区の遺構の調査を開始する。併行してC区の拡張作業も行う。

11. 5　B区の調査とC区の拡張作業を行う。

11. 9　B区の調査とC区の遺構検出作業に併行してD・E区のトレンチ調査を行う。

11.10　B区の調査，D·E区のトレンチ調査並びにE区の拡張作業を行う。

11.11　雨天のため現場作業は中止する。

11.15　B区の調査とE区の拡張作業並びに遺構検出作業を行う。

11.16　B区の調査，E区の遺構検出と杭打ち，C区の表土層の掘削を行う。

11.17　雨天のため現場作業は中止する。

11.18　C～E区の水汲みを行う。

11.19　C·D区の遺構検出作業並びに検出状況の写真撮影を行う。

11.22　E区の精査を行った上で遺構検出状況の写真撮影を行う。

11.24　B区の調査を行う。

11.25　B区の調査並びにC～E区に設置したトレンチの位置と土層断面を実測する。

11.26　B区の調査及びC～E区のトレンチの土層断面を実測する。

11.29　B区の調査とC～E区のトレンチの位置を平板測量する。

11.30　B区の調査とC・D区の検出遺構の略図を作成する。

12. 1　B区の調査とE区の検出遺構の略図を作成すると共にC・D区の土層断面を実測する。

12. 2　B区の調査とE区の土層断面を実測する。

12. 3　B区の調査を行う。主に住居跡の調査を行い，ST–203から土製勾玉が出土する。

12. 6　B区の住居跡の調査に併行してC区の遺構の調査にかかる。

12. 7～9　B区の住居跡の調査に平行してC区の調査を行う。

12.10　雨天のため現場作業は中止する。

12.13　C・D区の調査を行う。

12.14　C・D区の調査を完了後，完掘状態の写真撮影を行う。

12.15　B区のSD–201・202の調査並びにC区の測量を実施する。

12.16　B区のSD–201・202の調査並びにC・D区の測量を行う。

12.20　B区のSD-201・202の調査並びにC区のレベル実測を行う。

12.21　B区のSD-201・202の調査並びC·D区のレベル実測を行い，C·D区の調査を終了する。

12.22　B区のSD–202の調査を完了し，B区の完掘状態の写真撮影を行う。

12.24　B区の完掘状態の写真撮影を再度行い，測量を残してB区の調査を完了する。年内の調査は本日で終了する。

1. 5　本日から本年の調査を開始する。E区の調査とB区の平面実測を開始する。

1. 6～7　E区の調査とB区の平面実測を行う。

1.10　E区の遺構完掘状態の写真撮影とB区の平面実測を行う。

1.11　B区の平面実測を行う。

1.12　B区の平面実測を終了し，E区の平面実測に移る。

1.13　E区の平面実測を完了する。

1.14　航空写真撮影のため現場の掃除を行う。

1.17　雨天のため写真撮影は延期する。

1.18～20　B区のレベル実測を行う。

1.21　B・E区のレベル実測を行う。

1.24　E区のレベル実測並びに航空写真撮影のために現場の掃除を行う。

1.25　航空写真撮影並びにE区のレベル実測を行う。

1.27　E区の残りのレベル実測を行い，E区の測量を完了する。

1.28　二ノ部遺跡の記者発表を行う。

1.30　現地説明会を行い，約250名の参加があった。

1.31　B区の住居跡を中心に補足調査を行う。

2. 2　住居跡の平面実測を再度行う。

2. 3　柱穴の再精査を行い，新たに確認したものの平面実測を行う。

2. 7　住居跡のレベル実測などを行い現場作業を終了する。発掘機材を搬出する。

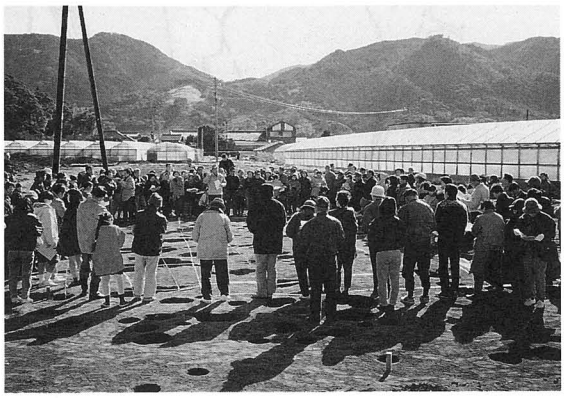


Fig. 78　現地説明会

2. 8　出土遺物を埋蔵文化財センターへ運搬する。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

前述のように調査対象面積が10,000m²にも及ぶため，本調査ではトレンチ調査を併行して行い，遺構のより正確な分布範囲を把握しつつ調査を進めていった。まず，工事によって広範囲に遺構が掘削並びに削平される部分と，広範囲に遺構には影響がないが水路や農道によって掘削される部分とがあり，前者についてはトレンチ調査によって遺構が検出された部分について発掘区を拡張することとし，後者については工事で掘削される部分についてのみ調査することとした。その結果，遺構は大きく東西3ヶ所で確認された。

なお，これらの調査に先立ってトラバース測量を行い合わせて水準測量も実施した。基準点は任意座標とし，X軸は真北に向かう値

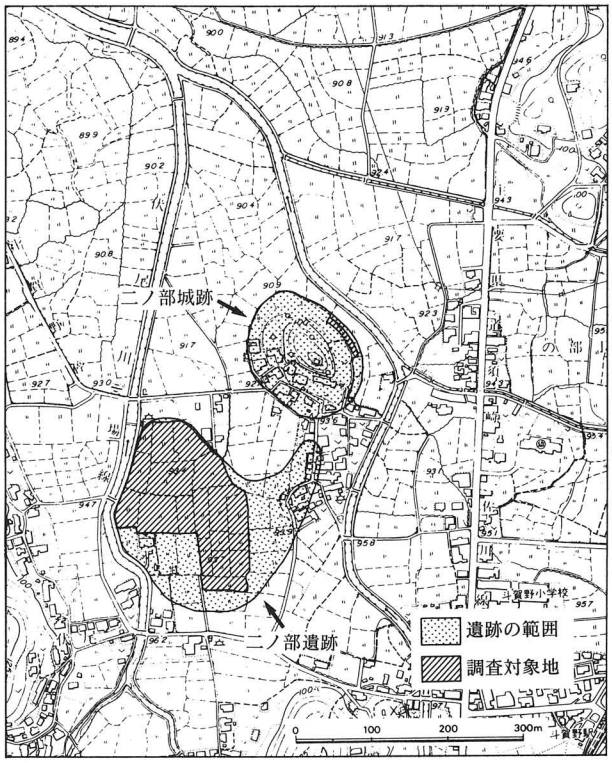


Fig. 79　遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1:10,000)

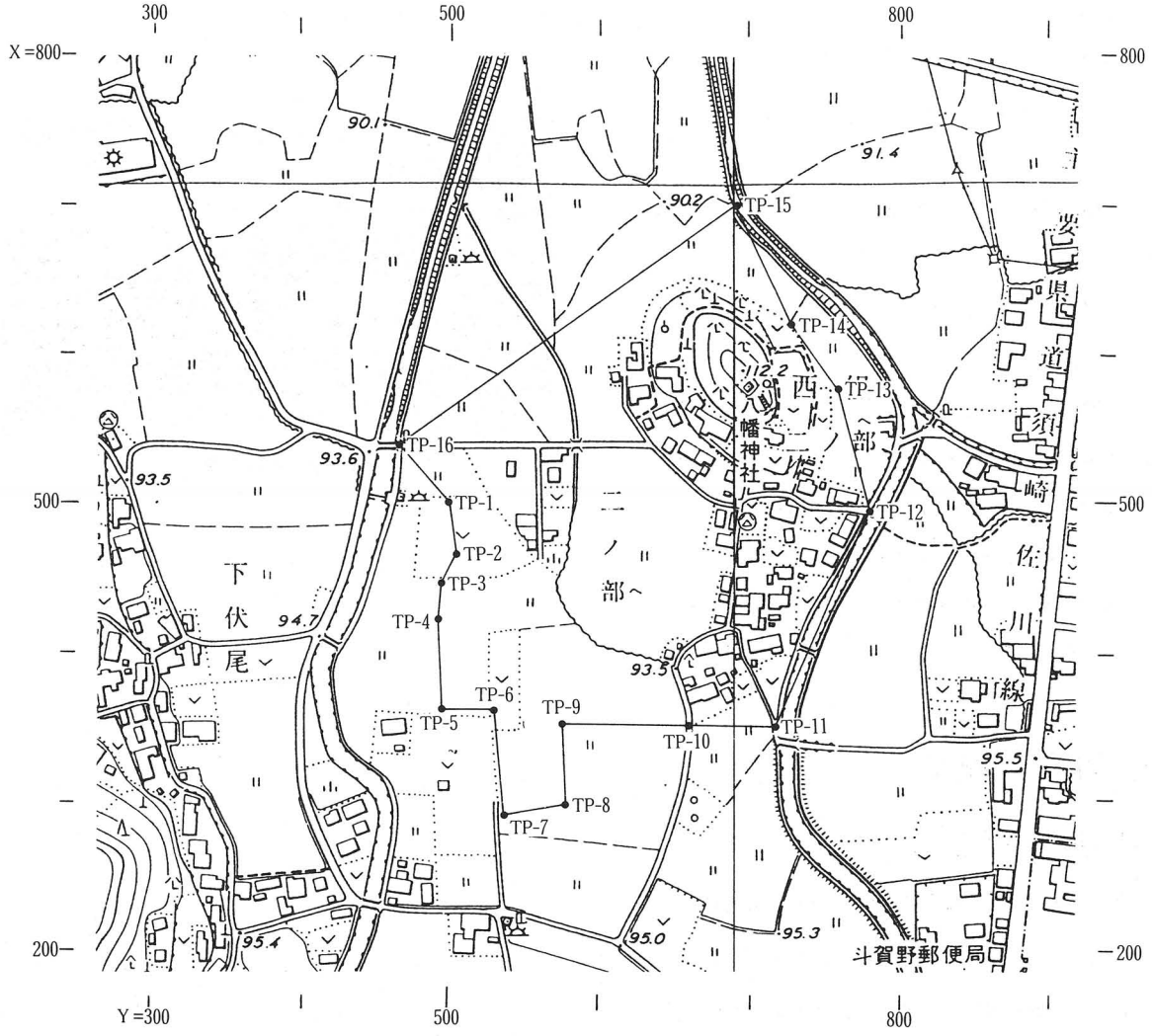


Fig. 80　二ノ部遺跡城跡トラバースポイント配置図(S=1:5,000)

を正とし，Y軸はX軸に直行する軸とし真東に向う値を正とするようにとり，TP−1〜16までを設定した。トラバース測量はTP−1の座標をX=500.000，Y=500.000とし，20秒読みのセオドライト，GUUPY（GTS−3.20）を使用して行った。なお，岩井口遺跡の調査の際方位標として設定した鉄塔Aを今回も方位標とし，同じく鉄塔Aと呼称した。もちろん，それぞれ任意座標としているため座標値は異なる。測量結果はTab.3に記し，同時に実測した水準測量（工事用基準点KBM.2　H=94.198mを使用）の結果も同表に記載した。

また，調査では調査範囲が広範囲に及ぶため，調査区をA〜E区に5区に分けて行った。調査対象面積は約10,000m²であり，各調査区の発掘調査面積は，A区が953m²，B区2,395m²，C区が399m²，D区が124m²，E区が989m²であり，最終的な発掘調査面積は4,860m²であった。

Tab.3 トラバース測量座標成果一覧表

（路線名 二ノ部遺跡・城跡
測点名 TP−1〜16 実測精度1/31,011）

測角点	方向角	正整方向角	水平距離(m)	X（m）	Y（m）	座標点	標高（m）
TP−16	TP−1	135° 32′ 51"		500.000	500.000	TP−1	94.960
TP−1	TP−2	171° 34′ 01"	41.056	459.388	506.021	TP−2	94.926
TP−2	TP−3	205° 09′ 30"	36.526	426.327	490.493	TP−3	95.342
TP−3	TP−4	200° 58′ 58"	24.251	403.684	481.809	TP−4	95.877
TP−4	TP−5	181° 11′ 38"	49.818	353.877	480.771	TP−5	95.863
TP−5	TP−6	91° 53′ 20"	47.269	352.319	528.014	TP−6	95.700
TP−6	TP−7	175° 50′ 39"	67.340	285.156	532.894	TP−7	95.915
TP−7	TP−8	84° 49′ 47"	58.059	290.388	590.717	TP−8	95.912
TP−8	TP−9	10° 37′ 36"	55.556	344.991	600.962	TP−9	95.463
TP−9	TP−10	92° 47′ 23"	56.994	342.217	657.888	TP−10	95.746
TP−10	TP−11	89° 08′ 01"	61.369	343.145	719.250	TP−11	97.214
TP−11	TP−12	23° 24′ 56"	162.336	492.112	783.762	TP−12	95.273
TP−12	TP−13	350° 43′ 12"	89.831	580.767	769.276	TP−13	93.966
TP−13	TP−14	311° 37′ 58"	53.994	616.638	728.920	TP−14	93.757
TP−14	TP−15	333° 36′ 34"	72.065	681.193	696.888	TP−15	94.154
TP−15	TP−16	237° 21′ 19"	273.219	533.811	466.829	TP−16	95.909
TP−16	TP−1	135° 32′ 51"	47.366	500.000	500.000	TP−1	94.960
TP−1	鉄塔A	316° 24′ 53"	1,086.402	1,286.934	−249.002	鉄塔A	
TP−2	鉄塔A	317° 37′ 26"	1,146.393	〃	〃	鉄塔A	

(2) 調査の概要

当初，試掘調査の結果からすると遺跡のほぼ全域に遺構が存在するものと考えられたが，実際は旧地形が東西に起伏しており，遺構はその微高地上に所在することが判明した。この微高地は東西3ヶ所にあり，西側が最も広く（B区），中央部が最も狭く（C区），東側が2番目の広さ（D・E区）である。また，微高地と微高地の間では遺構は検出されなかったが，色調的には薄い遺物包含層が認められた。

調査範囲が広く，土層の状況も地区によってやや異なっており，各地区ごとに土層の状況並びに遺物包含層出土遺物について記すことにする。なお，遺物番号は各地区で通し番号としている。

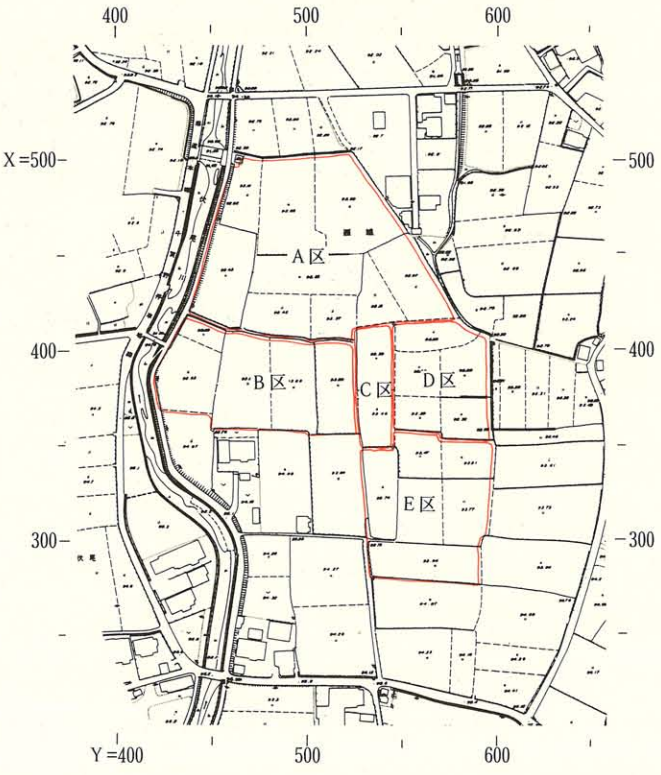


Fig. 81 調査区設定図（S=1：4,000）

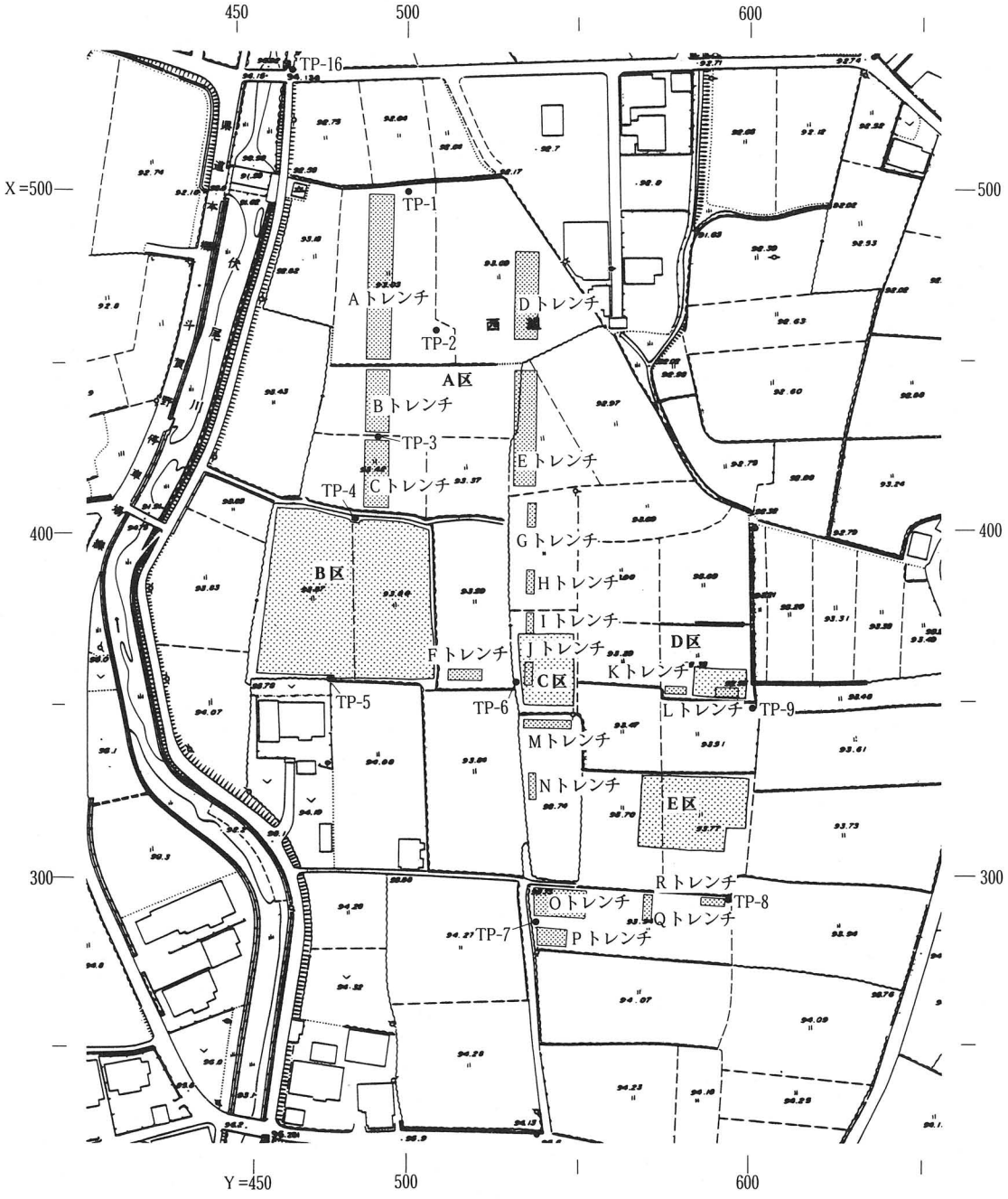


Fig. 82　調査区全体図（S＝1：2,000）

①A区

遺跡の北側約三分の一の地区で，標高が93.4m以下と調査対象地内では標高の最も低い部分である。この部分の面的な工事は盛り土工法となっていたため直接影響を受ける水路（西側）と農道部分（東側）が調査対象地となり，トレンチ調査を行った。まず，西側では用水路と排水路の幅に合わせ，水田の区画によって北からAトレンチ（6×50m），Bトレンチ（6×19m），Cトレンチ（6×21m）の3本のトレンチを設定し，次に東側の農道予定部分には北からDトレンチ（7×25m），Eトレンチ（7×34m）の2本のトレンチを設定して調査を行った。その結果，各トレンチから僅かではあるが遺構を検出した。また，Aトレンチの北半分では瓦用の粘土を採取されたとみえて赤褐色砂礫土の堆

積が認められ，Eトレンチの大半では遺構が検出されなかった。以下，A区で認められた基本層序について記す。

層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　赤褐色粘質土層（床土）

第Ⅲ層　暗褐色粘質土層

第Ⅳ層　淡黄褐色砂質土層ないし褐色粘質土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅳ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測る。現況は水田と畑地で，水田部分は第Ⅱ層の床土が認められた。

第Ⅲ層は遺物包含層であり，黒色～灰黒色を呈する部分もあった。全般に包含する遺物量は少なく，遺構が検出される部分は比較的色調も濃いが縁辺部に行くに従って色調が薄くなり褐色を呈する部分も見られた。

第Ⅳ層は自然堆積層で，A～Cトレンチでは淡黄褐色砂質土層，D·Eトレンチでは褐色粘質土層が遺構検出面であった。また，淡黄褐色砂質土層の下層は灰褐色砂礫土層となっており，D·Eトレンチで検出した褐色粘質土層の下層には濃褐色粘質土，黄褐色粘質土，黒褐色粘土の堆積が認められた。

これら土層の状況からするとA区西側が比較的高く東側に向かって傾斜し，特にD・Eトレンチの東側が微高地間の谷部となっているものとみられる。

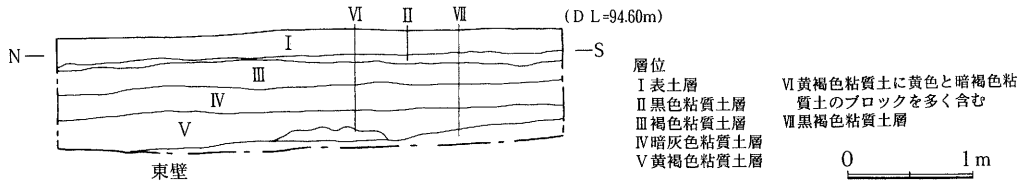


Fig. 83　A区Dトレンチ(サブトレンチ)セクション図

②B区

調査区中西部に位置する遺構が最も広範囲に検出された部分である。平成2年度の試掘調査で遺構が検出されており，標高93.80mの水田2枚すべてを全面発掘調査した。その結果，調査区中央部を中心に弥生時代後期後半の集落と中世の集落を検出した。また，南部を除いて調査区縁辺部は遺構が少なく，隣接する東西の水田への遺構の広がりが不明確なためFトレンチ（7×10m）を東側の水田に設定して調査したところ遺物包含層（遺物は土器の細片を僅かに含む）とみられる土層は検出されたが遺構は全く確認できず，発掘区は当初の範囲とした。なお，西側の水田は発掘区より標高が低いため工事による影響はほとんどないものと思われたため今回調査は行わなかった。B区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　旧表土層

第Ⅲ層　灰褐色～暗褐色粘質土層

第Ⅳ層　黒色粘質土層

第Ⅴ層　褐色粘質土層

第Ⅵ層　黄褐色砂質土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅳ層と第Ⅴ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測り，下層部には鉄分が沈澱した床土が認められたところもある。現況は水田である。

第Ⅱ層も第Ⅰ層と同系色でかつ下層部には鉄分の沈澱した床土がみられたことから時期的には明確ではないが旧表土層，所謂旧耕作土と考えられる。

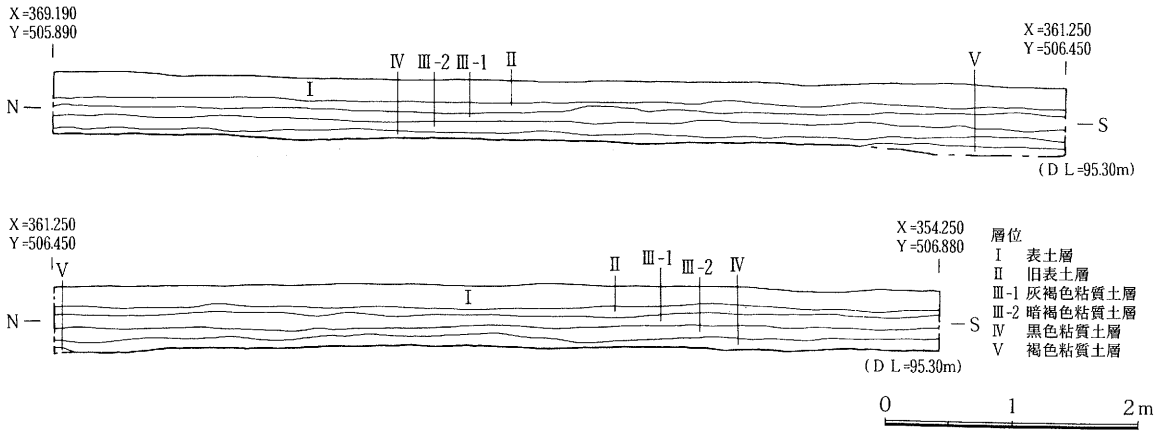


Fig. 84　B区東壁セクション図

第Ⅲ層は中世の遺物包含層であり，上下2層に分層できる箇所もあった。全般に包含する遺物量は少なく，遺構が検出される部分は比較的色調も濃いが縁辺部に行くに従って色調が薄くなり褐色を呈する部分も見られた。

第Ⅳ層は弥生時代の遺物包含層であり，一部で認められた層序である。低い部分に堆積していたものが残存したものと考えられる。

第Ⅴ層と第Ⅵ層は自然堆積層で，第Ⅴ層は西部から北部にかけて認められ，第Ⅵ層は南部から東部にかけて認められた層序である。第Ⅴ層の下層は黄褐色砂礫土層となっていた。

第Ⅱ層出土遺物

土師質土器（Fig.85－1・2）

1は杯で，口縁部は内湾気味に上がり，

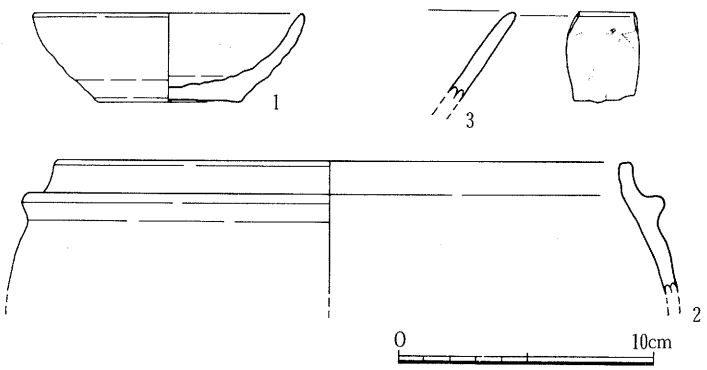


Fig. 85　B区第Ⅱ層出土遺物実測図

端部は細く仕上げられる。底部外面は回転糸切り底である。2は鍋で，体部は内湾気味に上がり，口縁部は内傾して上がる。端部はほぼ真上を向く平面をなす。外面口縁下には小さな鍔が付く。

青磁（Fig.85－3）

碗で，口縁部の一部が残る。口縁部外面には鎬蓮弁文が施される。器面にはオリーブ灰色の釉を施釉する。

③C区

調査区中央部に位置し，真中の微高地部分に当たる。工事では農道部分に当たり，かつ工法が切り土となっていたため南北に北からGトレンチ（2×7m），Hトレンチ（2×7m），Iトレンチ（2×7m），Jトレンチ（2×7m）を設定して調査した。その結果，Jトレンチから遺構が検出されたため発掘区を拡張した。この発掘区からは中世の重なり合った複数の建物跡が検出され，中には柱根が残存していた建物もあった。C区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　黄褐色～暗褐色粘質土層

第Ⅲ層　黒色粘質土層

第Ⅳ層　褐色粘質土層

第Ⅴ層　黄褐色砂質土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅲ～Ⅳ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測り，下層部には鉄分が沈澱した床土が認められた部分もある。現況は水田である。

第Ⅱ層は中世の遺物包含層である。全般に包含する遺物量は少なく，遺構が検出される部分（Jトレンチ）は比較的色調も濃く暗褐色を呈するが北側のトレンチに行くに従って色調が薄くなり黄褐色となっていた。

第Ⅲ層は黒ボク層で，自然堆積層であり，南部で認められた。堆積は厚さ8㎜前後であった。

第Ⅳ・Ⅴ層は自然堆積層で，第Ⅳ層は北部と南部で認められ，第Ⅴ層は発掘区中央部から西部にかけて認められた層序である。

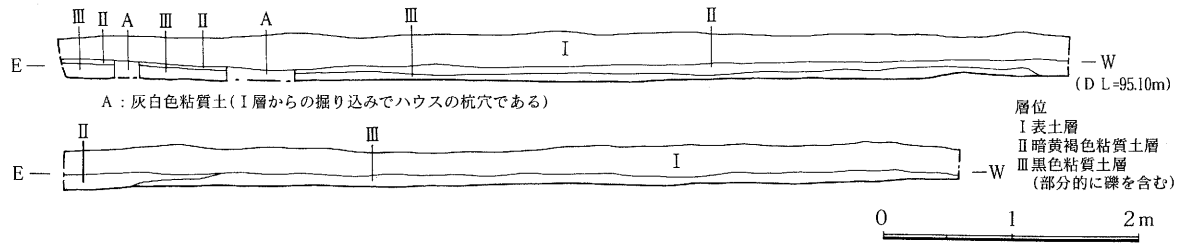


Fig. 86　C区南壁セクション図

第Ⅱ層出土遺物

土師質土器（Fig.156－1）

小皿で底部を欠く。口縁部は斜め上方に短く上がり，端部は丸く仕上げる。底部外面は回転糸切

り底である。

土製品（Fig.156－2・3）

2点とも紡錘形の土錘で，2は長さ4.9cm，幅1.4cm，重さ0.7g，孔径0.4cmで，3は長さ4.4cm，幅1.3cm，重さ5.3g，孔径0.35cmである。

④D区

調査区東部に位置し，東側の微高地北端部に当たる。工事では農道と用水路部分を対象とし，東西に西からKトレンチ（2×6m），Lトレンチ（2×6m）を設定して調査した。その結果，Lトレンチから遺構が検出されたため発掘区を拡張した。この発掘区からは中世の土坑などが検出された。なお，D区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　黄暗褐色粘質土層（床土）

第Ⅲ層　黒褐色粘質土層

第Ⅳ層　黒色粘質土層

第Ⅴ層　淡褐色砂質土層

第Ⅵ層　灰褐色砂質土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅴ・Ⅵ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測り，下層部には鉄分が沈澱した床土（第Ⅱ層）が認められた部分もある。現況は水田である。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層である。全般に包含する遺物量は少ない。

第Ⅳ層は自然堆積層の黒ボク層である。

第Ⅴ・Ⅵ層は自然堆積層で遺構検出面となっており，第Ⅲ・Ⅳ層の下層で認められた。

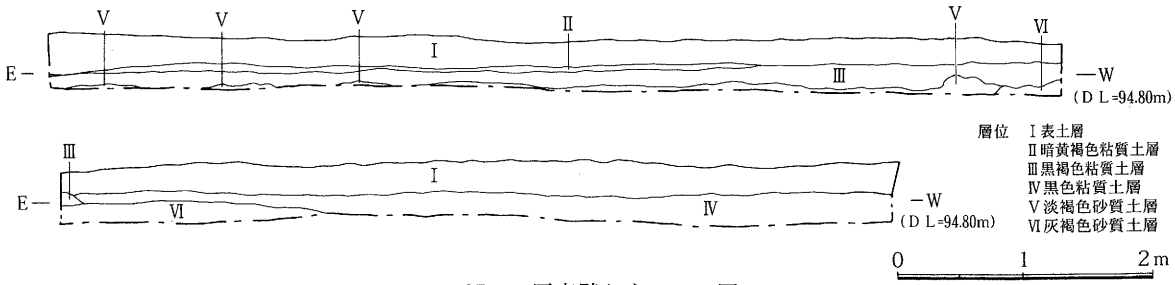


Fig. 87　D区南壁セクション図

⑤E区

調査区南部に位置し，東側の微高地部分に当たる。平成2年度の試掘調査で遺構が検出された部分については当初から工事で影響を受ける範囲全面を拡張して調査した。それ以外の部分については工事の影響を受ける西側の南北に長い水田と南側の東西に長い水田にトレンチを設定した。西側の水田ではMトレンチ（2×14m）とNトレンチ（2×8m），北側の水田ではOトレンチ（8×16m），Pトレンチ（5×9m），Qトレンチ（2×7m），Rトレンチ（2×8m）を調査したが，明確な遺物包含層は検出されず，遺構も全く検出されなかった。遺構が検出されたのは，当初に拡張した発掘区のみで

あった。その発掘区からは弥生時代後期後半の溝跡と中世の建物跡などが検出された。なお，E区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　赤褐色粘質土層（床土）

第Ⅲ層　暗黄褐色砂質土層

第Ⅳ層　灰褐色粘質土層

第Ⅴ層　黒色粘質土層

第Ⅵ層　赤黄色火山灰層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅳ～Ⅵ層上面であった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測る。現況は水田である。この地区では第Ⅱ層として第Ⅰ層の鉄分が沈澱した床土の層が認められた。

第Ⅲ層は中世の遺物包含層である。全般に包含する遺物量は少なく，遺構が検出される部分は比較的色調も濃いが縁辺部に行くに従って色調が薄くなり褐色を呈する部分（第Ⅳ層）も見られた。また，発掘区北西部では遺構は存在しないが，整地の影響か遺物包含層の堆積が厚かった。

第Ⅳ層は調査区東部で認められた第Ⅲ層と同じ遺物包含層である。色調がやや異なり，遺物をほとんど含まない。

第Ⅴ層は第Ⅵ層の火山灰層が風化，腐食し土壌化した所謂黒ボク層で，発掘区東部を中心に認められた。岩井口遺跡で検出したものと同じものである。

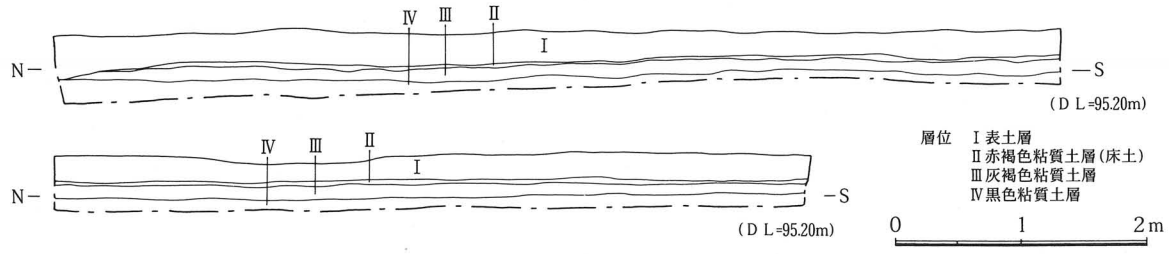


Fig. 88　E区東壁セクション図

第Ⅵ層も岩井口遺跡で検出したものと同じ火山灰層で，今から約6,300年前に降下した鬼界アカホヤテフラの堆積層で，発掘区中央部の標高の高い部分で認められた。東部では第･層の下で認められる。

第Ⅱ層出土遺物

土師質土器（Fig.89－1）

杯で，口径12.2cm，器高4.3cm，底径は5.7cmである。底部は平らで，体部は内湾気味に上がり，口縁部で外傾し，端部を丸く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施し，内底面にナデ調整を加える。体部外面は未調整である。

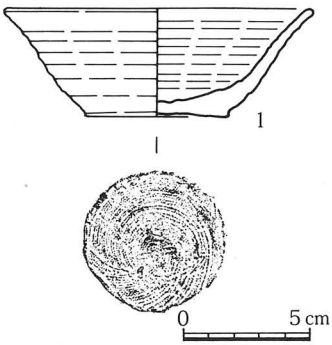


Fig. 89　第Ⅱ層出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

本項では，調査区ごとに竪穴住居跡又は竪穴状遺構（ST），掘立柱建物跡（SB），塀跡又は柵列（SA），土坑（SK），溝跡（SD），ピット（P），性格不明遺構（SX）の順に主だった遺構について記している。なお，弥生時代の遺構と中世の遺構が明確に区分されるB区とE区については弥生時代と中世に分けて記述した。なお，遺構番号及び遺物番号は各地区で通し番号とし，時代での区別はしていない。

（1）A区

トレンチ調査の部分で，掘立柱建物跡3棟，塀跡3条などが検出されている。

A 掘立柱建物跡

SB－101

Cトレンチ北部で検出した梁間2間（3.60m），桁行1間（1.80m）以上の東西棟建物とみられる。SA－101・102の北側に位置する。棟方向はN－80°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.80m等間隔，桁行（東西）も1.80mである。柱穴は径約25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は灰黒色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

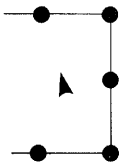


Fig. 90　S B－101

SB－102

Dトレンチ北部で検出した梁間1間（2.00m）以上，桁行2間（6.60m）の南北棟建物とみられ，西側は未調査である。SB－103の北側に位置する。棟方向はN－1°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.00m，桁行（南北）が3.20mと3.40mであり，柱間寸法が他の建物に比べ長くなっている。柱穴は径約20cmの円形で，柱径は12cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黒色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

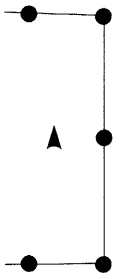


Fig. 91　S B－102

SB－103

Dトレンチ南部で検出した梁間2間（3.30m），桁行1間（1.50m）以上の東西棟建物とみられ，南側1個は未検出で，さらに西へ延びる。SB－102の南側に位置する。棟方向はN－87°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.50mと1.80m，桁行（東西）が1.50mである。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は径20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰黒色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

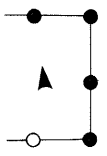


Fig. 93　S B－103

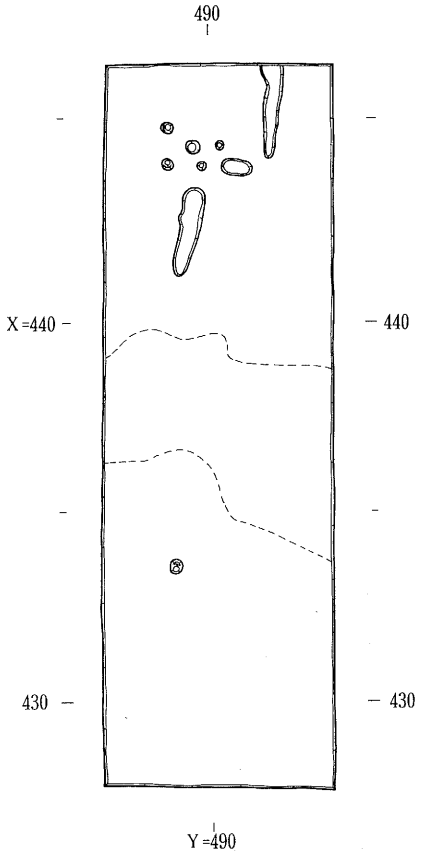


Fig. 92　Bトレンチ遺構平面図（S＝1：200）

B 塀跡及び柵列

SA−101

Aトレンチ中央部で検出した南北塀（N−1°−E）である。5間分（10.00m）を検出し，柱間は2.00m等間隔である。柱穴は径20～25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はなかった。

SA−102

Cトレンチ中央部で検出した南北塀（N−1°−E）である。SA−103と隣接する。3間分（5.70m）を検出し，柱間は1.80mと2.10mである。西側が未調査であるため建物跡の可能性もある。柱穴は径25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は灰黒色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

SA−103

Cトレンチ中央部で検出した南北塀（N−1°−E）である。SA−102と隣接する。3間分（6.20m）を検出し，柱間は2.00mと2.10mである。西側が未調査であるため建物跡の可能性もある。柱穴は径25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は灰黒色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

C 土坑

SK−101

Aトレンチ中央部で検出した不整形土坑である。SA−101の東側に位置する。長辺2.00m，短辺1.00m，深さ10cmで，南に向ってやや傾斜している。埋土は灰黒色粘質土である。復元できる遺物はない。

SK−102

Aトレンチ南部で検出した整形円形土坑である。長径1.32m，短径1.18m，深さ17cmで，南側に1段高い平場となっている。埋土は灰褐色粘質土である。復元できる遺物はない。

D 溝跡

SD−101

Dトレンチ北部で検出した東西溝である。溝はさらに西側に延びる。幅約40cm，深さ20cm前後で，約4.50mを検出した。断面は底の広い箱形を呈す。埋土は淡黒色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

SD−102

Dトレンチ南部で検出した東西溝である。溝はさらに東西に延びる。幅25～30cm，深さ25cm前後で，約5.50mを

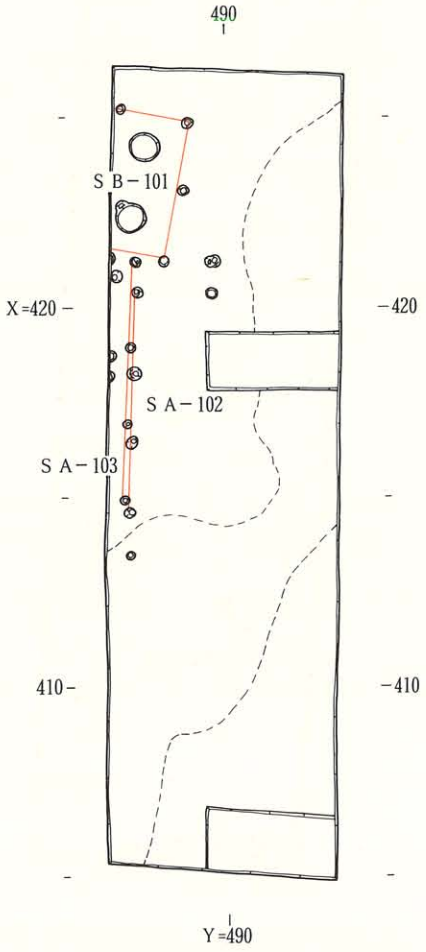


Fig. 94 Cトレンチ遺構平面図（S＝1：200）

検出した。断面は底の狭い箱形を呈す。埋土は黒色粘質土に褐色粘質土のブロックを含むものであった。復元できた遺物はなかった。

Eピット

P−101

Dトレンチ北部で検出したピットで，SB−102の東妻の東隣に位置する。径約25cmの円形で，深さは約18cmである。埋土は淡黒色粘質土であった。

出土遺物はないが，柱根が出土した。

出土遺物

木製品（Fig.97−1）

柱根の基部の一部が残存する。基部にヨコ方向の切断面が残る。残存長16.80cm，残存幅は11.70cmである。樹種はツガとみられる。

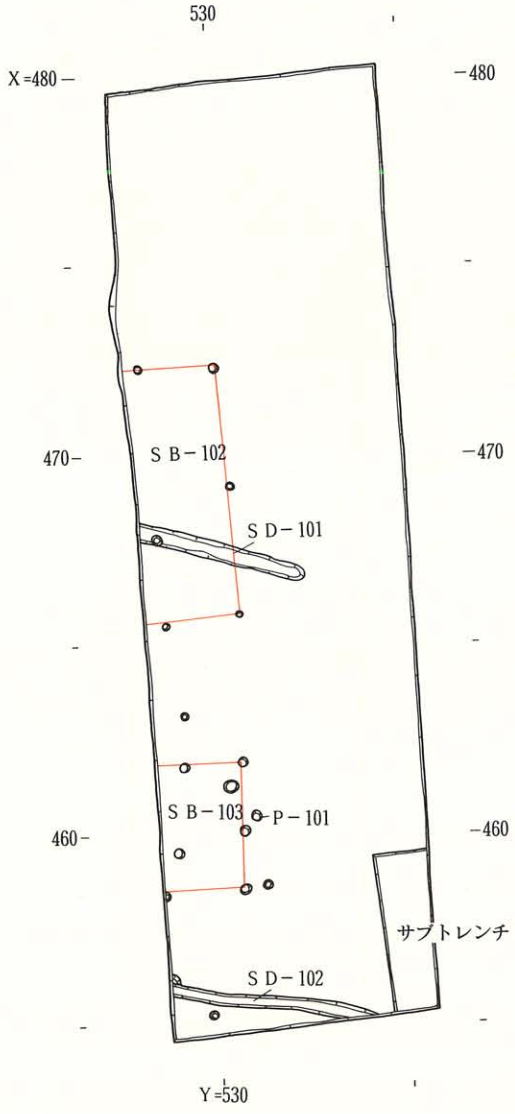


Fig. 95　Dトレンチ遺構平面図（S=1：200）

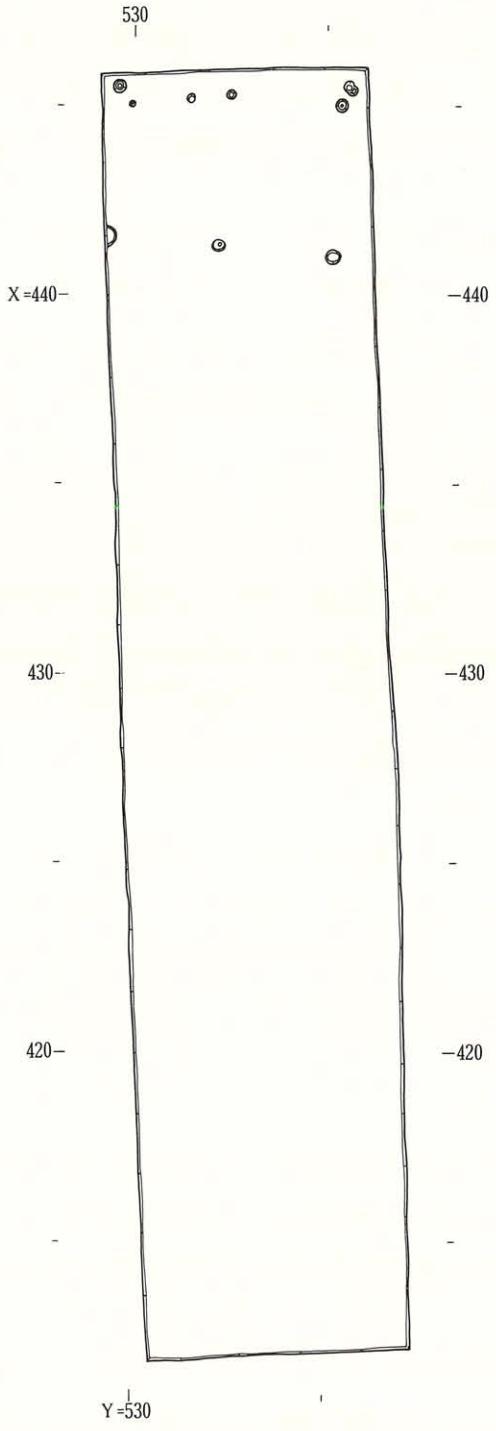


Fig. 96　Eトレンチ遺構平面図（S=1：200）

（2）B区

弥生時代後期後半の竪穴住居跡3軒や中世の多数の建物跡などを検出した。

①弥生時代

A 竪穴住居跡及び竪穴状遺構

ST－201（Fig.98・99）

調査区南端部で検出した竪穴住居跡である。住居の中央部を中心にコンテナケース約30箱分の土器が投棄された状態であった。平面形はやや不整の隅丸方形で，一辺6.50～6.80mを測り，長軸方向はN－4°－Wとやや西に振っている。残存する壁高は約40cmで，床面の標高は94.800m前後である。付属遺構として，ベット状遺構と大小14個のピットを検出した。まず，ベット状遺構は地山を西壁に向いてコの字形に削り出した上で，西壁部分を除いて盛り土で成形している。また，南東隅は幅が極端に狭い。主柱穴としてはP－1～4が考えられる。その他のピットは全般に深さが浅く，主柱穴とは考え難い。P－1は径約33cmの円形で，深さ32cm，P－2は径約44cmの円形で，深さ48cm，P－3は径約30cmの円形で，深さ37cm，P－1は径約45cmの円形で，深さ32cmであり，柱間寸法はP－1～2間，P－2～3間，P－4～1間が約3.00m等間隔で，P－3～4間が4.20mとなっている。西側に向いて開いた形となっている。4本柱で棟を支えるにはP－3～4間がやや広く，場合によっては西壁際に1本立てて5本柱で棟を支えていた可能性も考えられる。埋土は4層に分層され，第Ⅱ層

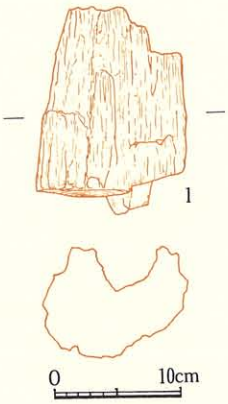


Fig. 97 P－101 柱根実測図

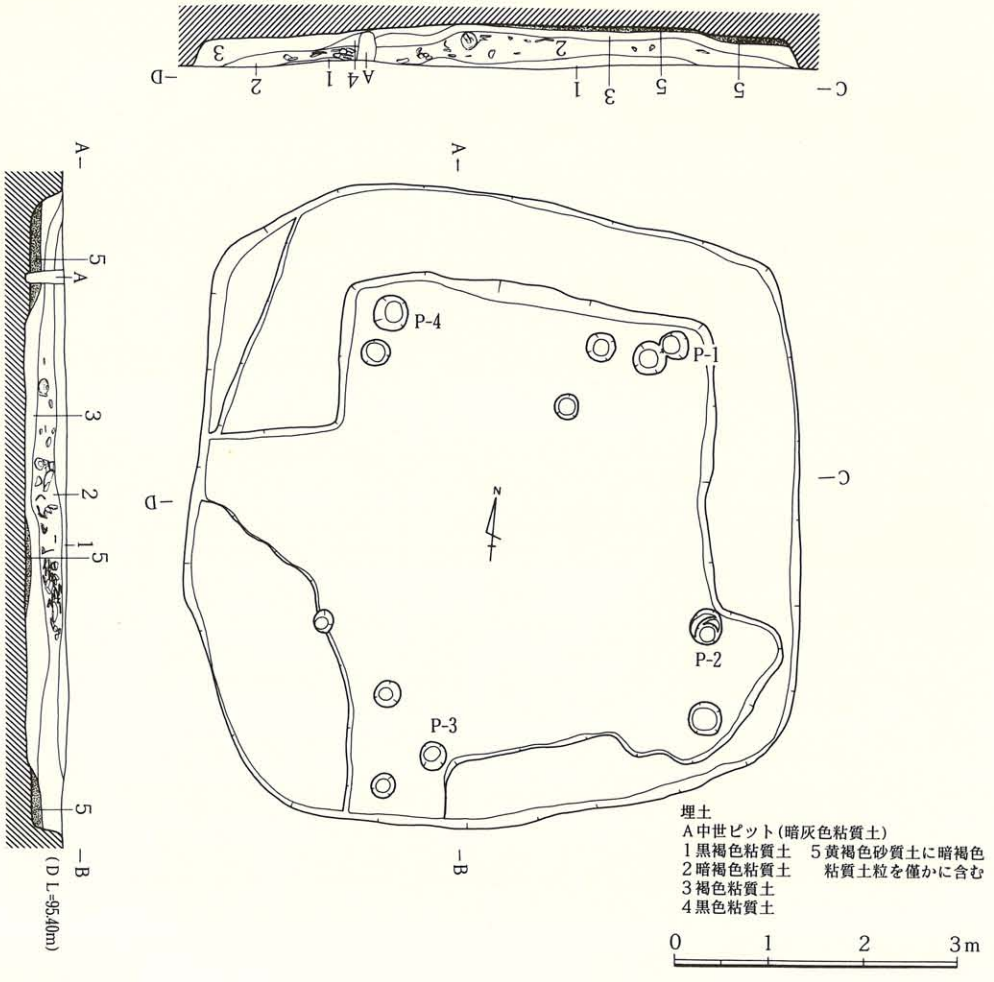


Fig. 98 ＳＴ－201 ベット状遺構検出状態

から多量の土器が出土している。第Ⅰ層は黒褐色粘質土，第Ⅱ層は暗褐色粘質土，第Ⅲ層は褐色粘質土，第Ⅳ層は黒色粘質土であった。この内第Ⅲ層は住居周辺の自然堆積層が流れ込んで堆積したものと考えられることから，住居の三分の一ほどが埋まった段階で，土器捨て場として使用されたものと推察される。復元できた遺物は133点であった。

出土遺物

弥生土器（Fig.100～108－4～134）

器種には壷（4～30），甕（31～77），甑（78～82），鉢（83～118），高杯（119～123），小形精製土器（124～129），小形粗製土器（130～134）があり，甕と鉢の出土が目立つ。

まず，壷は口頸部形態により6類に分類することができる。A類は口頸部が比較的長く，口縁部が大きく開くもので，一見ラッパ状を呈するものである。4～11が該当する。口頸部外面にはハケ調整と胴部外面には叩きの後にハケ調整を施すものが大半で，さらにヘラ磨きを加えるもの（6・8・9）もある。また，頸部と肩部の境に粘土紐を貼付し，ヘラ状工具で綾杉文風に刺突文を施すも

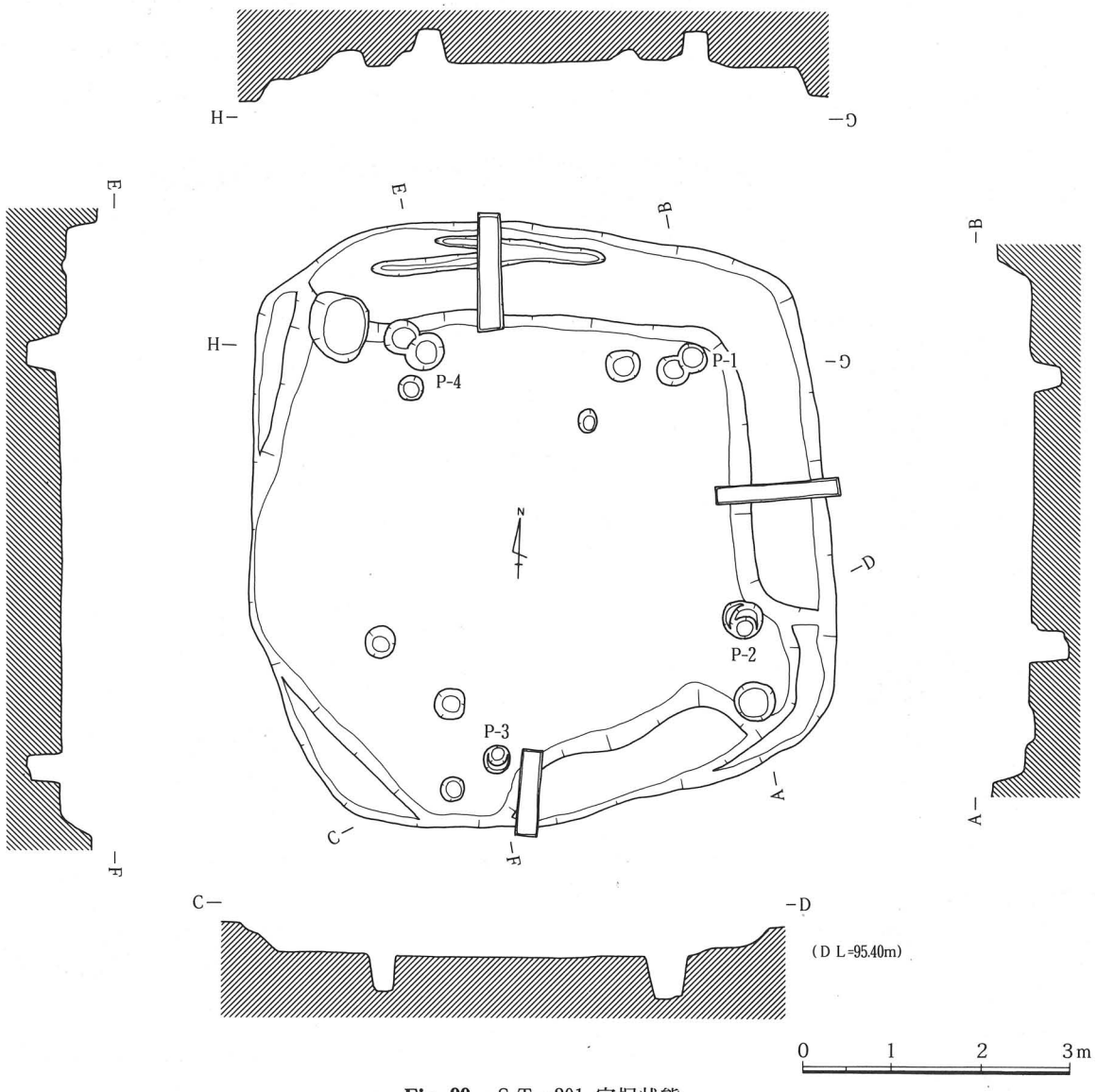


Fig. 99　ＳＴ－201 完掘状態

の（4・5）もみられる。B類はA類と同じく大きく口縁部が開くものであるが，A類に対し口頸部が短い点が異なる。12が該当する。胴部外面は叩きの後ハケ調整を施し，内面もハケ調整を施す。13は口縁部を欠損するが，A類かB類とみられる。外面には叩きの後ハケ調整，さらにヘラ磨きを加え，内面は下胴部にナデ調整，中胴部以上にハケ調整を施す。C類は頸部が短く，口縁部が外傾ないし若干外反するもので，胴部が球形を呈する。14～18が該当する。胴部外面は叩きの後ハケ調整を加え，内面にもハケ調整を施している。D類は所謂二重口縁壷であり，19～23が該当する。さらに頸部の長さによっても細分できる。すなわち20のように短く外傾する頸部にやや内傾する口縁部が付くものと19・21～23のように大きく外反した頸部に内傾する口縁部が付くものである。胴部外面は叩きの後にハケ調整を加え，さらにヘラ磨きを施すもの（20・21）もみられる。また，口縁部外面に波状文を施したもの（23）もみられる。E類は小形品で，口径が10cm前後で内湾気味に上がるものであり，胴部の形状によりさらにⅠ類とⅡ類の二つに細分される。E－Ⅰ類は胴部が肩の張らない所謂倒卵形を呈するもの（24・25）で，E－Ⅱ類は胴部上位に最大径があるもの（26・27）である。25・27の口縁部は内湾気味に上がり，端部を細く仕上げている。胴部外面にはハケ調整を施し，内面はナデ調整のものが多い。225のように外面は叩きを行った上にハケ調整を加え，内面にもハケ調整を施した例もある。F類は小形壷で球形の胴部に短く外傾する口縁部が付くもの（28）である。内外面にハケ目が残る。29は肩部の破片で，頸部と肩部の境に2本の粘土紐を貼付した上にヘラ状工具で斜格子状の刻目を加えている。30は底部で，平らな底部から胴部は内湾気味に上がっている。外面にはハケ目，内面にはハケ調整の後に指ナデ調整を加えている。

甕は大きく3類に分類することができる。A類は口径が比較的大きく，最大径が胴部にあるもので，口縁部は胴部から外反ないし外傾しくの字形を呈するものである。これらは底部が平底のもの（Ⅰ類）と丸底のもの（Ⅱ類）に細分される。A－Ⅰ類には31～38，A－Ⅱ類は57・58がある。39～56は胴部から口縁部にかけての破片である。調整技法はほぼ同じで，胴部外面は叩きの後胴部下半を中心にハケ調整を加え，内面は肩部から口縁部にかけてハケ目が残り，中胴部以下には指ナデを中心にナデ調整を施している。口縁部にはヨコナデ調整を最後に加えている。口縁部外面にも叩きを施した上にハケ調整を加えるもの（33・41・53）もある。また，57・58のように外面全面に叩きを施し，ほとんどハケ調整を加えないものもみられる。B類は口径と胴径がほぼ同じ値を示すもので，胴部は底部から内湾気味に上がり，口縁部は短く外反ないし外傾する。59～63が該当する。59・60のように器高が16cmに満たない小形品もある。小形品は概して調整が丁寧で，胴部外面は叩きの後全面にハケ調整を加える。61・62の外面には粗い叩目が明瞭に残る。C類は口径が25cm以上と広く，胴部もほぼ同じ径をなすもので，深鉢と表現し得るものである。64・65が該当する。胴部外面には叩きの後にハケ調整，内面にもハケ調整を加える。66～77は底部の破片で，口縁部を欠く。底部はほぼ平らで，76のようにボタン状の突起となった底部や77のような丸底もみられる。調整技法は特に変わりなく，胴部外面には叩きの後に下胴部を中心にハケ調整，胴部内面にはハケ調整の後に指ナデを中心にナデ調整を加えている。

甑は口縁部まで残存しているものはなく，底部の形状により2種類に分類することができる。A類は尖り底のもので，78～81が該当する。B類は丸底のもので，82が該当する。外面はハケ調整の

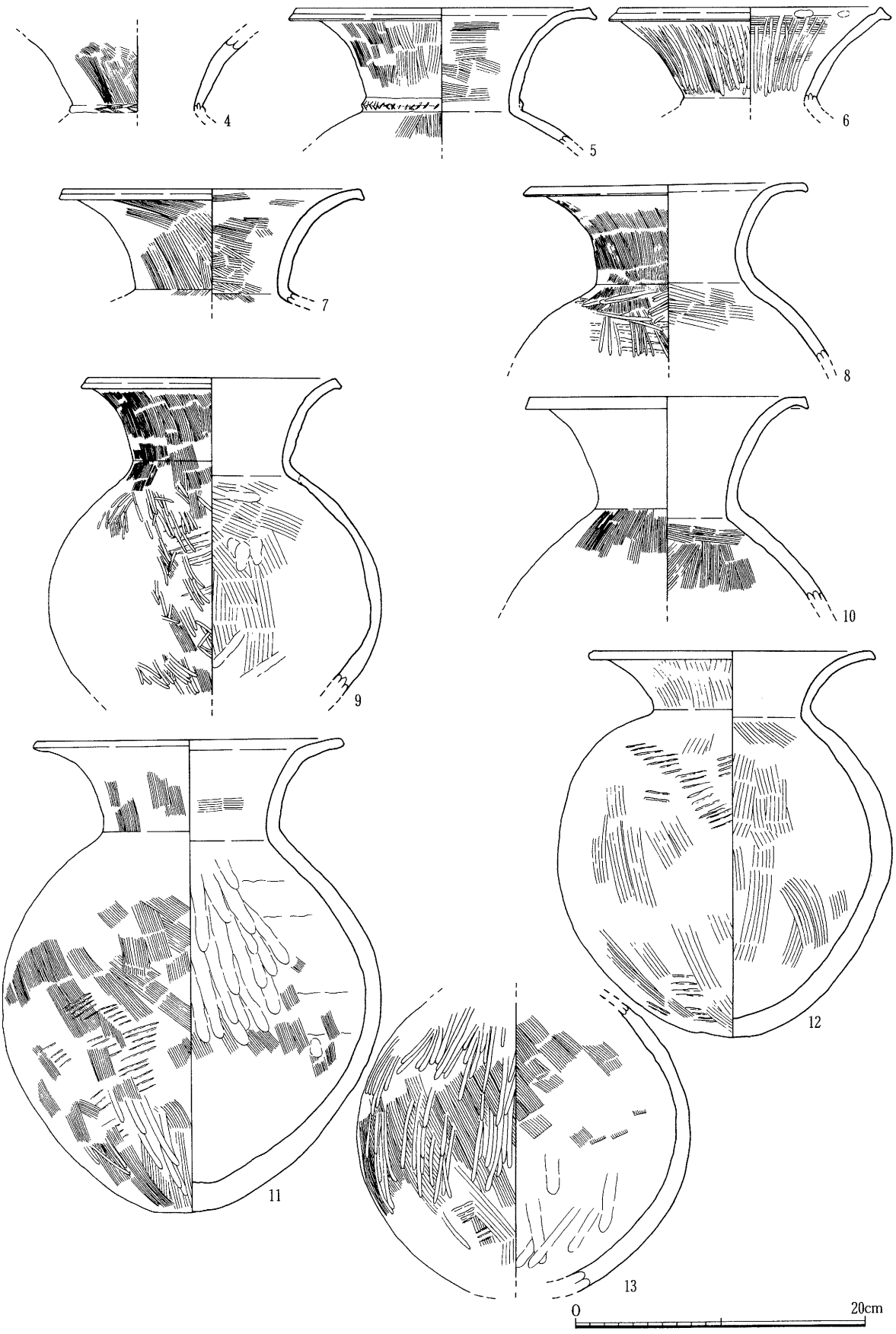


Fig. 100　ＳＴ－201 出土遺物実測図1

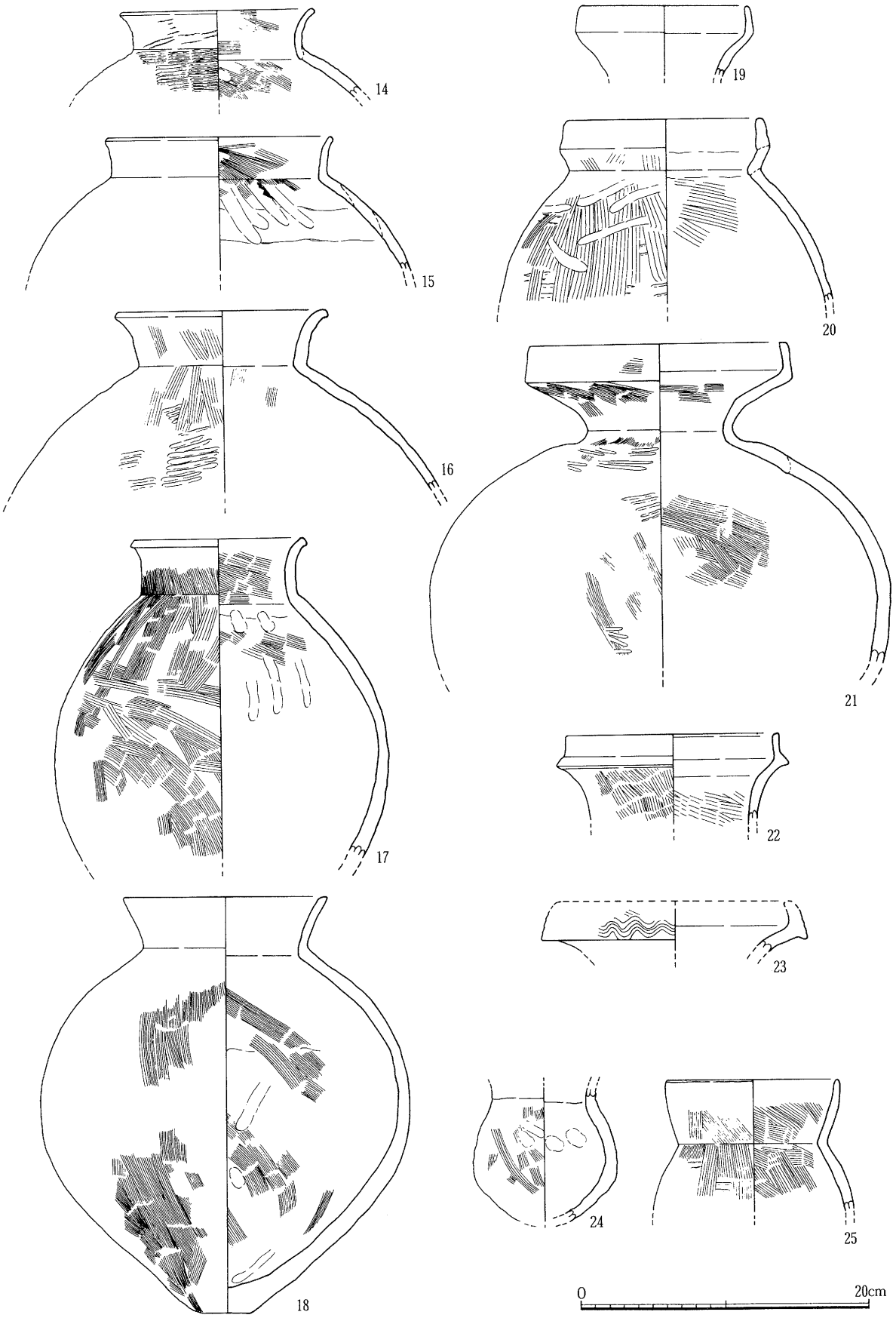


Fig. 101 ＳＴ－201 出土遺物実測図2

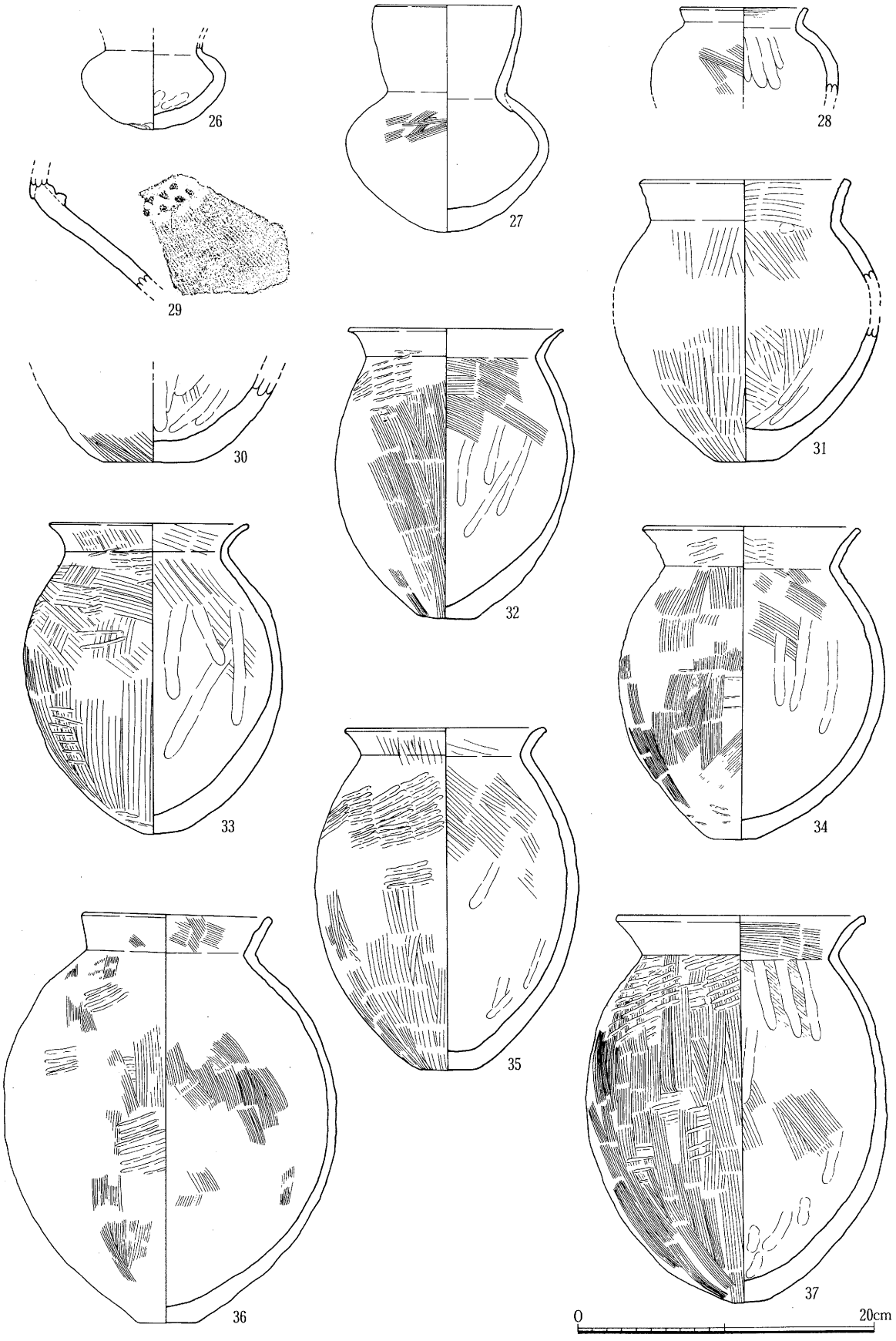


Fig. 102　ＳＴ－201 出土遺物実測図3

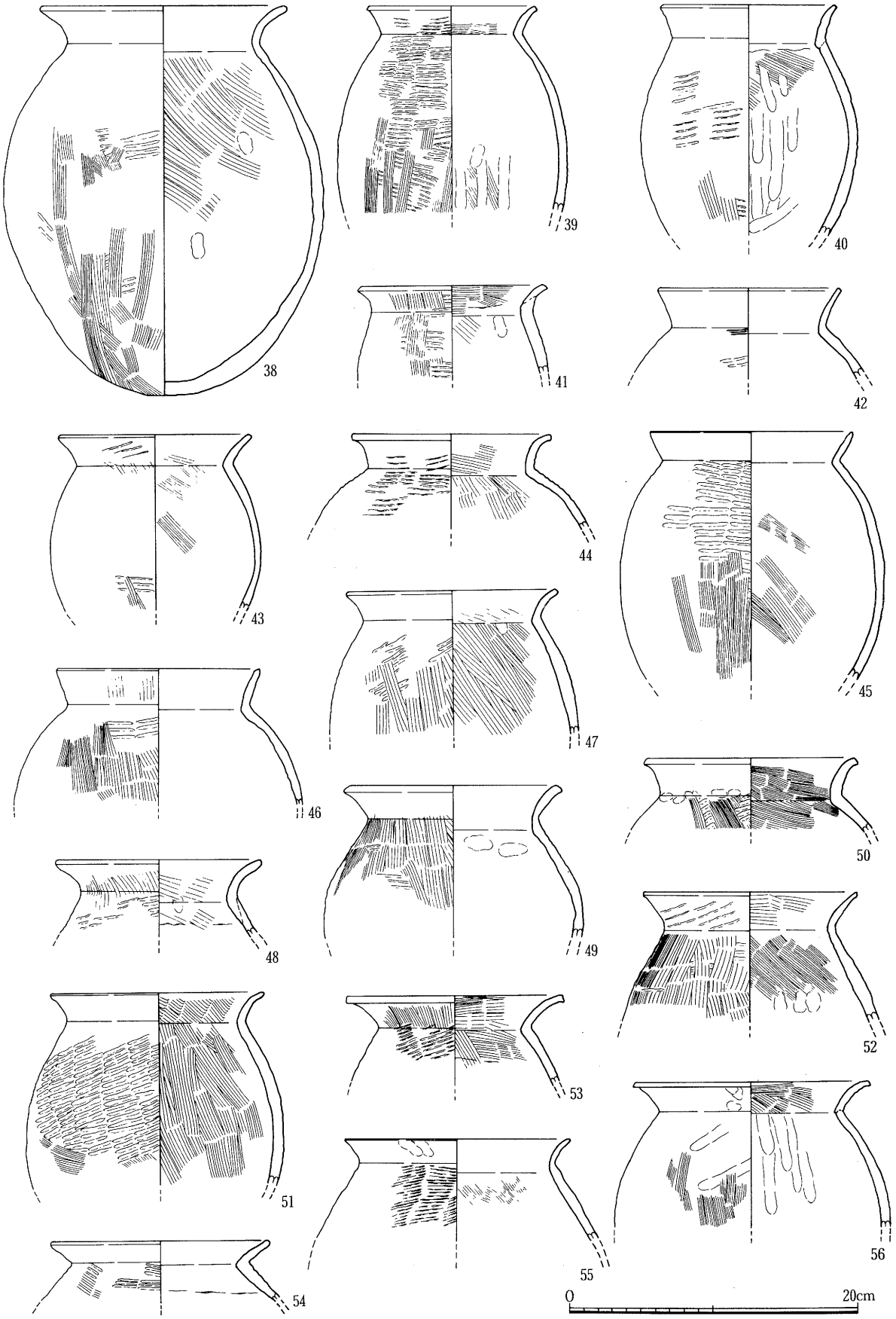


Fig. 103 ＳＴ－201 出土遺物実測図4

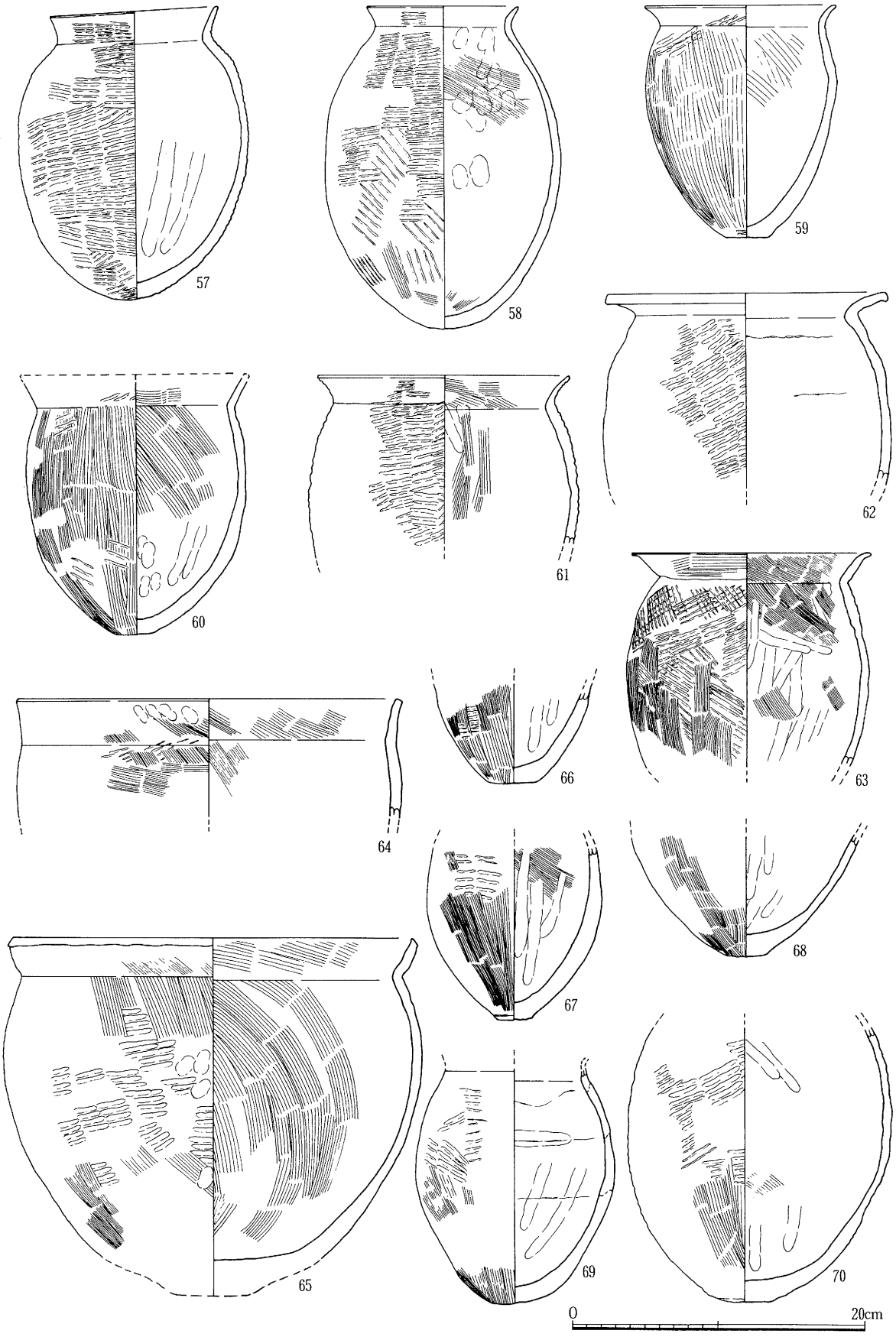


Fig. 104 ＳＴ－201 出土遺物実測図5

ものと叩きを施したものがある。内面はハケ調整の後指ナデを中心としたナデ調整を施す。なお，底部に穿たれた円孔はすべて1個である。

鉢は大きく5類に分類することができる。A類は口径16cm以上の比較的大きな鉢で底部の形状は尖り底か丸底のもので，さらに器高指数によって4種類に細分できる。A－Ⅰ類は器高指数が33前後のもので，形態的には浅い皿状をなす。83～86が該当する。外面は叩きを施したもの，叩きの後にハケ調整を加えたもの（86）があり，内面にはハケ調整が施されさらにヘラ磨きを加えるもの（84）もある。A－Ⅱ類は器高指数が45前後のもので底部は概して丸く，口径20cmを越すものもみられる。87～94が該当する。調整技法はA－Ⅰ類とほぼ同じである。A－Ⅲ類は器高指数50前後のもので，口径18cm前後，底部が尖り底のものが多い。95～99が該当する。調整技法に大きな違いはみられないが，全般に調整が丁寧で，叩きの後にナデ調整を加えている。A－Ⅳ類は器高指数55前後と底部の深いもので，100・101が該当する。調整技法に大きな違いはみられず，ハケ調整を主に使用している。101の内面にはハケ調整の後にヘラ磨きを加えている。B類は底部外面がボタン状の突起となっているもので，器高指数40前後で口径が比較的大きい。102～105が該当する。内外面ともハケ調整が施され，105の外面には叩目が残る。また，ST－203からは小形のものが出土している。C類は口径12cm前後と小形の鉢で，底部と体部の形態により4類に細分される。C－Ⅰ類は

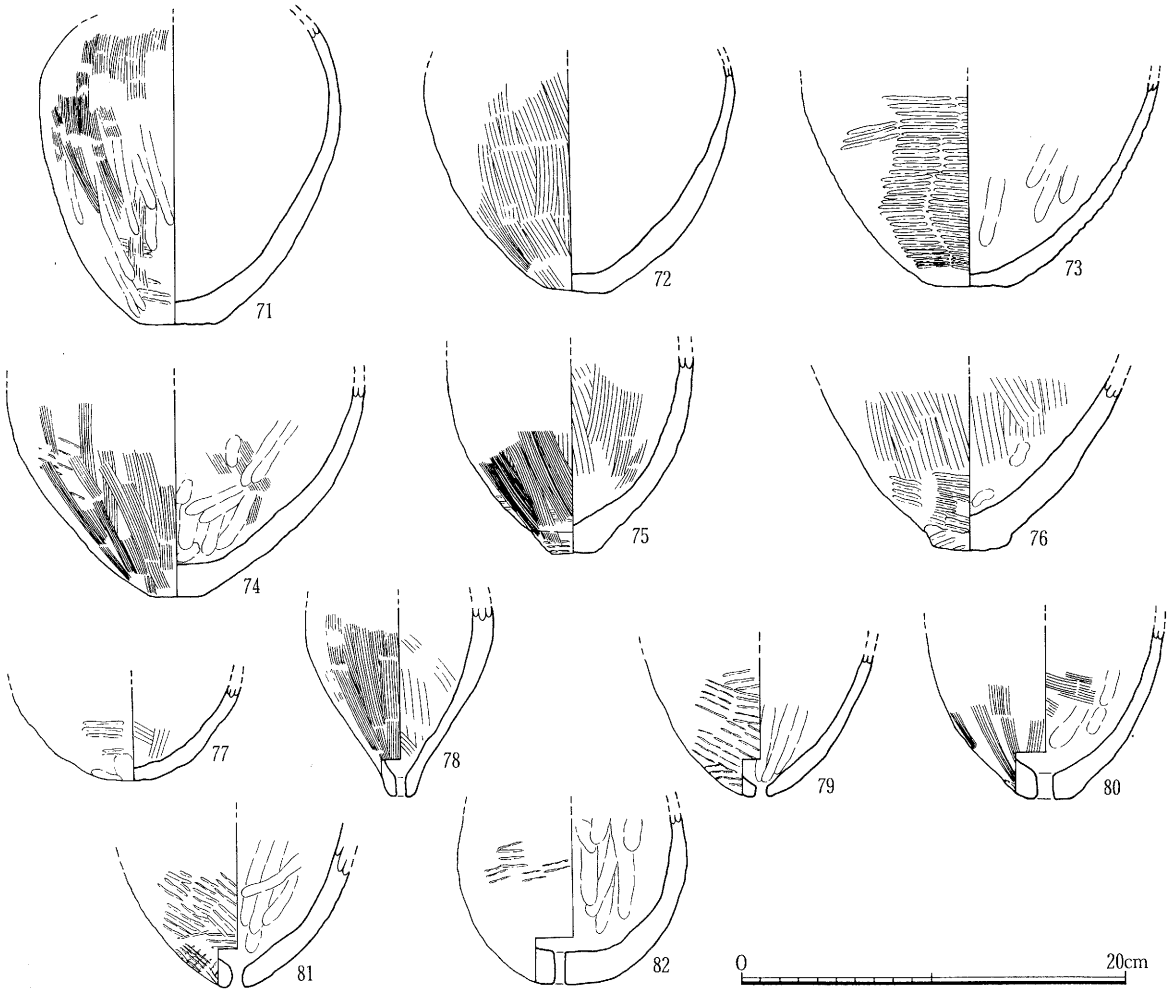


Fig. 105 ＳＴ－201 出土遺物実測図6

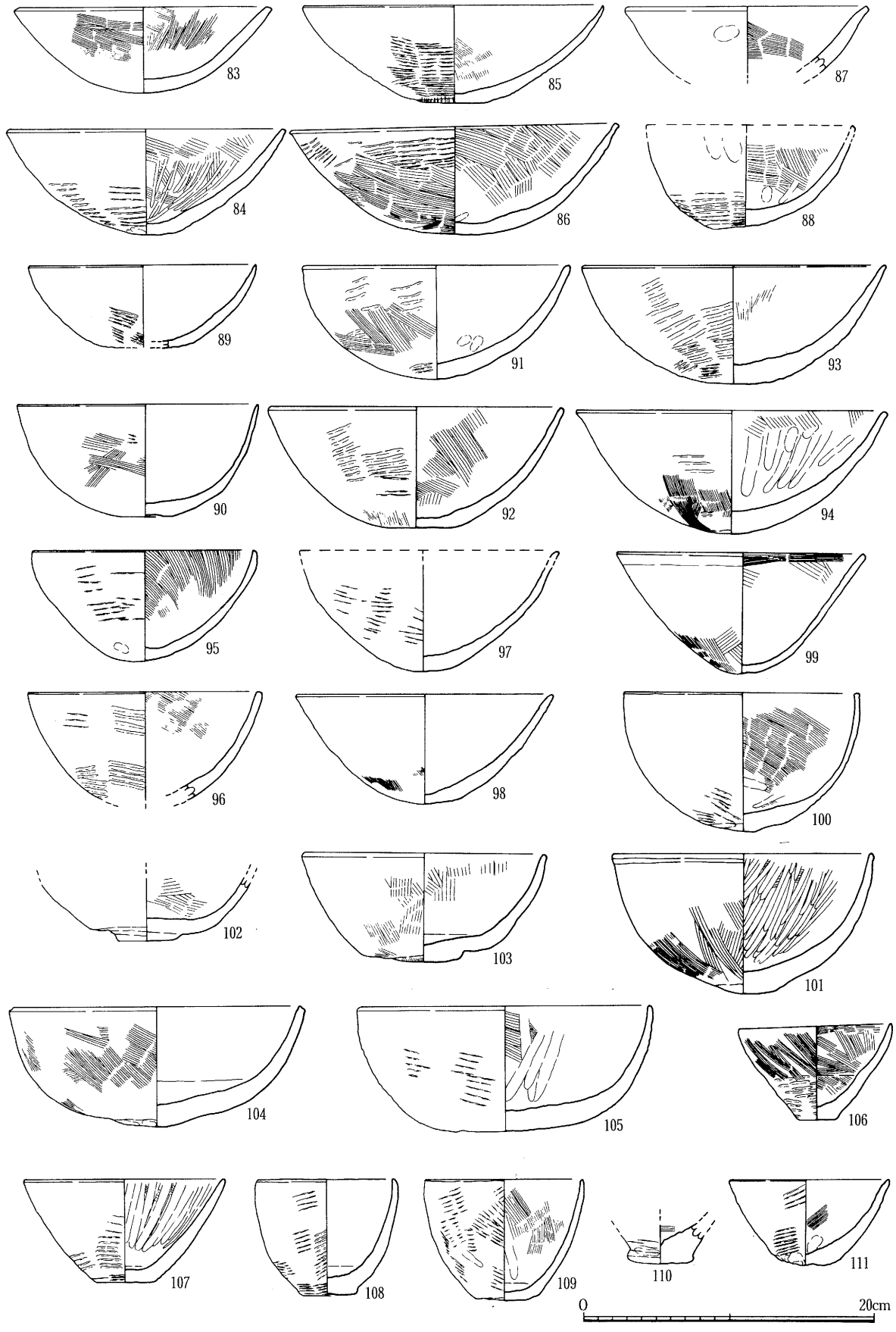


Fig. 106 ＳＴ－201 出土遺物実測図7

平底の鉢で，106～110が該当する。体部から口縁部にかけて外上方に上がるもの（106・107），内湾気味に上がるもの（108・109）がみられる。外面は叩きの後にハケ調整を加え，内面はハケ調整を施すもの，さらにナデ調整を加えるもの（109）やヘラ磨きを加えるもの（107）がある。C－Ⅱ類は丸みを帯びた底部をなすもので，丸底に近いものである。111～115が該当する。調整技法に大きな違いはない。C－Ⅲ類は丸底の底部を有するもので，口縁部も内湾気味に上がる。116が該当し，外面は叩きの後にナデ調整を加え，内面はハケ調整の後にナデ調整を加える。C－Ⅳ類はC－Ⅲ類と同じく丸底の底部を有するもので，口縁部が体部から内湾して上がり，さらに内湾し内側を向くものである。117が該当する。外面には叩きの後にナデ調整，内面は指ナデを主としたナデ調整がみられる。C－Ⅴ類は小さな体部に外上方に延びる長い口縁部が付くもので，小形丸底坩に似た形態をなす。118が該当する。内外面にはハケ調整が施される。

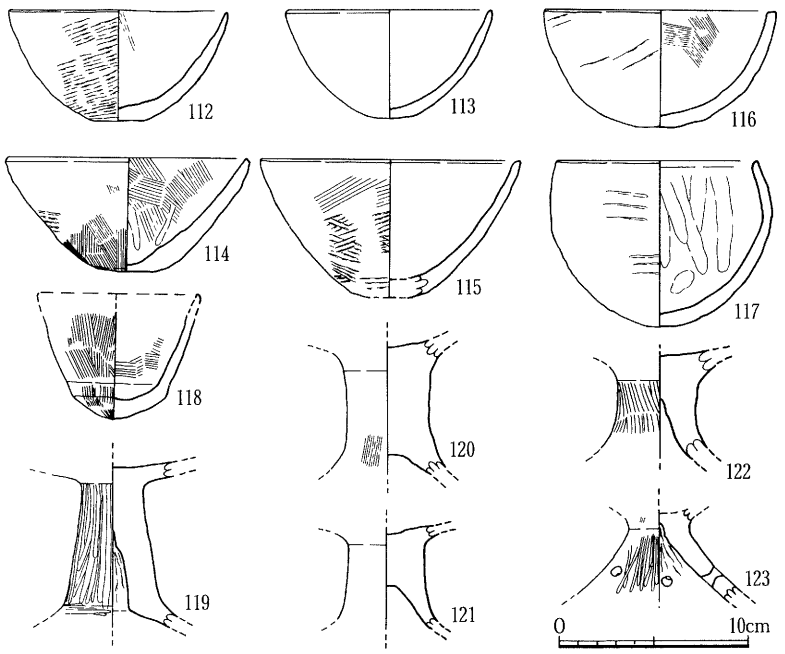


Fig. 107　ＳＴ－201 出土遺物実測図8

高杯は脚台部のみが残存する。脚台部は柱脚が中実なもの（119～121）と中空なもの（122・123）

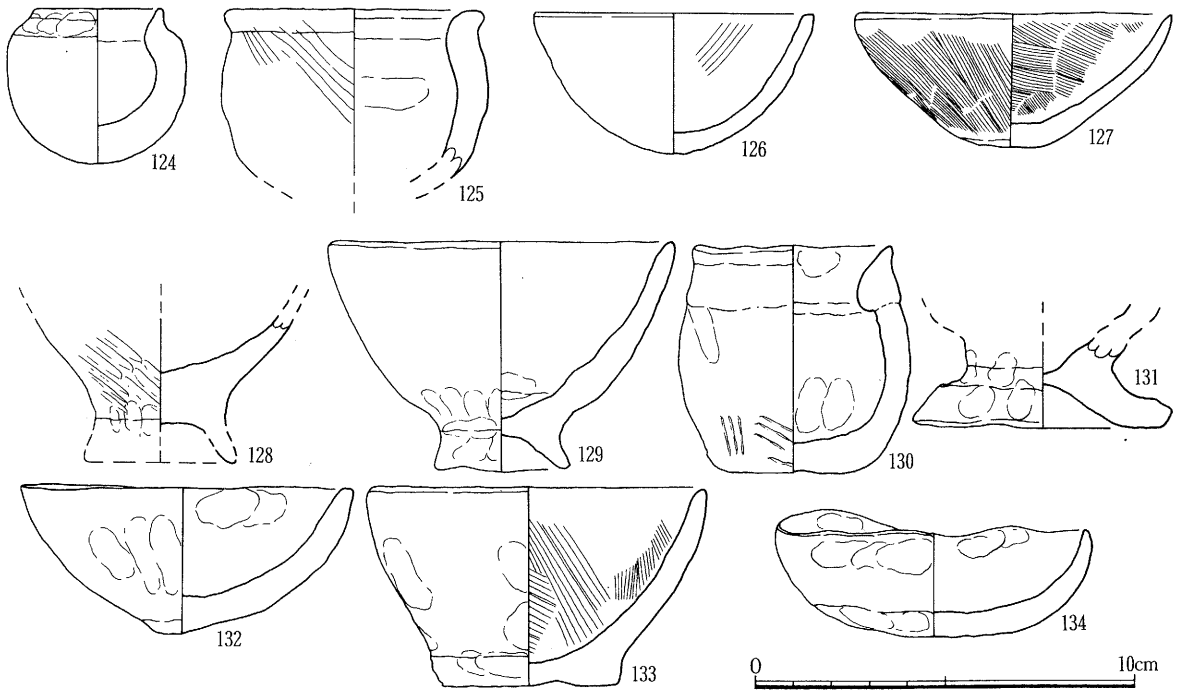


Fig. 108　ＳＴ－201 出土遺物実測図9

に分けることができる。外面にはハケ調整を施すもの（120・122），さらにヘラ磨きを加えるもの（119・123），ナデ調整を施すもの（121）がみられる。123には3方向に円孔が穿たれる。また，内面にはしぼり目が残る。

小形精製土器（ミニチュア土器）には壷形のもの（124・125），鉢形のもの（126・127），台付き鉢形のもの（128・129）がみられる。124は球状の胴部に小さな口縁部が付く短頸壷に似せたもので，器面はナデ調整が施され，口縁部外面には指頭圧痕が残る。125のほぼ同じ形態をなす。外面口縁部から胴部にかけてハケ目が残る。126は内面にハケ調整の後にナデ調整，外面にもナデ調整，口縁部にはヨコナデ調整を施す。127は器面全面にハケ調整を施し，さらに口縁部にはヨコナデ調整を加える。128は口縁部と高台部分が欠損する。外面には叩目が残り，内面はナデ調整が施される。129は小さな椀状をなすものにハの字形に開く高台が付く。底部外面から高台部分にかけて指頭圧痕が残る。

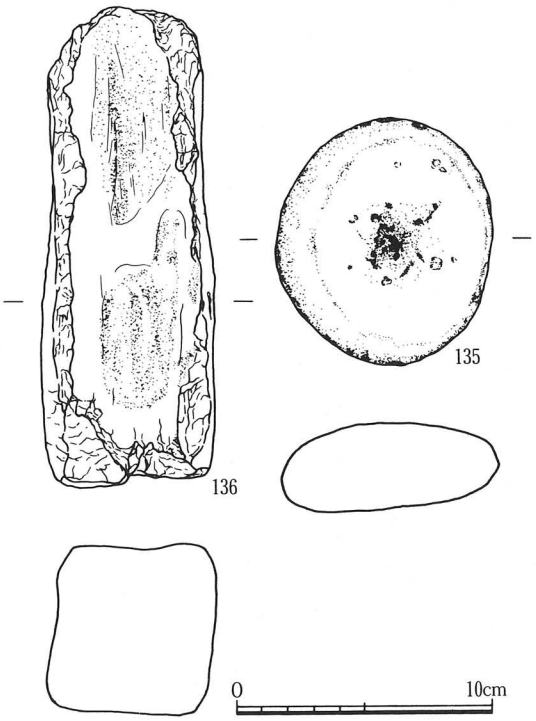


Fig. 109　ＳＴ－201 出土遺物実測図10

小形粗製土器（手づくね土器）にも壷形のもの（130），台付きの鉢でないかとみられるもの（131），椀状をなすもの（132～134）がある。130は内外面に指頭圧痕が残り，胴部下端には叩目も残る。131が高台部分で，器面には指頭圧痕で凹凸がみられる。132は尖り底で器面には指頭圧痕が残る。133は平底で，口縁部はやや内湾気味に上がる。内面にはハケ調整が施されるが，外面には指頭圧痕が残る。134は皿状をなすもので，器面には指頭圧痕が残る。

石製品（Fig.109－135・136）

135は叩石で，片面中央部と側面に弱い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩である。136は砥石で4面を比較的よく使用している。石材は細粒砂岩である。

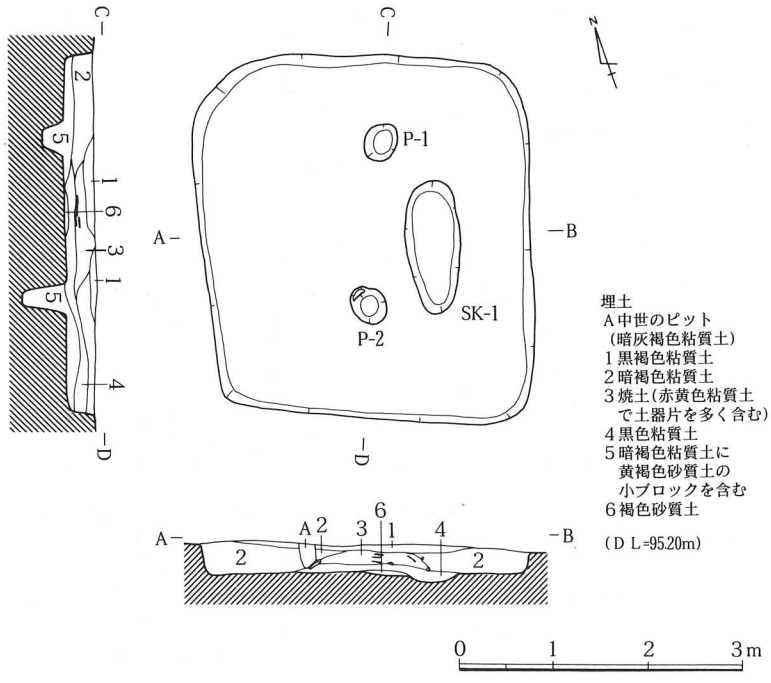


Fig. 110　ＳＴ－202

ST－202（Fig.110）

調査区中央部やや東よりで検出した竪穴住居跡である。ST－201の北側約12mに位置する。平面形はほぼ方形で，東西約3.50m，南北約3.80mを測り，長軸方向はN–19°–Eと東に振っている。残存する壁高は約28cmで，床面の標高は94.740m前後である。付属遺構として，舟形の土坑1基と2個のピットを検出した。検出した2個のピットは主柱穴と考えられ，他にピットが検出されていないことから2本柱で棟を支えていたものと推察される。P–1は径32～42cmの円形で，深さは16cmとやや浅く，P–2は径32～40cmの円形で，深さは43cmである。柱間は約1.80mである。2個の主柱穴の東隣には，長辺1.20m，短辺48cm，深さ6cmの舟形土坑がある。埋土は6層に分層されるが，床面には第Ⅳ～Ⅵ層（黒色粘質土を主に黄褐色砂質土の小ブロックを含む土層）の堆積がみられ，その上に中央部では厚さ15～20cmの焼土（第Ⅲ層）の堆積が認められる。焼土の上に第Ⅱ層（暗褐色粘質土），第Ⅰ層（黒褐色粘質土）が堆積している。遺物はST–201のように投棄された状態のものはなく，21点が復元できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.111－137～157）

器種には壷（137～139），甕（140～147），甑（148），鉢（149～154），高杯（155）がある。

まず，壷では，1038・139は口縁部が大きく開くものでA類に属すると考えられる。139は口縁部を欠くが，4・5と同じ文様が頸部と肩部の境に施されていることからほぼ同形態とみられる。138・139の器面にはハケ調整が施され，内傾する平面をなす口縁端部には櫛描き波状文が施される。139の外面にはハケ調整，内面はナデ調整が施され，頸部と肩部の境にはヘラ状工具による綾杉文風の刻目が残存する。

甕には，口縁部が外反するA類（140～142）と口径と胴径がほぼ同じ値を示すB類（143）がある。外面には叩きの後にハケ調整，内面には上胴部から口縁部にハケ調整が比較的よく残り，それ以下には指ナデを中心としたナデ調整が施される。144～147は胴部以下の破片である。底部が平らなものからやや尖るものまでみられる。147の底部は指頭圧痕で尖らせている。調整はほぼ同じである。

甑は148の1点のみで，底部はやや丸みがあり，胴部は内湾気味に上がる。外面にはハケ調整，内面にはナデ調整が施される。底部の円孔は1個である。

鉢には，底部の比較的深いA－Ⅱ類（149），底部がボタン状の突起となるB類（150），小形鉢のC－Ⅰ類に属す151，C－Ⅱ類に属す152，C－Ⅲ類に属す153・154がある。149の底部外面にはヘラ削りが施されている。器面は内外面ともハケ調整が主で，それにナデ調整を加えるもの（149・152など）が多々見受けられる。また，152の外面には叩きの後にハケ調整を加えている。

高杯は155の1点である。杯部口縁の破片で，外面にはハケ調整，内面にはヨコナデ調整が施される。

石製品（Fig.111－156・157）

2点とも砥石である。156は粗粒砂岩の河原石で，一面に使用痕が残る。157は小形品で，携帯用の可能性もある。断面五角形を呈し，各面が比較的よく使用されている。

ST−203 (Fig.112・113)

調査区中央部で検出したベット状遺構を有する竪穴住居跡であり，ベットの成形状況から2時期の変遷が考えられる。ST−202の西側約5mに位置する。平面形は不整隅丸方形で，南北約5.20m，東西約4.00mを測り，長軸方向はN−3°−Eと東にやや振っている。残存する壁高は約63cmと深く，床面の標高は94.550m前後である。付属遺構として，階段状をなすベット状遺構と10個ピットを検出した。ベット状遺構はまず，北壁を中心に地山を三日月形に削り出す。この段階でP−1（径60〜75cm，深さ34cm）が掘削されており，一時期を設定することができる。P−1の底面から166の小形

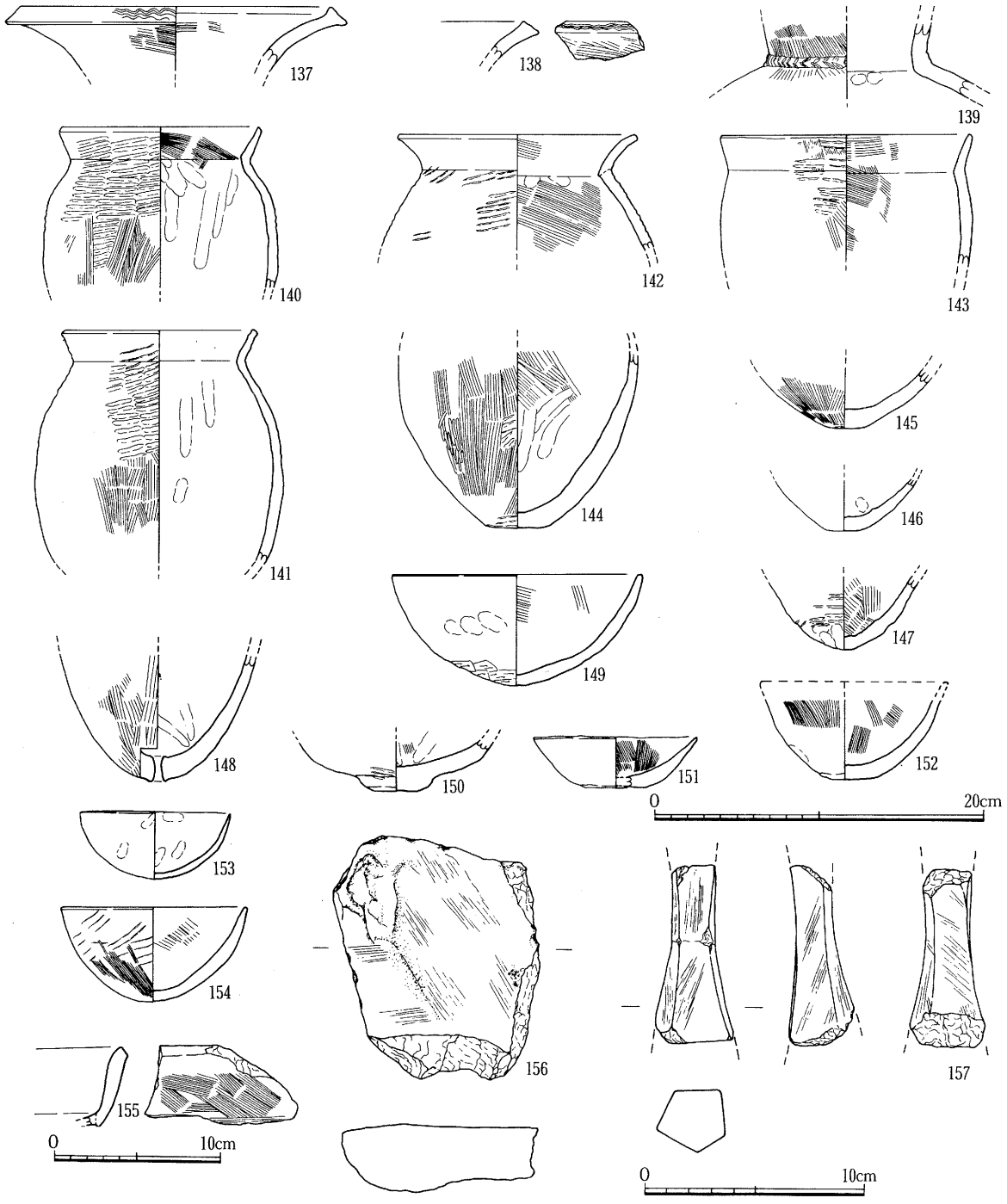


Fig. 111 ＳＴ−202 出土遺物実測図

の鉢が出土している。この段階の主柱穴はP－2～4ではないかと考えられる。3本柱で棟を支えていたのではなかろうか。P－2は径50～57cmの円形で，深さは18cm，P－3は径30cmの円形で，深さは13cm，P－4は径30cmの円形で，深さは10cmであり，全般に深さが浅い。柱間はP－2～3間が3.10m，P－3～4間が2.40m，P－4～1間が2.20mである。次の段階にベット状遺構を増設している。すなわち，西壁に沿って三日月形に一段高いベットを盛土によって成形し，北壁のベットの上にもさらに一段高い三日月形のベットを盛土で増設しており，南壁からみるとベットが時計周りに階段状をなしている。丁度，北側のベットの床面から178の土製勾玉が出土した。また，この床面には炭化物の堆積が認められた。この段階の主柱穴が新たに検出されていないことから前のものを利用していたものと考えられる。埋土はST－202に似ており，中位から焼土（第Ⅲ層）を検出した。なお，埋土は8層に分層され，第Ⅰ層は黒褐色粘質土，第Ⅱ層は暗褐色粘質土，第Ⅲ層は

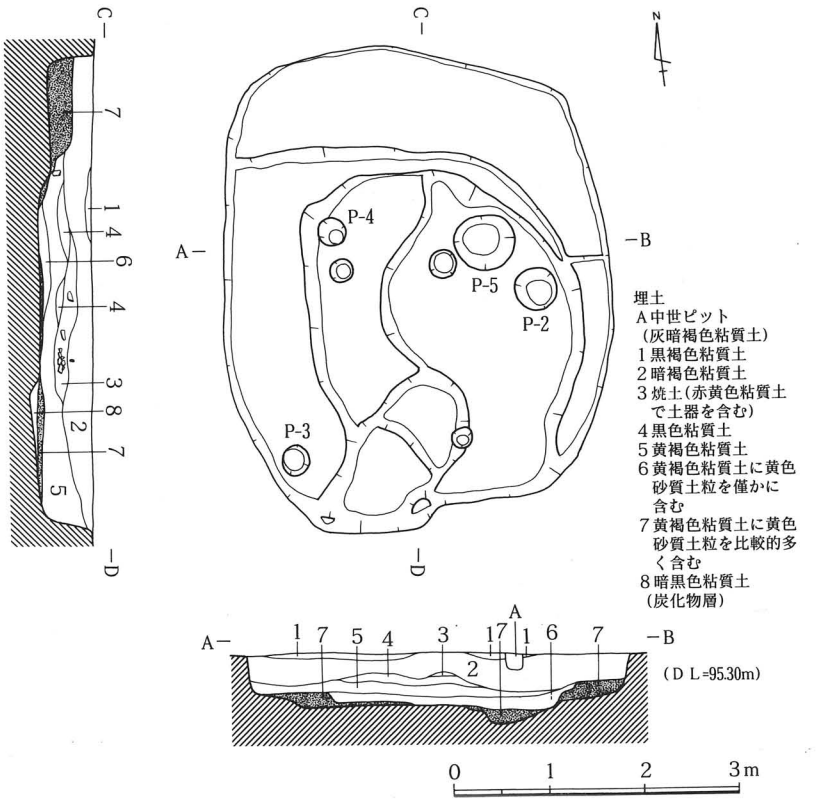


Fig. 112 ＳＴ－203 ベット状遺構検出状態

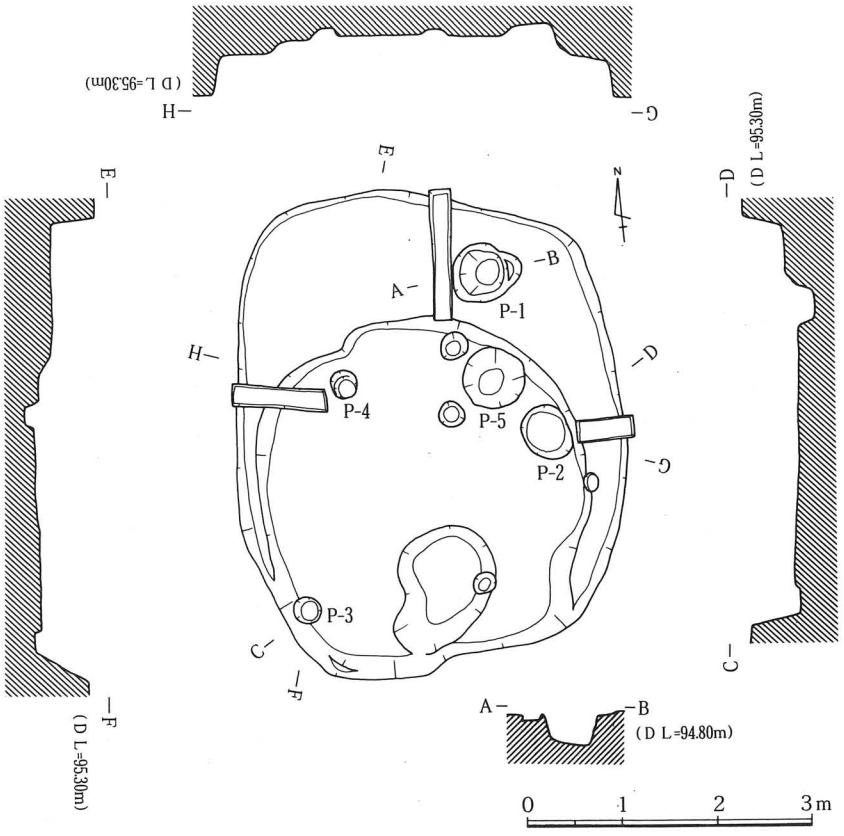


Fig. 113 ＳＴ－203 完掘状態

赤黄色粘質土，第Ⅳ層は黒色粘質土，第Ⅴ～Ⅶ層は黄褐色粘質土を主し，黄色砂質土粒の包含量によって分かれ，第Ⅷ層は炭化物を含む暗黒色粘質土であった。遺物は24点が復元できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.114－158～177）

器種には壷，甕，甑，鉢，小形粗製品などがある。

壷は158の1点のみである。口縁部が大きく開くA類に該当する。口縁端部は上下に拡張され，波状文が上下二列の竹管文の間に施される。口縁部にはハケ調整が施される。

甕は159～161で，くの字形をなす口縁部を有するもので，すべてA類に該当する。底部の残る161はA－Ⅱ類に属す。調整はほぼ同じで，外面には叩きの後にハケ調整，内面はハケ調整の後にナデ調整となる。161の外面は叩きのみで，ハケ調整は施されていない。

甑は162の1点のみで，尖り底の底部中央部に1個の円孔が穿たれる。器面は内外面ともハケ調整の後ナデ調整を加えている。

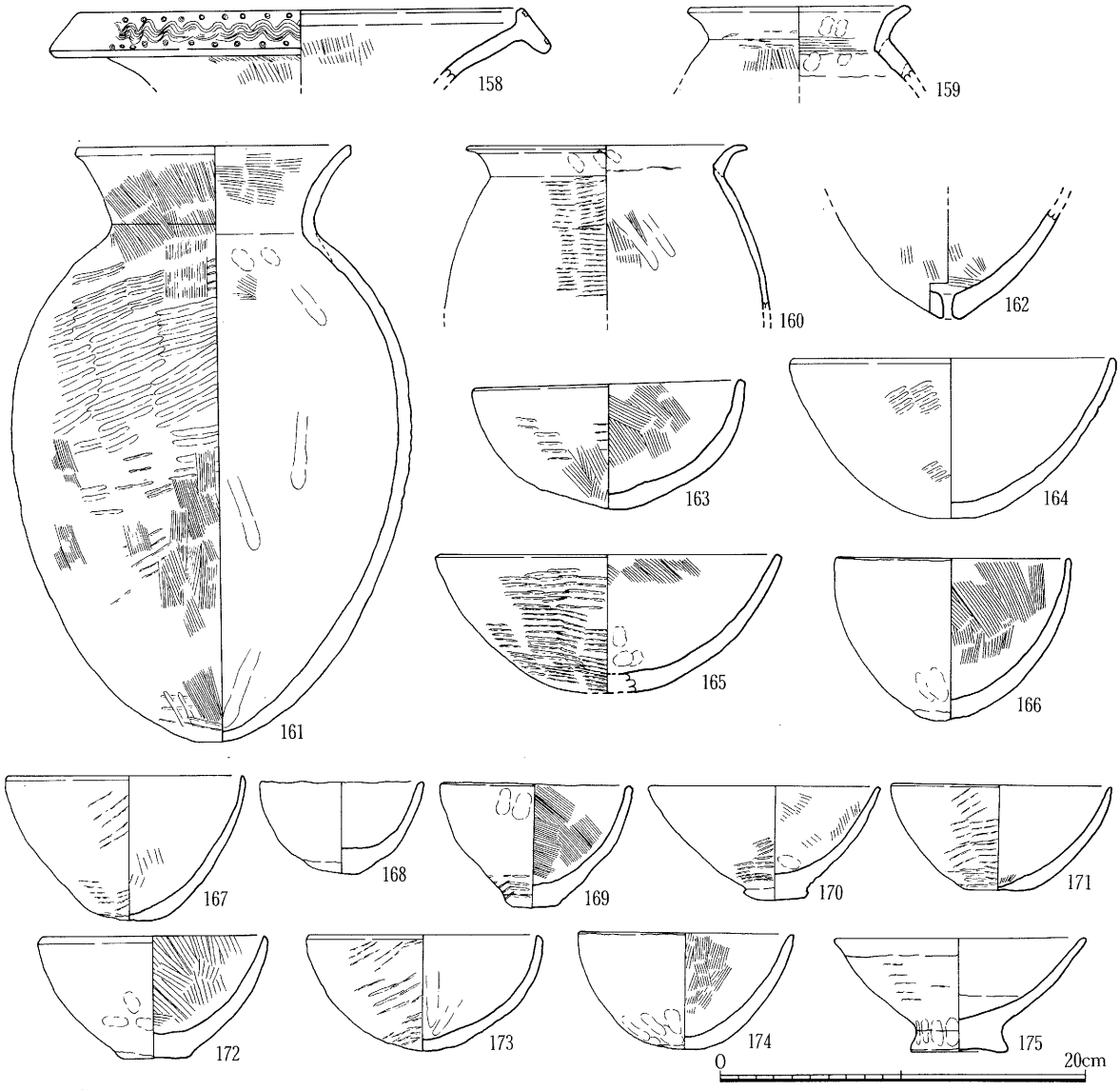


Fig. 114　ＳＴ－203 出土遺物実測図1

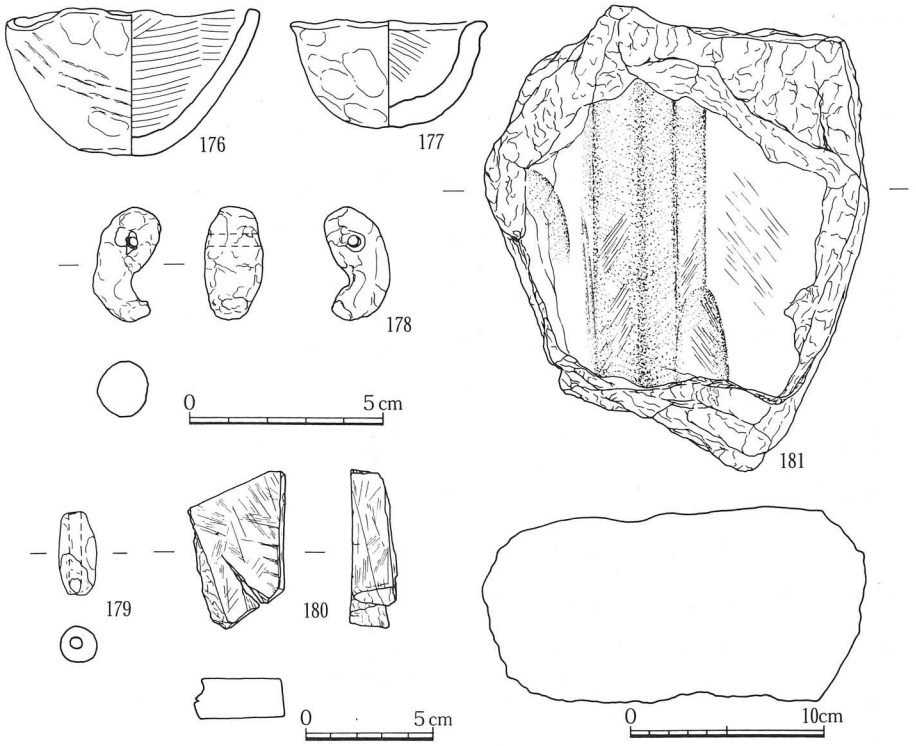


Fig. 115 ＳＴ－203 出土遺物実測図2

鉢は163～175である。163～165は比較的深い底部を有する大形の鉢で，A－Ⅲ類に属す。底部はほぼ丸底で，体部から口縁部にかけては内湾気味に上がる。外面は叩きを施し，その上にハケ調整を加えるもの（163）もある。内面はハケ調整の後ナデ調整を加えている。164はナデ調整のみである。166・167は器高指数が60以上の非常に底部の深い鉢で，A－Ⅴ類に該当する。調整はほぼ同じである。168～170は底部がボタン状の突起となっているもので，B類に属す。ST－201のそれが大形であるのに対し小形である。168は器面はナデ調整である。166はP－1から出土している。169・170は外面下端に叩目が残り，内面はハケ調整の後ナデ調整を加えている。171・172は口径12cm前後の底部の平らな小形の鉢である。171は外面が叩目，内面はハケ調整の後丁寧なナデ調整を加えている。172は外面がナデ調整，内面には太めのハケ調整を施す。173・174は丸みのある底部を有するもので，C－Ⅱ類に属す。173の外面には叩目が残り，内面はナデ調整である。174の外面はナデ調整，内面はハケ調整の後にナデ調整を加える。175は今回唯一の台付き鉢（D類）である。高台は高さ約1.3cmで切り高台風な作りとなっている。高台の外面接合部分には指頭圧痕，体部外面には叩目が残り，内面はナデ調整，口縁部はヨコナデ調整が施される。

小形粗製土器は176と177である。176は外面に叩き，内面にハケ調整が施され，外面を中心に指頭圧痕が残る。177は内面の一部にハケ目が残る以外ナデ調整で，外面を中心に指頭圧痕が残る。

土製品（Fig.115－178・179）

178は土製勾玉である。前述のとおり北側ベットの床面から出土した。先端がやや欠損するが，長さ3.0cm，全幅1.6cm，全厚1.3cm，紐孔2.5㎜である。179は管状の土錘で，先端が欠損する。残存長3.3cm，全幅1.5cm，重さ0.75g，孔径0.5cmである。

石製品（Fig.115－180）

2点とも砥石である。180は柱状の砥石で，2面に使用痕が残る。石材は泥岩ではないかとみられる。181は河原石を使用した砥石で，1面に使用痕が溝状に3条残る，石材は粗粒砂岩である。

ST－204（Fig.116）

調査区南部やや西よりで検出した竪穴状遺構である。ST－201の西側約11mに位置する。平面形は不整方形で，南北4.70m，東西3.70mを測り，長軸方向はほぼ真北を向いている。中世のピットを中心とする多数遺構に掘り込まれており，遺存状況は決してよくはない。残存する壁高は約44cmで，床面の標高は94.890m前後である。付属遺構として，壁溝と中央ピット及び3個のピットを検出した。検出した3個のピットの内，P－2とP－3は位値関係から主柱穴と考えられるが，西側の床面からは対応する柱穴が検出されておらず明確ではない。P－2は径43cmの円形で，深さは18cm，P－3は径30cmの円形で，深さは11cmである。柱間は約2.20mである。P－1は中央ピットとみられ，南北に細長く南側に1段高い平場を有す。長辺1.17m，短辺0.50m，深さは13cmである。壁溝は北壁際で，長さ1.50mを検出した。幅22cm，深さ4cmである。埋土は2層に分層されるが，主に暗褐色粘質土が堆積しており，P－1の部分で黒色粘質土の堆積が認められた。また，P－1周辺で焼土と炭化物の堆積が認められた。出土遺物は少なく，復元できたのは4点であった。

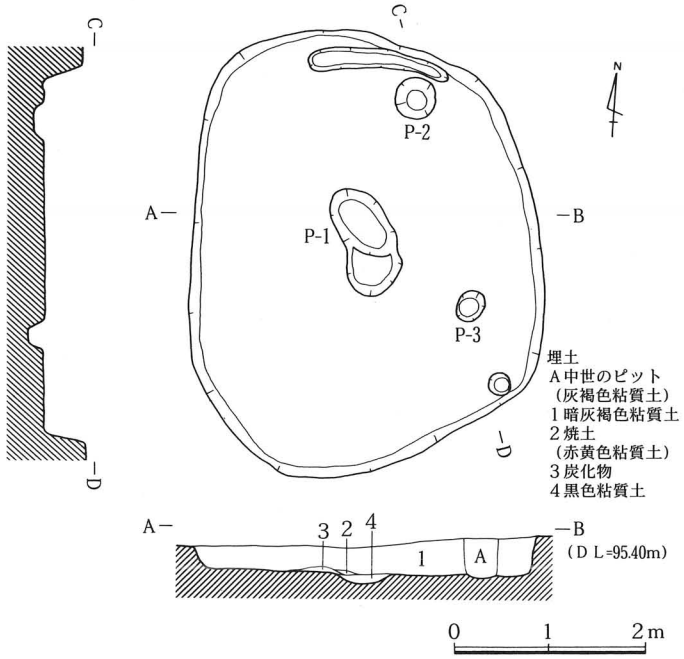


Fig. 116　ＳＴ－204

出土遺物

弥生土器（Fig.117－182～184）

182は甕である。口径と胴径がほぼ同じ大きさをなすもので，B類に属す。外面には胴部に叩目，口縁部にハケ目が残り，内面にもハケ目が残る。口唇部付近はヨコナデ調整が施される。183は小形の鉢で，底部は平らであり，C－Ⅰ類に属す。外面には叩目，内面にはハケ目が残る。184は手づくね土器である。外面は叩きの後にナデ調整，内面はハケ調整の後にナデ調整を施す。

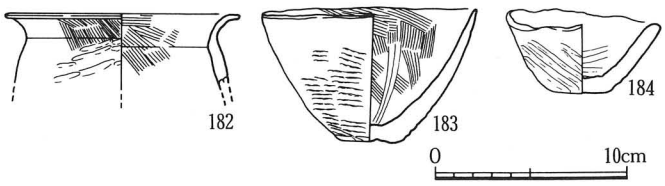


Fig. 117　ＳＴ－204 出土遺物実測図

B 土坑

SK－201

調査区中央部東よりで検出した舟形土坑である。ST－202の南約2mに位置す。長辺1.5m，短辺38cm，深さは10cmである。長軸方向はN－11°－Wである。埋土は黒褐色粘質土であった。遺物は

2点が復元できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.118－185・186）

185は小形の鉢で，口縁部が体部から外傾するもの（E類）である。この形態は今回これが唯一である。内外面にハケ調整を施した上に，体部内外面にはナデ調整を加える。186は高杯で，杯部が残存する。内湾気味に上がる体部から口縁部は小さく外反する。体部外面にはヘラ磨き，内面にはナデ調整，口縁部にはヨコナデ調整を施す。

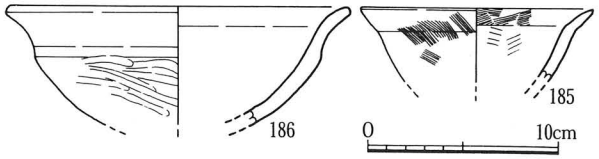


Fig. 118 ＳＫ－201 出土遺物実測図

Ｃピット

今回，明らかに弥生時代のピットとして確認できたのはP－201の1個であった。集落の規模からすると他にも存在するものと考えられる。

P－201（Fig.119）

調査区北西部で検出したピットであり，壷2点，甕6点，鉢1点を埋納した状態で出土した。規模は径62cmの円形で，深さは27cmである。埋土は暗褐色粘質土であった。遺物は前述のとおり8点が復元できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.120－187～195）

壷は2点（187・188）あり，2点とも外傾する頸部から口縁部が大きく開くタイプで，A類に属す。187の底部は平らで，胴部はほぼ球形をなす。胴部から口縁部外面にはハケ調整の後にヘラ磨きを施し，内面はハケ調整の後にナデ調整を加えている。188は頸部と肩部が残存し，内外面にはハケ調整が施される。甕は189～194で，形態的には口縁部がくの字をなすA類に属す。底部は平底のものとやや丸みのあるものがみられるが，丸底にはなっていない。外面は叩きの後にハケ調整を加え，内面はハケ調整の後に胴部下半を中心にナデ調整を加えている。194の外面のハケ調整は，上胴部に単位の粗い工具，中胴部以下に細かい単位の工具を使用している。195は丸みのある底部を有する小形の鉢で，C－Ⅱ類に属す。外面には叩きの後に体部から口縁部にかけてナデ調整を加え，内面はハケ調整の後にナデ調整を加えている。

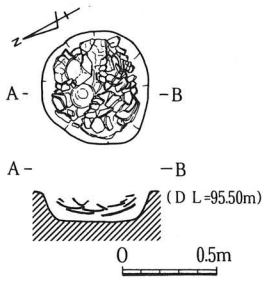


Fig. 119 Ｐ－201 遺物出土状態

Ｄ性格不明遺構

SX－201

調査区東部で検出した不整形の落ち込み状の遺構である。長辺約6.00m，短辺4.00m，深さは18cmで擂鉢状をなす。長軸方向はN－60°－Wである。埋土は黒褐色粘質土であった。遺物は6点が復元できた。

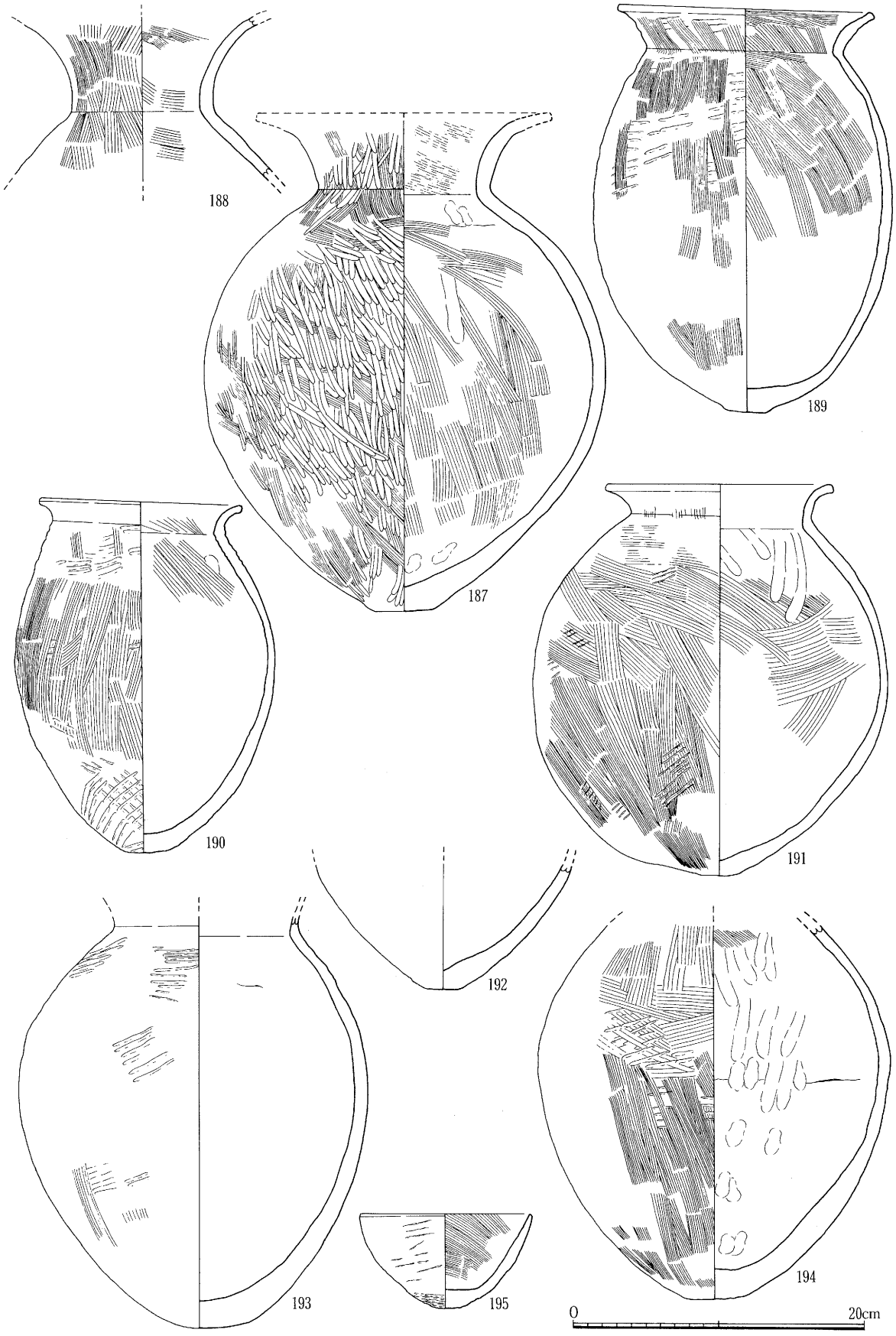


Fig. 120　P－201 出土遺物実測図

出土遺物

弥生土器（Fig.121－196～200）

196は壷で，口縁部が大きく開くものでA類に属す。口縁端部を上方に拡張している。197・198は甕で口縁部がくの字形をなすものでA類に属す。外面には叩きの後に下胴部を中心にハケ調整を施し，内面はハケ調整の後中胴部以下にナデ調整を施す。199は小形の鉢で丸みのある底部を呈し，C－Ⅱ類に属す。外面には叩目が残り，内面はナデ調整を施す。200は手づくね土器である。器面には指頭圧痕が残る。

石製品（Fig.121－201）

砥石で，両端が欠損する。断面四角形で各面を使用している。石材は細粒砂岩である。

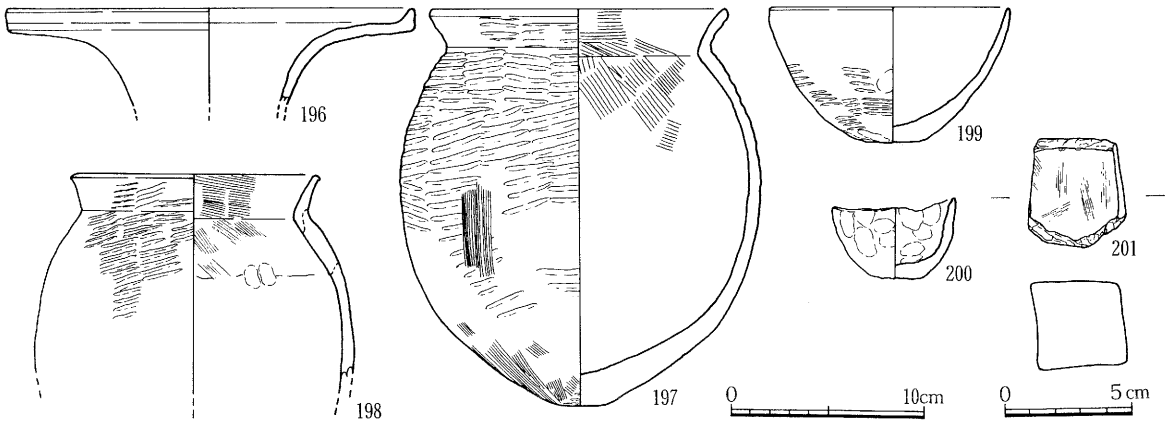


Fig. 121 ＳＸ－201 出土遺物実測図

②中世

A 掘立柱建物跡

SB－201

調査区南西部で検出した梁間2間（4.00m），桁行3間（5.40m）の身舎に3面庇付きの東西4間（7.30m），南北4間（7.20m）の南北棟建物で，身舎北から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－202・203と重なっている。棟方向はN－13.5°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.00m等間隔，桁行（南北）が1.80m等間隔で，西庇幅は1.50m，北庇と南庇幅は1.80mとなっている。柱穴は径40～50cmの円形で，柱径は25cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は6点が復元できた。

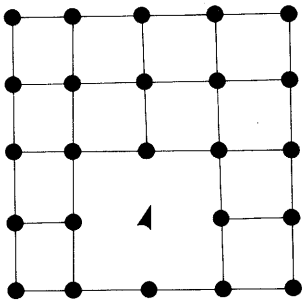


Fig. 122 ＳＢ－201

出土遺物

土師質土器（Fig.144－202～205）

202・203は杯で，口縁部は平らな底部から斜め上方に上がり，端部は細く仕上げられる。底部外面は回転糸切り底で，内外面とも丁寧なナデ調整が施される。203・204は小皿で，口縁部は斜め上方に短く上がる。205の口縁部は比較的長い。底部外面は回転糸切り底で，口縁部内外面は回転ナデ調整である。

備前（Fig.144－206・207）

206は底部の破片である。内面には5本単位の条線が施される。207は口縁部の破片で，口縁部は

体部から外上方に上がり，端部は内傾する平面をなす。内面には5本単位の条線が施されている。

SB－202

調査区南西部で検出した梁間2間（3.50m），桁行4間（6.90m）の東西棟建物で，西と東から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－201・203と重なっている。棟方向はN－87°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.50mと2.00m，桁行（東西）が1.50～2.00mである。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は1点が復元できた。

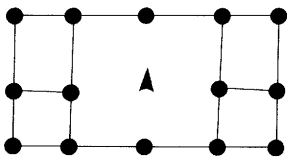


Fig. 123　S B－202

出土遺物

東播系須恵器（Fig.144－208）

こね鉢で，口縁部が残存する。口縁部は外上方に上がり，端部は丸く仕上げられる。口縁部から外面にかけては回転ナデ調整が施され，内面はよく使用されており，表面は摩滅する。

SB－203

調査区南西部で検出した梁間2間（3.20m），桁行3間（5.10m）の南北棟建物で，SB－201の身舎東側柱の柱穴3個と重なっている。SB－201・202と重なっている。棟方向はN－14°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.40mと1.80m，桁行（南北）が1.50mと1.80mである。柱穴は径約40cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

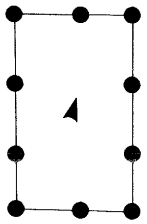


Fig. 124　S B－203

SB－204

調査区南西端部で検出した梁間2間（3.90～4.10m），桁行3間（5.80～5.90m）とやや歪みのある南北棟建物でる。SB－201の西側に位置し，SB－205と重なる。棟方向はN－1°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.80～2.10m，桁行（南北）が1.80～2.20mである。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

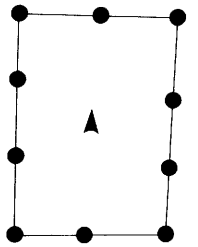


Fig. 125　S B－204

SB－205

調査区南西端部で検出した梁間1間（1.65m），桁行2間（4.20m）の東西棟建物である。SB－201の西側に位置し，SB－204と重なっている。棟方向はN－89°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.65m，桁行（東西）が1.80mと2.40mである。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

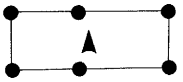


Fig. 126　S B－205

SB－206

調査区南西部で検出した梁間1間（2.00m），桁行2間（4.40m）の東西棟建物である。SB－201の北側に位置し，SB－208と重なっている。棟方向はN－72°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が2.00m，桁行（東西）が1.90mと2.50mである。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

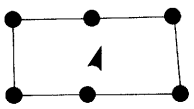


Fig. 127　S B－206

SB－207

調査区南部で検出した梁間2間（3.60m），桁行3間（5.80～5.95m）とやや歪みのある東西棟建物である。SB－201の東側で重なっている。棟方向はN－84°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.80m等間隔，桁行（東西）が1.80～2.35mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

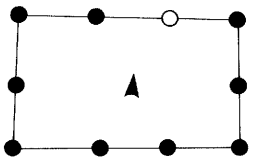


Fig. 128　S B－207

SB－208

調査区南部で検出した梁間2間（3.80m），桁行3間（6.30m）の東西棟建物である。SB－201の東側で重なっている。棟方向はN－86°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.80mと2.00m，桁行（東西）が1.80mと2.70mである。柱穴は径40～60cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

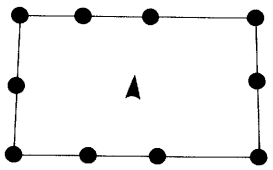


Fig. 129　S B－208

SB－209

調査区南部で検出した梁間2間（4.10m），桁行4間（8.15～8.30m）とやや歪みのある南北棟建物でる。SB－201の東側に位置し，SB－207・208と重なる。棟方向はN－2°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.80mと2.30m，桁行（南北）が1.65～2.50mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.144－209）

小皿である。口縁部は斜め上方に短く上がり，端部を丸く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部は回転ナデ調整で内底面は後でナデ調整を施している。

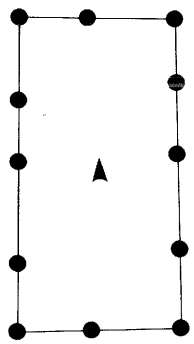


Fig. 130　S B－209

SB－210

調査区南部で検出した梁間2間（3.30m），桁行3間（5.35～5.45m）とやや歪みのある南北棟建物である。SB－201の東側に位置し，SB－211と重なる。棟方向はN－5°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.40～1.90m，桁行（南北）が1.65～1.90mである。柱穴は径20～45cmの円形で，柱径は10～20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

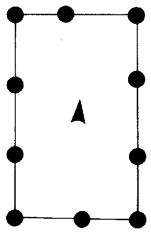


Fig. 131　S B－210

SB－211

調査区南部で検出した梁間2間（3.70m），桁行2間（4.45m）の身舎に東庇が付く東西3間（4.30m），南北2間（4.45m）の南北棟建物である。SB－201の東側に位置し，SB－210と重なる。棟方向はN－6°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.80mと1.90m，桁行（南北）が2.20mと2.25m，東庇幅は0.60mである。柱穴は径30～35cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

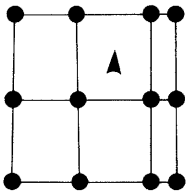


Fig. 132　S B－211

SB－212

調査区中央部西よりで検出した梁間2間（3.50～3.75m），桁行2間（4.40～4.50m）とやや歪みのある東西棟建物である。SB－201の北側に位置し，SB－213と重なっている。棟方向はN－83°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.50～2.15m，桁行（東西）が2.00～2.40mである。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

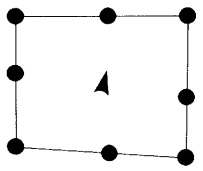


Fig. 133　S B－212

SB－213

調査区中央部西よりで検出した梁間1間（2.40m），桁行2間（3.60m）の南北棟建物でSB－212の柱穴と重複している。SB－201の北側に位置し，SB－212と重なる。棟方向はN－2°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.40m，桁行（南北）が1.60mと2.00mである。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

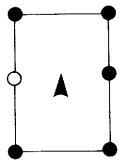


Fig. 134　S B－213

SB－214

調査区中央部で検出した梁間1間（2.10m），桁行2間（4.50m）の東西棟建物で南側柱の柱穴1個が未検出である。SB－212の東側に位置する。棟方向はN－87°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が2.10m，桁行（東西）が2.10mと2.40mである。柱穴は径40～60cmの円形で，柱径は15～25cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

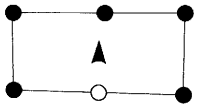


Fig. 135　S B－214

SB－215

調査区南端部で検出した梁間2間（3.30m），桁行3間（5.90m）の東西棟建物で東から1間目の柱通りに間仕切り柱が立ち，南西隅の柱穴は未検出である。SB－211の東側に位置する。棟方向はN－85°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.65m等間隔，桁行（東西）が西から1.90m，1.80m，2.20mである。柱穴は径30～35cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

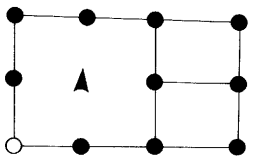


Fig. 136　S B－215

SB－216

調査区中央部南よりで検出した梁間2間（3.10m），桁行3間（6.10m）の身舎に3面庇付きの南北4間（6.30m），東西4間（7.30m）の東西棟建物で身舎の東から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－209の東側に位置する。棟方向はN－86°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.50mと1.60m，桁行（東西）が西から1.80mと2.50mで，北庇と南庇幅が1.60m，東庇幅が1.20mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は3点が復元できた。

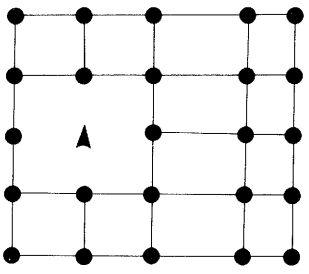


Fig. 137　S B－216

出土遺物

土師質土器（Fig.144－210）

杯で，底部は平らで，体部は斜め上方に上がり，口縁部でやや外傾する。底部外面は回転糸切り底で板状圧痕が残り，口縁部から内面にかけては回転ナデ調整で，内底面は後でナデ調整を加えている。体部外面は未調整とみられる。

青磁（Fig.144－211）

碗で，底部が欠損する。口縁部外面には鎬蓮弁文が施される。器面にはオリーブ灰色の釉を施釉する。

石製品（Fig.144－212）

叩石で，片面中央部と側面に弱い敲打痕が残る。石材は粗粒砂岩で，混入したものとみられる。

SB－217

調査区中央部南東よりで検出した梁間2間（3.60m），桁行3間（4.00m）とみられる南北棟建物で東西側柱の3個が未検出である。SB－216の東側に位置する。棟方向はほぼ真北を向く。柱間寸法は梁間（東西）が1.80m等間隔，桁行（南北）が1.20～1.40mではないかと考えられる。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は1点が復元できた。

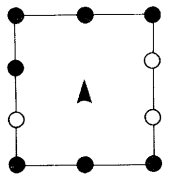


Fig. 138 ＳＢ－217

出土遺物

青磁（Fig.144－213）

碗の底部で，高台は削り出し高台で，畳付けから内面にかけて青緑色釉を施釉する。

SB－218

調査区中央部で検出した梁間1間（1.60m），桁行2間（3.70m）の東西棟建物で南北側柱の柱穴2個が未検出である。SB－217の北側に位置する。棟方向はN－84°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.60m，桁行（東西）が1.80mと1.90mではないかとみられる。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

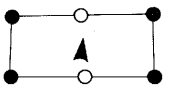


Fig. 139 ＳＢ－218

SB－219

調査区中央部で検出した梁間2間（3.80m），桁行3間（6.90m）の南北棟建物で南から1間の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－216の北側に位置する。棟方向はN－1°－E。柱間寸法は梁間（東西）が1.90m等間隔，桁行（南北）が北から2.00m，2.00m，2.90mとなっている。柱穴は径約40cmの円形で，柱径は約20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。遺物は1点が復元できた。

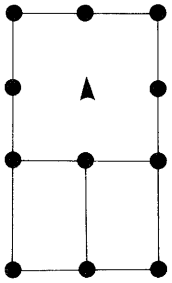


Fig. 140 ＳＢ－219

出土遺物

土師質土器（Fig.144－214）

小皿である。口縁部は斜め外上方に短く上がり，端部を丸く仕上げる。底部外面は回転糸切り底であり，口縁部は回転ナデ調整で，内底面は後でナデ調整を加えている。

SB－220

調査区中央部で検出した梁間2間（3.90m），桁行4間（8.00m）の身舎に東庇が付く南北2間(3.90m)，東西5間（8.90m）の東西棟建物で，西から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。また，南西隅の柱穴1個と北側柱の柱穴1個が未検出である。SB－219の北側に位置す。棟方向はほぼ真東を向く。柱間寸法は梁間（南北）が1.80mと2.10m，桁行（東西）が1.90～2.10mで，東庇幅は0.90mである。柱穴は径20～40cmの円形で，柱径は10～20cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できた遺物はなかった。

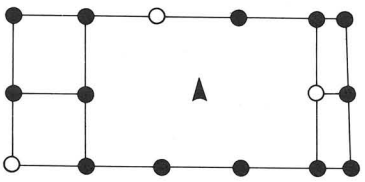


Fig. 141　S B－220

B 塀跡及び柵列

SA－201

調査区南西端部で検出した南北塀（N－18°－E）である。SB－201の西隣に位置する。3間分（7.80m）を検出し，柱間は1.90～3.00mである。柱穴は径約25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は暗黒色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

SA－202

調査区南西端部で検出した南北塀（N－19°－E）である。SB－201の西隣に位置する。2間分（4.40m）を検出し，柱間は2.10mと2.30mである。柱穴は径約25cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

SA－203

調査区南西部で検出したL字形の塀である。SB－209の西隣に位置する。6間分（13.10m）を検出し，柱間は1.60～2.70mである。柱穴は径30～45cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

SA－204

調査区南西部で検出した南北塀（N－1°－E）である。SB－213の東隣に位置する。3間分（5.70m）を検出し，柱間は1.80mと2.10mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

SA－205

調査区中央部北よりで検出したL字形の塀である。SB－220の北側に位置する。6間分（16.00m）を検出し，柱間は2.10～3.20mである。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は約10cmとみられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。復元できる遺物はなかった。

C 土坑

SK－201（Fig.142）

調査区南部で検出した方形土坑で，SB–216の南側に位置する。長辺1.73m，短辺0.77m，深さは28cmである。長軸方向はN–2°–Wで，ほぼ真北を向く。埋土は暗褐色粘質土であった。遺物は1点が復元できた。

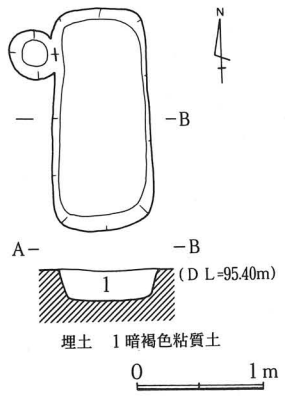


Fig. 142　S K－201

出土遺物

土師質土器（Fig.144－215）

小皿で，口縁部は平らな底部から上外方に上がり，端部は丸く仕上げる。器面は摩耗が著しく調整不明である。

SK－202

調査区南端部で検出した隅丸方形土坑とみられるもので南半分が未調査である。SB－210の南隣に位置する。長辺3.15m，短辺0.60m以上，深さは22cmであり，底面は東側に1段高い平場を有す。長軸方向はほぼ真東を向く。埋土は暗灰褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

SK－203

調査区西部で検出した楕円形土坑で，SB－201の北西側に位置する。長径1.68m，短径1.05m，深さは15cmであり，北側は1段低い円形の底面となっている。長軸方向はN－50°－Eである。埋土は暗褐色粘質土であった。復元できた遺物はない。

SK－204

調査区西部で検出した不整形土坑で，SK－203の北側に位置する。長径2.16m，短径0.88m，深さは19cmである。長軸方向はN－23°－Eである。埋土は暗褐色粘質土であった。復元できた遺物はない。

SK－205（Fig.142）

調査区北西部で検出した円形土坑である。径1.10mで，深さは38cmであり，壁は平らな底面からほぼ垂直に上がる。埋土は暗褐色粘質土に黄色ないし褐色粘質土のブロックを含むものであった。復元できた遺物はない。

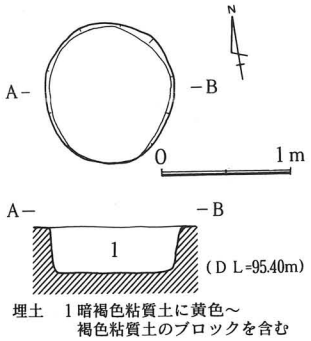


Fig. 143　ＳＫ－205

SK－206

調査区北部で検出した方形土坑で，SA－205の北側に位置する。長径1.18m，短径0.83m，深さは6cmである。長軸方向はN－88°－Wである。埋土は暗褐色粘質土であった。復元できた遺物はない。

SK－207

調査区北部で検出した不整形土坑で，SA－205の北側に位置する。長径1.43m，短径1.03m，深さは7cmである。長軸方向はN－74°－Eである。埋土は暗褐色粘質土であった。復元できた遺物はない。

D 溝跡

SD－201（Fig.145）

調査区東部で検出した南北溝で，SD－202の東側に位置する。溝はさらに南北に延び，主軸方向はN－5°－Eである。幅1.70～2.20cm，深さ15～30cmで中央部が最も浅く南北に向って傾斜しており，約26.5mを検出した。断面は台形状を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土であった。遺物は5点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.146－216～219）

216と217は杯で，双方とも口縁部は平らな底部から内湾気味に上がる。底部外面は回転糸切り底

で，216には板状圧痕が残る。口縁部から内面にかけては回転ナデ調整で，内底面には後でナデ調整を加える。218・219は小皿である。2点とも口縁部は斜め上方に短く上がる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部には回転ナデ調整を施す。

青磁（Fig.146－220）

碗で口縁部が残存する。口縁部外面には鎬蓮弁文が施される。器面にはオリーブ灰色釉を施釉する。

SD－202（Fig.145）

調査区東部で検出した南北溝で，SD－201の西側に位置する。溝はさらに南北に延び，ほぼ真北を向く。幅1.65～1.75cm，深さ22～51cmで中央部が最も浅く南北に向って傾斜しており，約28.5mを検出した。断面は台形状ないし舟底状を呈す。埋土は場所によって2～5層の堆積が認められるが，基本的には4層に分層される。第Ⅰ層は灰褐色粘質土，第Ⅱ層は灰黄褐色粘質土，第Ⅲ層は暗灰色

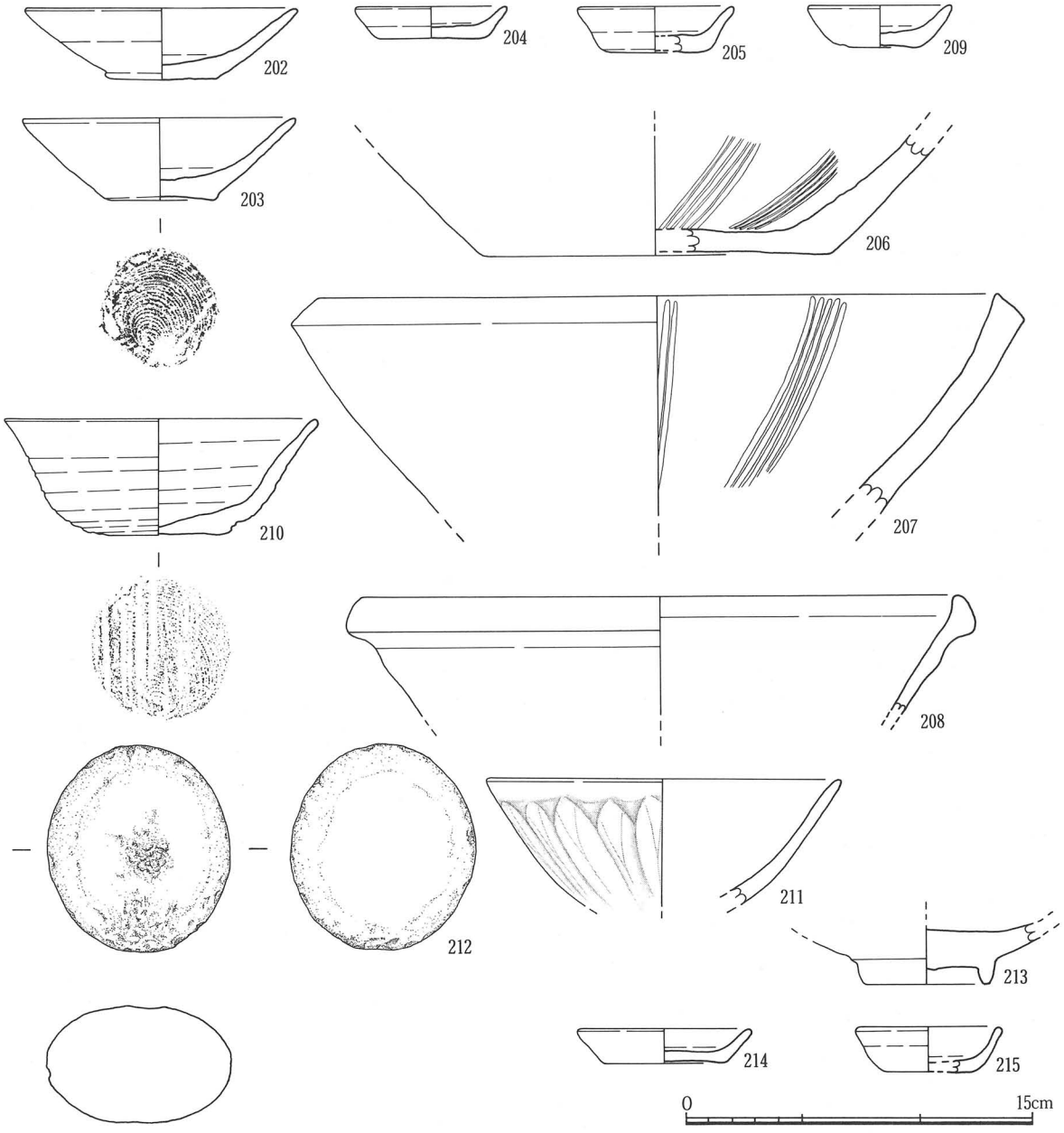


Fig. 144　掘立建物跡，塀跡，土坑出土遺物実測図

粘質土，第Ⅳ層は暗灰色粘質土に黄褐色砂質土を多く含むものであった。遺物は11点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.146－221～222）

2点とも杯で，221の器壁は厚い。双方とも口縁部は平らな底部から内湾気味に上がる。底部外面は回転糸切り底である。

備前（Fig.146－223～227）

223は擂鉢で，口縁部は外上方に内湾気味に上がり，端部は内傾する平面をなし，上端をやや拡張している。器面は回転ナデ調整で，内面には9本単位の条線が施される。224は壷で口縁部の一部が残存する。胴部は内湾気味に上がり，頸部は短く直立し，口縁部で外傾して外側を肥厚させた玉縁口縁をなす。口縁部は回転ナデ調整で，胴部外面にはハケ目が残る。225は甕の底部である。内面には自然釉がかかる。226・227は大甕で，それぞれ口縁部の一部が残る。口縁部は肩部から短く外反し，玉縁口縁をなす。口縁部には回転ナデ調整が施される。

常滑（Fig.146－228～230）

228は大甕で，破片がP－213からも出土している。口縁部は肩部から内傾して上がった後大きく屈曲し，所謂N字口縁をなす。口縁部内外面には回転ナデ調整が施される。229は大甕の底部で，底径21.6cmを測る。230は胴部の破片で，外面には叩目が残る。

土製品（Fig.146－231）

紡錘形の土錘で，先端が欠損する。幅1.4cm，重さ0.73g，孔径0.4cmである。

SD－203

調査区西部で検出した南北溝である。幅約30cm，深さは5cm前後で，約10.0mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は暗褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

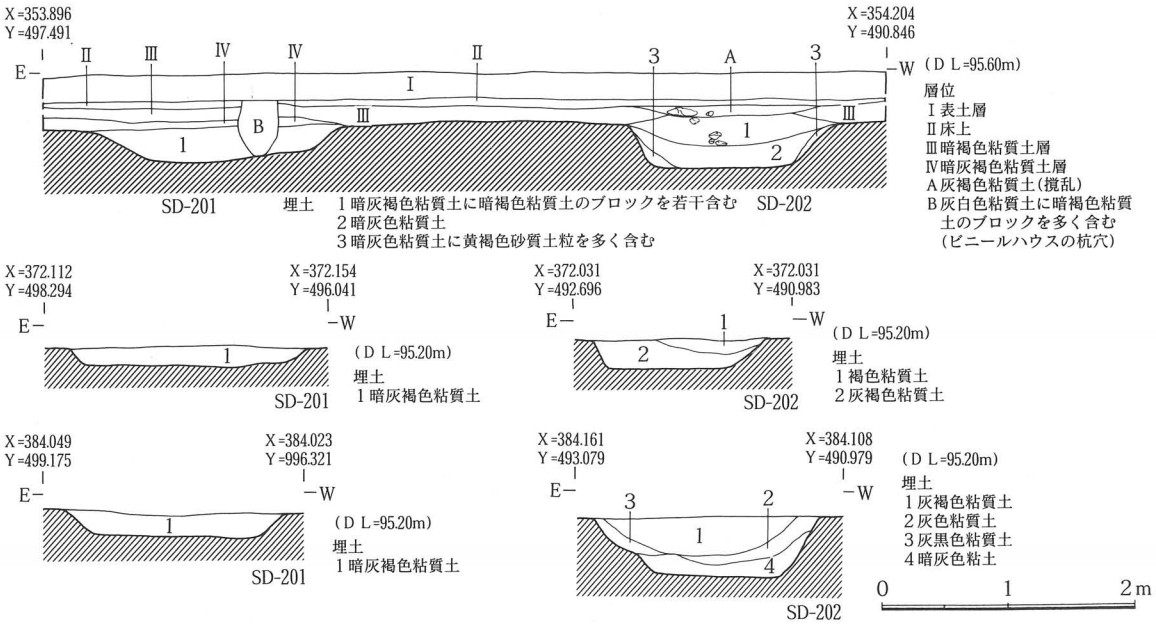


Fig. 145 ＳＤ－201・202 セクション図

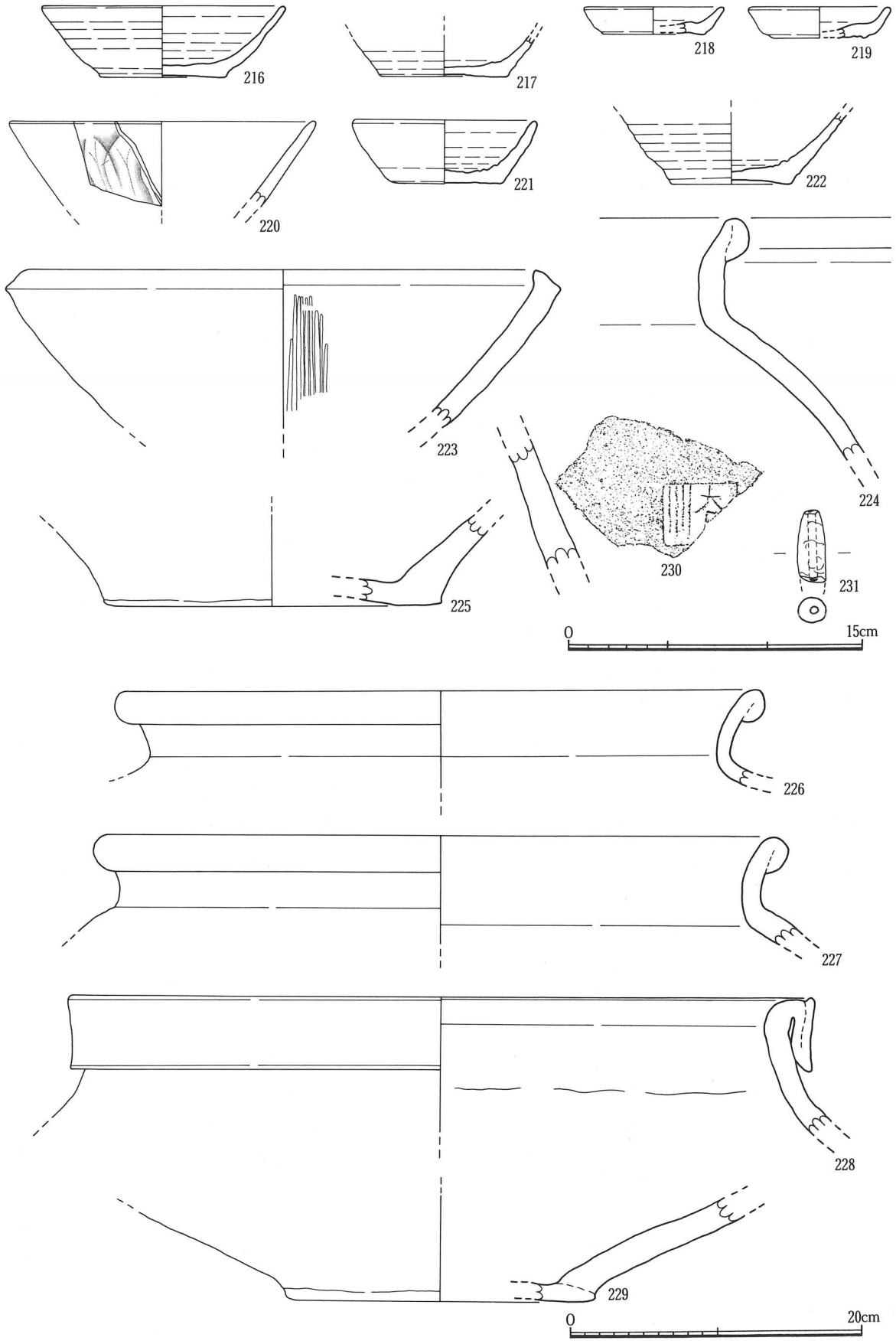


Fig. 146 ＳＤ－201・202 出土遺物実測図

SD−204

調査区北部で検出した南北溝である。幅30～40cm，深さは10cm前後で，約5.0mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は黒褐色粘質土に黄褐色砂質土粒を含むものであった。出土遺物はなかった。

E ピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられる。掘方は，大半が円形で径20～40cm，深さは10～50cmで，径30～40cm，深さ40cm前後のものが多い。埋土は暗褐色粘質土と灰褐色粘質土のものがみれら，前者の方が多い。また，岩井口遺跡で見られたような径70cm前後のピットはSB−201の北側に比較的まとまってみられる程度で，全体的には少ない。このようなやや大きなピットの埋土は先の埋土を主に黄褐色砂質土粒や褐色粘質土粒を含んでいる場合が多い。

出土遺物

土師質土器（Fig.147−232～239）

232～236は杯で，232と233は器高指数が30前後と底部の浅い杯である。口縁部は外上方にほぼ真

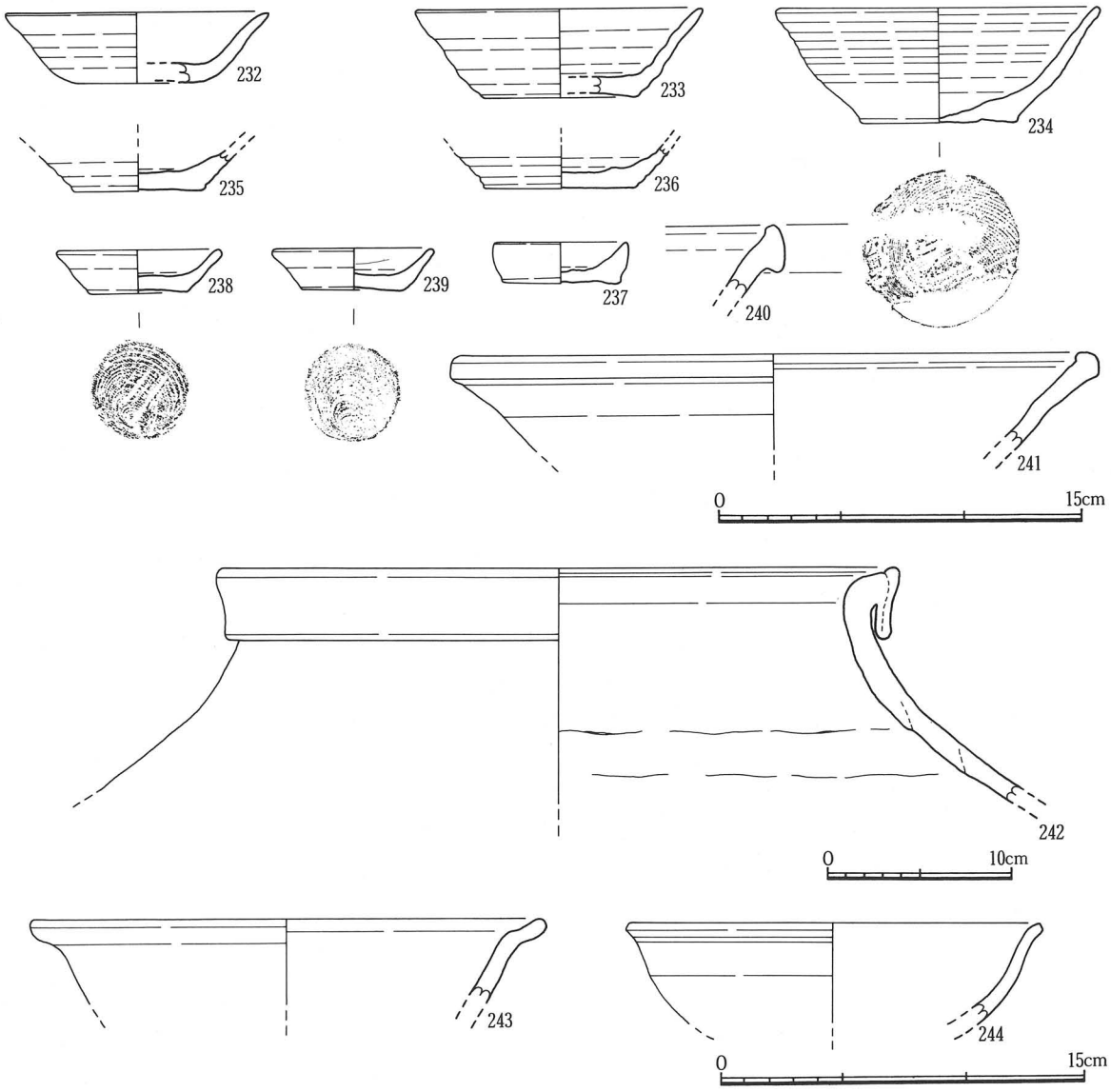


Fig. 147 ピット出土遺物実測図

直ぐ上がる。底部外面は回転糸切り底で，234には板状圧痕が残る。口縁部は回転ナデ調整で，232の内面は特に丁寧である。体部外面は未調整のものが多い。237～239は小皿で，237は口縁部をつまみ上げて造っている。238と239の口縁部は斜め上方に短く上がり，端部を丸く仕上げている。底部外面は回転糸切り底で，238には板状圧痕が残る。(P－201から232，P－202から233，P－203から234，P－204から235，P－205から236，P－206から237，P－207から238，P－208から239がそれぞれ出土している。)

東播系須恵器（Fig.147－240・241）

2点ともこね鉢で，口縁部は斜め上方に上がり，口縁端部を丸く肥厚する。内面にはナデ調整，口縁部から外面には回転ナデ調整の痕が残る。(P－209から240，P－210から241が出土している。)

常滑（Fig.147－242）

大甕で口径は37.4cmである。外反気味に内傾して上がる頸部から口縁部はほぼ真上に上がり，大きく屈曲し，所謂N字口縁をなす。口縁部には回転ナデ調整，他はナデ調整が施される。(P－205)

青磁（Fig.147－243）

小形の鉢とみられ，外上方に上がる体部から口縁部は大きく外傾し，端部は丸く仕上げられる。器面はハダ荒れが著しい。(P－211)

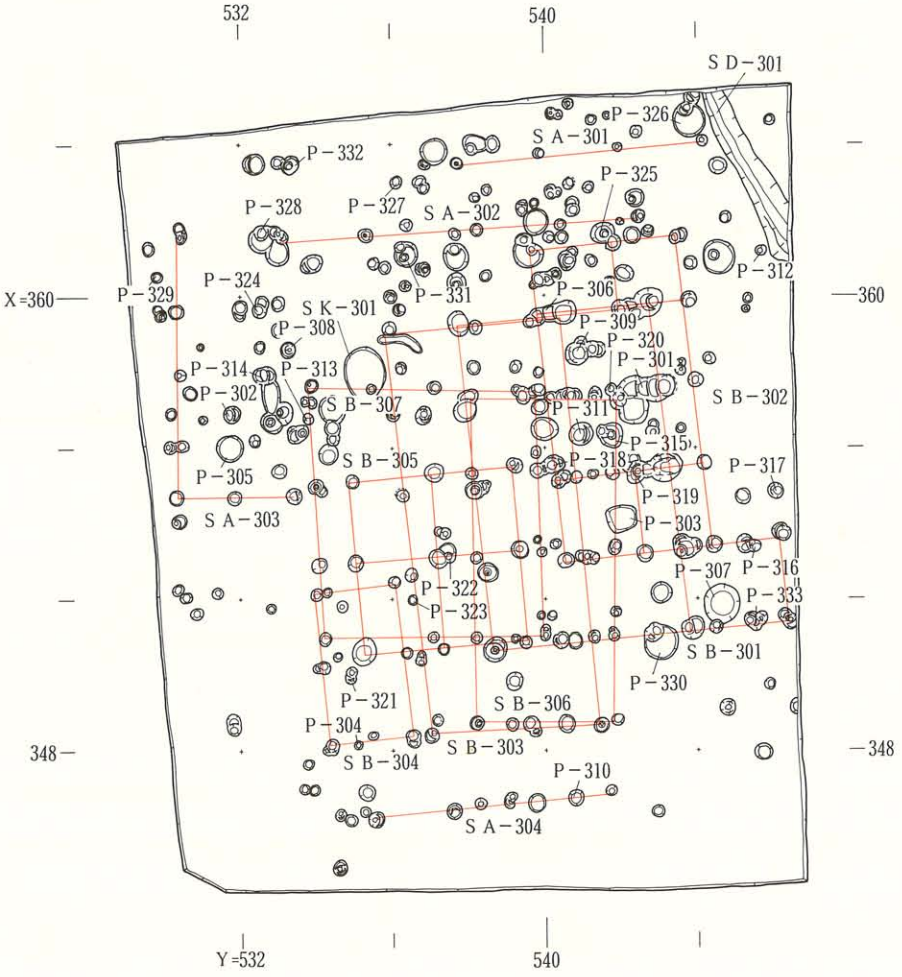


Fig. 148　C区遺構平面図(S=1：200)

白磁（Fig.147－244）

碗で，口縁部は内湾気味に上がり，端部で小さく外傾する。器面には灰白色釉を施釉する。(P－212)

(3) C区

中世の掘立柱建物跡を中心に検出した。

A 掘立柱建物跡

SB－301

調査区中央部東よりで検出した梁間2間（5.00m），桁行4間（8.70m）と大形の南北棟建物で，南側柱南から1間目に東へ1間の張出が付く。SB－302・303などと重なる。棟方向はN－6°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.00～3.00m，桁行（南北）が2.00～2.30mで，張出幅が2.70mと全般に長くなっている。柱穴は径50～60cmの円形で，柱径は残存する柱根から20cm前後とみられる。なお，柱根は南西隅の柱穴（89），東側柱南から2間目の柱穴（88），西側柱南から2間目の柱穴（90）に残存していた。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は柱根を含め21点が復元できた。

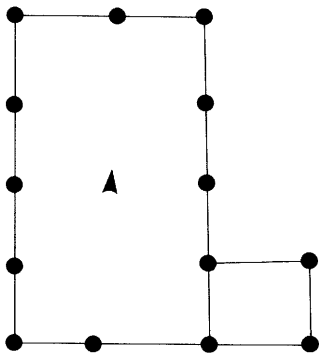


Fig. 149 S B－301

出土遺物

土師質土器（Fig.156－4～20）

4～9が杯で，4のみが原形を復元することができた。4は，口縁部が平らな底部からほぼ真直ぐ外上方に上がり，端部は丸く仕上げている。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整で，体部外面は未調整となっている。他の杯は底部の破片で，底部外面は回転糸切り底になり，内面は回転ナデ調整，外面は未調整となっている。10～20は小皿で，口縁部は外上方に短く上がり，端部を丸く仕上げるものと細く仕上げるものがある。底部外面は回転糸切り底で，13と16には板状圧痕が残る。口縁部は回転ナデ調整で，内底面に後でナデ調整を加えるものが多い。

土製品（Fig.156－21）

紡錘形の土錘で，長さ5.2cm，幅1.4cm，重さ7.3g，孔径は0.47cmである。

木製品（Fig.160・161－87～89）

すべて柱根で，基部には鑿で削った痕が明瞭に残る。87は残存長80.2cm，最大幅23.2cm，88は残存長58.7cm，最大幅21.6cm，89は残存長47.9cm，最大幅22.0cmである。樹種は3点ともヒノキである。

SB－302

調査区中央部東よりで検出した梁間2間（3.90m），桁行4間（8.20m）の南北棟建物で，南と北からそれぞれ1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－301・303と重なる。棟方向はN－7°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.80mと2.10m，桁行（南北）が南から2.10m，2.20m，2.10m，1.80mである。柱穴は径40cmの円形で，柱径は20cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

石製品（Fig.156－22）

砥石で2面に使用痕が残り，内1面には溝状の使用痕が残る。石材は泥岩とみられる。

SB－303

調査区中央部で検出した梁間2間（4.40～4.60m），桁行5間（10.70～10.80m）とやや歪みのある細長い南北棟建物で，北東隅の柱穴がSB－301の北妻真中の柱穴と重複する。SB－304以外の建物と重なる。棟方向はN－7°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.70～2.70m，桁行（南北）が1.90～2.30mと区々である。柱穴は径25～35cmの円形で，残存している柱根から柱径は15cm前後ではないかとみられる。なお，柱根（90）は南東隅の柱穴に残存していた。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は柱根を含め3点が復元できた。

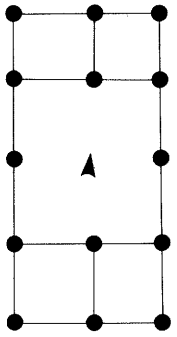


Fig. 150　S B－302

出土遺物

土師質土器（Fig.156－23・24）

2点とも小皿で，口縁部は斜め外上方に短く上がる。底部外面は回転糸切り底である。他の調整は器面が摩耗しており不明である。

木製品（Fig.161－90）

柱根で，基部を中心に鑿で削った痕が残る。残存長57.7cm，最大幅は14.0cmである。樹種はヒノキである。

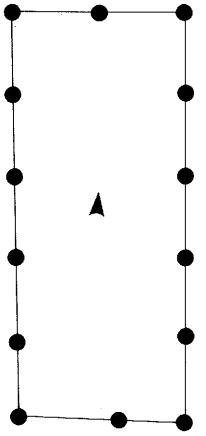


Fig. 151　S B－303

SB－304

調査区南東部で検出した梁間1間（2.20m），桁行2間（4.00m）の南北棟建物である。SB－305･307と重なる。棟方向はN－7°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.20m，桁行（南北）が1.80～2.20mである。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は1点が復元できた。

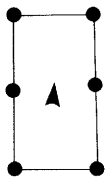


Fig. 152　S B－304

出土遺物

土師質土器（Fig.156－25）

小皿である。口縁部は平らな底部から斜め上方に短く上がる。底部外面は回転糸切り底で板状圧痕が残り，口縁部と内面は回転ナデ調整で，内底面は後でナデ調整を加える。

SB－305

調査区南東部で検出した梁間2間（4.20m），桁行2間（4.50m）の総柱南北棟建物である。SB－302以外の建物と重なる。棟方向はN－7°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.10m等間隔，桁行（南北）が2.20mと2.40mである。柱穴は径30～60cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は1点が復元できた。

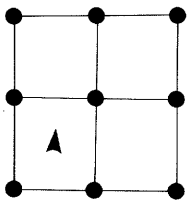


Fig. 153　S B－305

出土遺物

土師質土器（Fig.156－26）

小皿である。口縁部は平らな底部から外上方に短く上がり，端部は丸く仕上げられる。底部外面は回転糸切り底で，内底面にはナデ調整が施される。

SB－306

調査区中央部で検出した梁間2間（3.60～3.80m），桁行5間（8.50～8.70m）とやや歪みのある南北棟建物である。SB－304以外の建物と重なる。棟方向はN－2°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が1.40～2.20m，桁行（南北）が2.00～2.40mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は2点が復元できた。

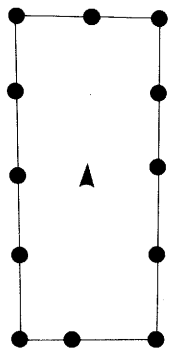


Fig. 154　S B－306

出土遺物

土師質土器（Fig.156－27）

小皿である。口縁部は平らな底部から内湾気味に短く上がり，端部は細く仕上げられる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。他の調整は器面が摩耗しており不明である。

瀬戸・美濃系（Fig.156－28）

おろし皿であり，口縁部は欠損する。底部外面は回転糸切り底で，内面には目の粗い条線が格子目状に施される。

SB－307

調査区西部で検出した梁間2間（5.70～6.00m），桁行3間（6.50～6.60m）とやや歪みのある南北棟建物である。SB－302以外の建物と重なる。棟方向はN－4°－Wである。柱間寸法は梁間（東西）が2.70～3.30m，桁行（南北）が1.90～2.60mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。なお，南東隅の柱穴から炭化した木（91）が出土している。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は柱根を含め2点が復元できた。

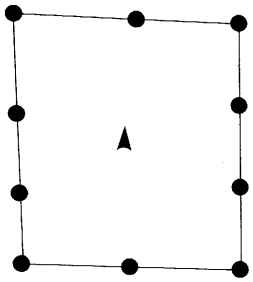


Fig. 155　S B－307

出土遺物

土師質土器（Fig.156－29）

杯で，体部は平らな底部からやや内湾気味に上がり，口縁部で外上方を向く。底部外面は回転糸切り底である。他の調整は器面が摩耗しており不明である。

木製品（Fig.161－91）

杭状のもので，基部を尖らせ，焼けたとみられ炭化している。径が細いことから柱の添え木等ではないかと考えられる。残存長36.6cm，最大幅は5.3cmである。樹種はヒノキとみられる。

B 塀跡及び柵列

SA－301

調査区北部で検出した東西塀（N－85°－W）である。建物の北側に位置する。3間分（6.40m）を検出し，柱間は2.00mと2.20mである。柱穴は径約25cmの円形で，柱径は約10cmとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。復元できた遺物はなかった。

SA－302

調査区北部で検出した東西塀（N－87°－W）である。建物の北隣に位置する。4間分（9.30m）を検出し，柱間は2.00m，2.20m，2.90mである。柱穴は径約30cmの円形で，残存していた柱根から柱径は10cm前後ではないかとみられる。なお，柱根（92）は西から2間目の柱穴に残存していた。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。復元できた遺物は柱根以外になかった。

出土遺物

木製品（Fig.161－92）

柱根で，基部に鑿で削った痕が残る。残存長27.3cm，最大幅は8.8cmである。樹種はヒノキとみられる。

SA－303

調査区西部で検出したL字形の塀である。建物の西側に位置する。6間分（9.95m）を検出し，柱間は1.50～2.00mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は3点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.156－30～32）

30は杯で，体部から口縁部にかけて内湾気味に上がり，端部は丸く仕上げている。底部外面は回転糸切り底で板状圧痕が残り，口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施す。体部外面は未調整である。31・32は小皿で，2点とも口縁部は比較的長い。底部外面は回転糸切り底で，31の底部は切り高台風となっている。口縁部は回転ナデ調整で，31の内底面にはナデ調整を加えている。

SA－304

調査区南部で検出した東西塀（N－84°－W）である。建物の南側に位置する。3間分（6.15m）を検出し，柱間は西から2.10m，2.15m，1.90mと区々である。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。遺物は5点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.156－33～37）

33～35は杯である。34は口縁部が欠損するが，33とほぼ同形態を呈しているとみられ，口縁部は体部から角度を変えて上がる。底部外面は3点とも回転糸切り底である。36・37は小皿で，口縁部

は36が外上方，37が斜め上方に短く上がる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。

C 土坑

SK−301

調査区中央部北西よりで検出した楕円形土坑で，SB−301の北西側に位置する。長径1.33m，短径1.08m，深さは3cmと浅く，底面にはピット1個が掘り込まれていた。長軸方向はほぼ真北を向く。

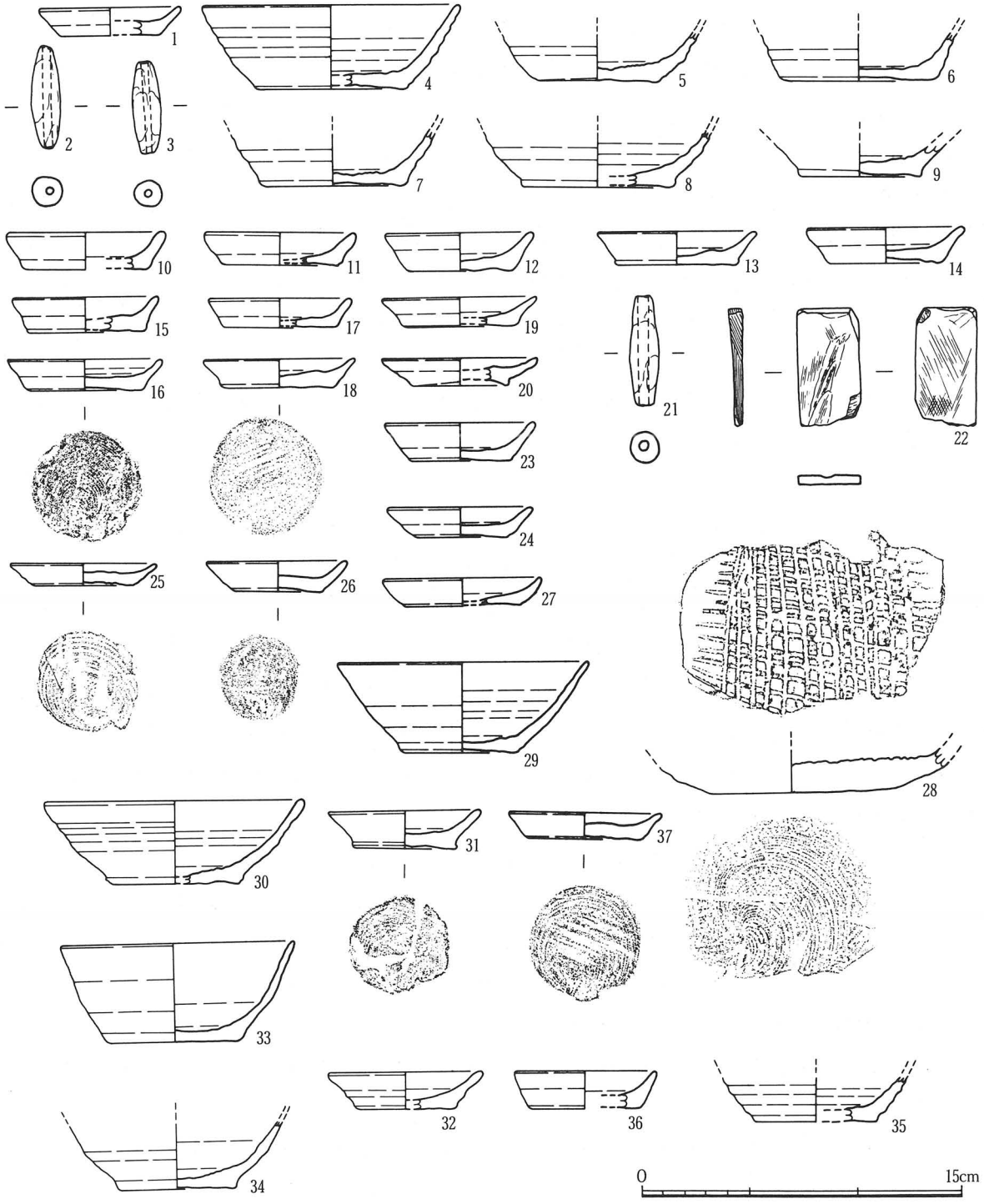


Fig. 156 掘立建物跡，塀跡出土遺物実測図

埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを若干含むものであった。復元できた遺物はない。

D 溝跡

SD−301

調査区北東部で検出した南北溝で，建物の東側に位置する。溝はさらに南北に延びる。幅60～90cm，深さは20～27cmで，南に向って傾斜しており，約4.5mを検出した。断面はU字形を呈す。埋土は暗灰褐色粘質土に黄色砂質土粒及び小ブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はなかった。

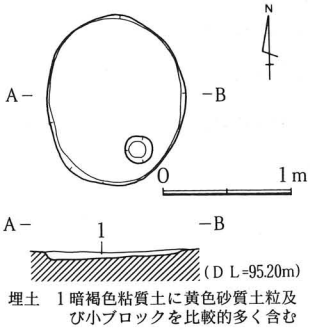


Fig. 157 ＳＫ−301

E ピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられ，柱根が残存していた柱穴（P−333）もあった。掘方は，大半が円形で径20～60cm，深さは10～50cmで，径25～35cm，深さ40cm前後のものが多い。埋土は暗灰褐色粘質土を主とし検出面の黄色砂質土の土粒及び小ブロックを若干含むものであった。また，岩井口遺跡で見られたような径70cm前後のピットは調査区東側で散見できる程度でほとんど見られない。

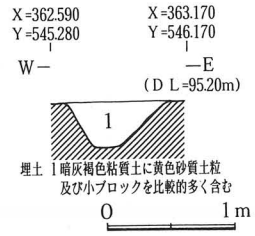


Fig. 158 ＳＤ−301 セクション図

出土遺物

土師質土器（Fig.159−38～82）

38～58は杯である。口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がるものと，やや内湾気味に上がるものとがある。底部外面はすべて回転糸切り底で，38・39・41・43～45・48・49・51・53・58には板状圧痕が残る。44・45の底部は切り高台風になっている。調整は口縁部から内面にかけて回転ナデ調整，内底面にナデ調整を加え，体部外面が未調整なものが多い。39は内外面とも回転ナデ調整を施している。59～82は小皿で形態的に大きな違いはみられない。口縁部は上外方に短く上がり，底部外面には回転糸切り底となり，59・61・63・65・66・69・74～77・82には板状圧痕が残る。口径6.0～7.4cm，器高1.3～2.1cm，底径は4.2～5.8cmである。（P−301から38・42・43・50・70・71，P−302から39，P−303から40・57・65・66，P−304から41，P−305から44・56・75，P−306から45，P−307から46・59・60，P−308から47，P−309から48・67，P−310から49，P−311から51・52，P−312から53，P−313から54，P−314から55・76，P−315から58・69，P−316から61，P−317から62，P−318から63，P−319から64，P−320から68，P−321から72，P−322から73，P−323から74，P−24から77，P−325から78，P−326から79，P−327から80，P−328から81，P−329から82がそれぞれ出土している。）

東播系須恵器（Fig.159−83）

こね鉢の口縁部で，やや肥厚している。内外面には回転ナデ調整が施される。（P−330）

青磁（Fig.159−84）

皿で，縁錆がみられる。口縁部は外上方に短く上がる。器面には灰緑色釉を施釉する。（P−331）

白磁（Fig.159−85）

皿で，口縁部は欠損する。器面には灰白色釉を施釉する。（P−332）

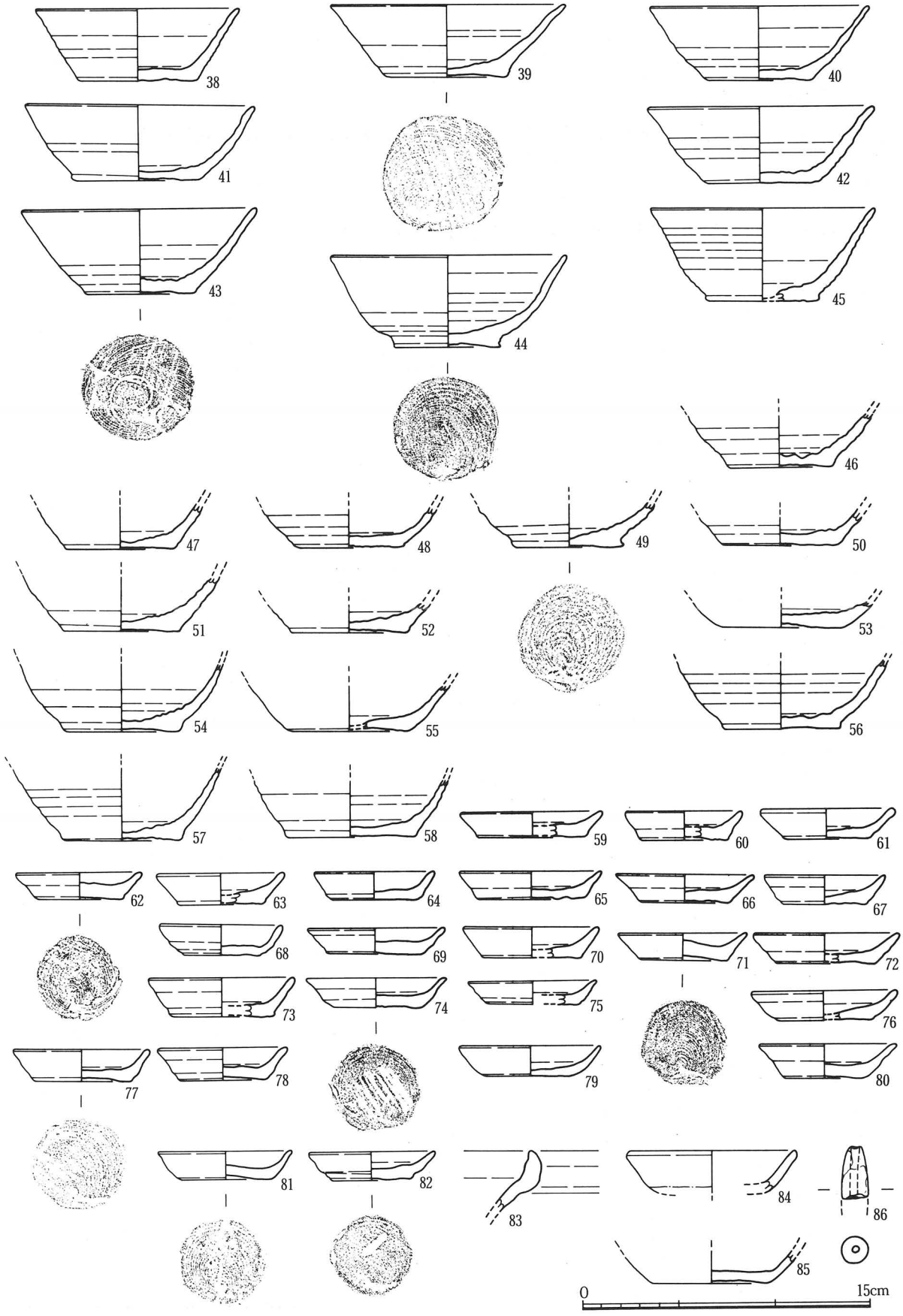


Fig. 159 ピット出土遺物実測図

土製品（Fig.159－86）

紡錘形の土錘で半分が欠損する。全幅1.4cm，孔径は0.4cmである。（P－327）

木製品（Fig.161－93）

柱根であるが，腐食し，調整痕は残っていない。残存長36.4cm，最大幅は10.2cmである。（P－333）

（4）D区

土坑1基とピット6個を検出した。遺物は全く出土していない。

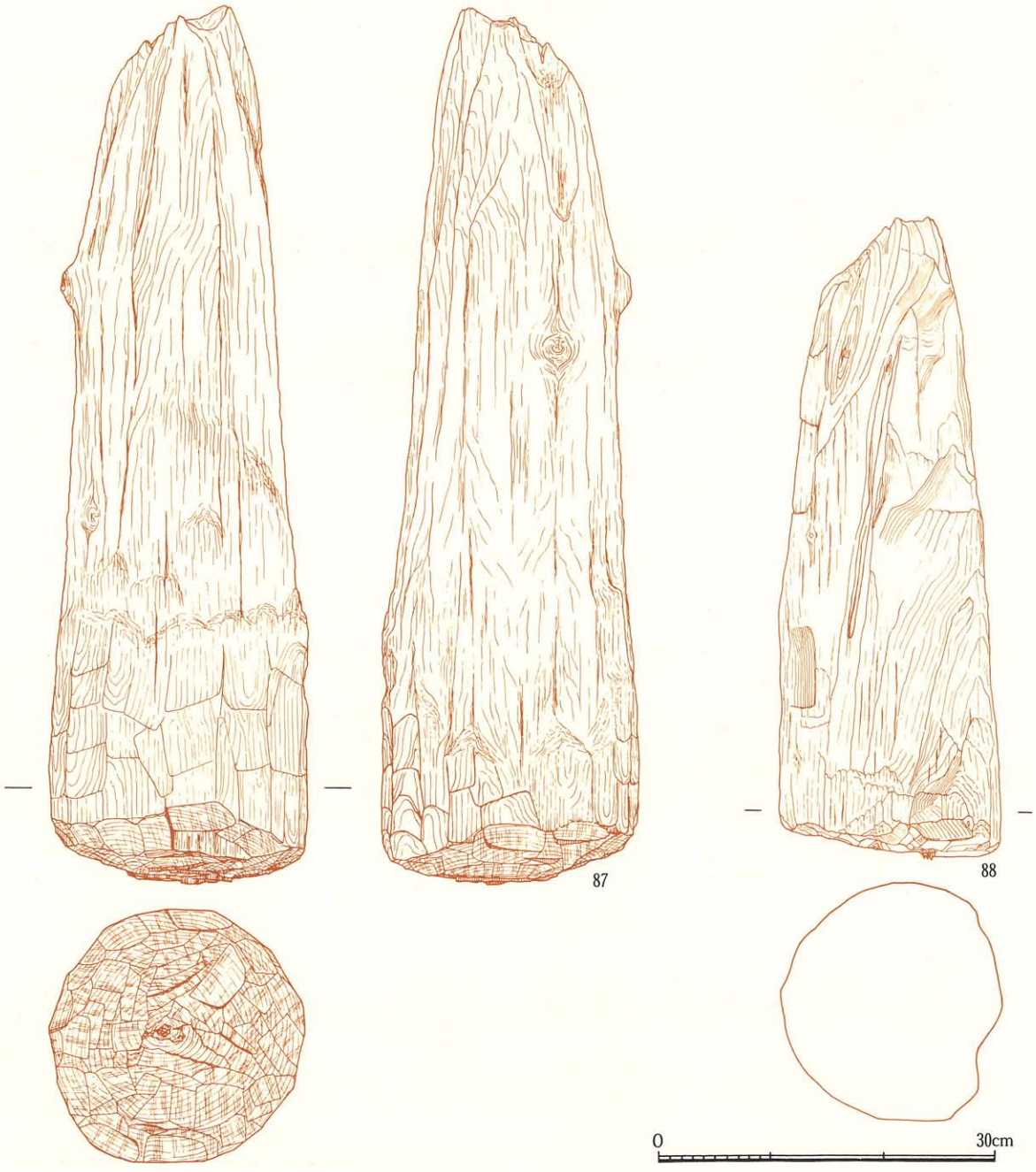


Fig. 160　柱根実測図1

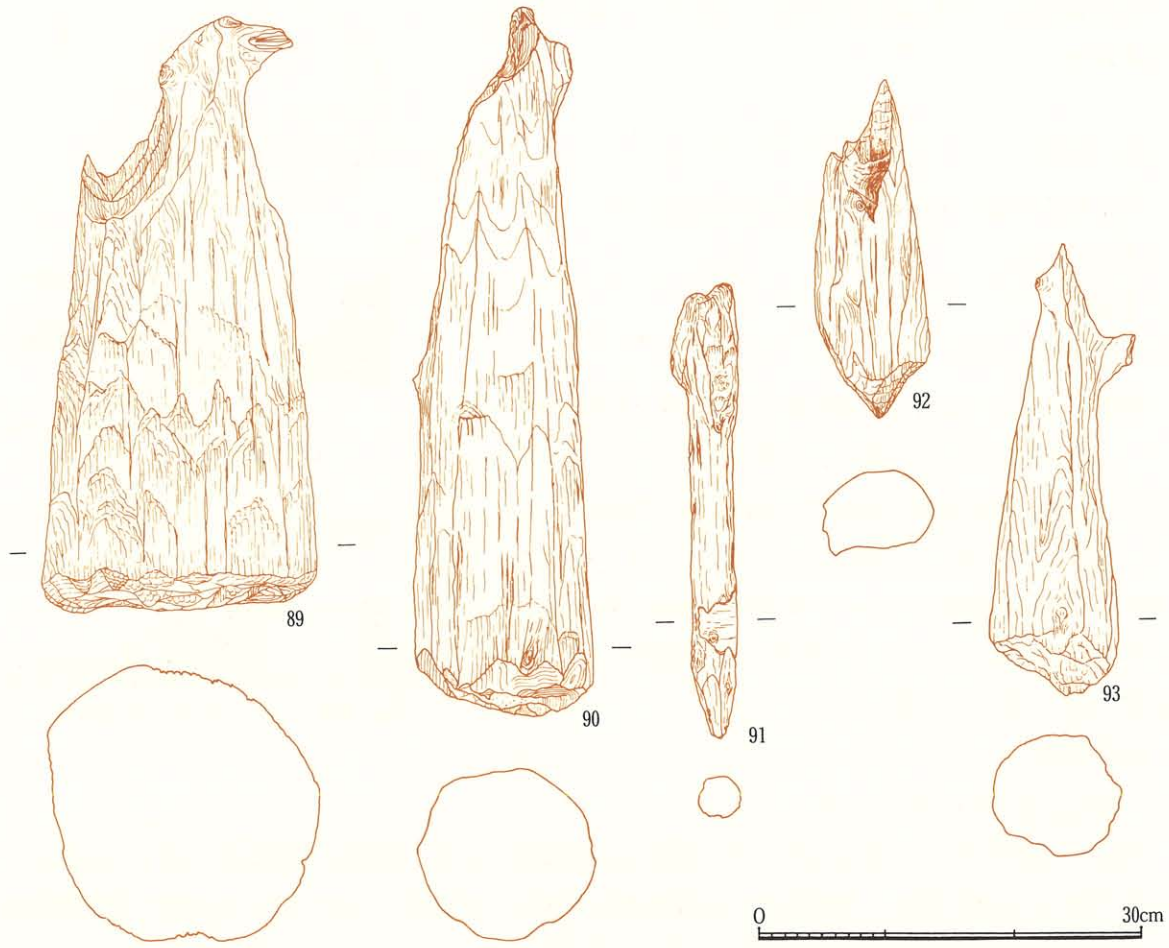


Fig. 161 柱根実測図2

A 土坑

SK−401

調査区南西部で検出した不整円形土坑である。長径1.76m，短径1.53m，深さは75cmで，断面は擂鉢状をなす。長軸方向はほぼ真東を向く。埋土は黒ボクを主体とし2層に分層される。上層は暗

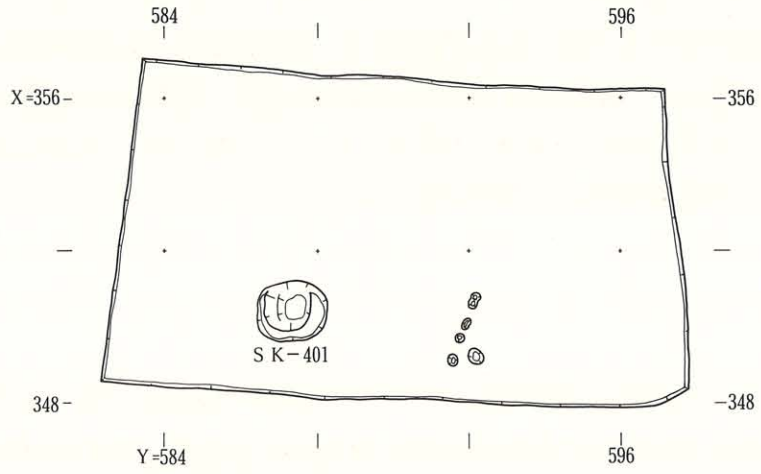


Fig. 162 D区遺構平面図(S=1：200)

黒褐色粘質土，下層は暗黒色粘質土であり，下層下半から湧水があった。

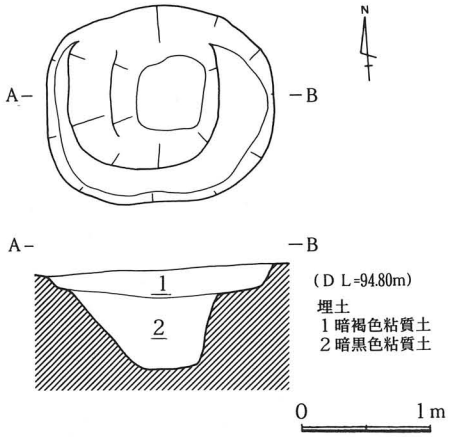


Fig. 163　S K－401

（5）E区

弥生時代の溝と中世の建物跡などを検出した。

①弥生時代

A 溝跡

SD－501（Fig.164）

調査区中央部で検出した南北溝で，調査区を斜めに横切っている。溝はさらに北に延び，主軸方向はN－55°－Eである。幅40～70cm，深さは30～40cmで，北に向って傾斜しており，約28.5mを検出した。断面は逆三角形を呈す。埋土は基本的には黒色粘質土であり，部分的に褐色粘質土ないし赤黄色火山灰土のブロックを含む箇所も認められた。遺物は弥生土器10点が復元できた。

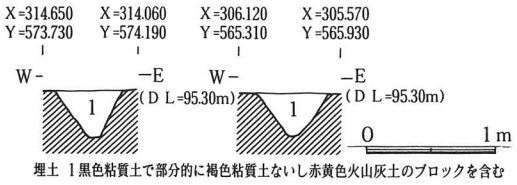


Fig. 164　S D－501 セクション図

出土遺物

弥生土器（Fig.165－2～11）

2は唯一の壷である。底部は平らで，胴部はほぼ球形となり，頸部は外傾気味に直立し口縁部で大きく開く。A類に属す。胴部外面には叩きの後下半にヘラ磨き，上半にはハケ調整，口頸部外面はハケ調整の後部分的にヘラ磨きが施される。胴部内面はハケ調整の後にナデ調整を施し，内底面にはヘラ磨きが見られる。口縁部内面にはハケ調整の後ヘラ磨きを施している。3～5は甕で，口縁部がくの字形をなすもので，A類に属す。外面には叩きの後にハケ調整，内面にはハケ調整の後にナデ調整を施している。5の外面には叩目は見られない。また，口縁部はヨコナデ調整が施される。6・7は甑で，尖り気味の底部に1個の円孔を穿つ。調整技法は甕と全く同じである。7の内面のハケ目は細かく丁寧であり，下胴部にはナデ調整を加えている。8～11は鉢で，8・9は口径が17～20cmと大きく，底部も比較的深いもので，A－Ⅱ類に属す。外面に叩きの後ハケ調整，内面はハケ調整の後ナデ調整を施している。10は小形の鉢で，口縁部は丸い底部から内湾気味に上がる。C－Ⅲ類に属す。外面はタテ方向の叩きの後にナデ調整を施し，内面はハケ調整の後ヘラ磨きを放射状に施している。11は口縁部が体部から外反するもので，E類に属す。外面には叩目，内面にはハケ目が残り，平らな底部外面はナデ調整が施される。

②中世

A 掘立柱建物跡

SB－501

調査区中央部東よりで検出した梁間2間（4.20m），桁行3間（6.00m）の身舎に3面庇付きの南北4間（7.00m），東西4間（8.00m）の東西棟建物で，身舎東から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－501の南側に位置する。棟方向はN－88°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が2.10m等間隔，

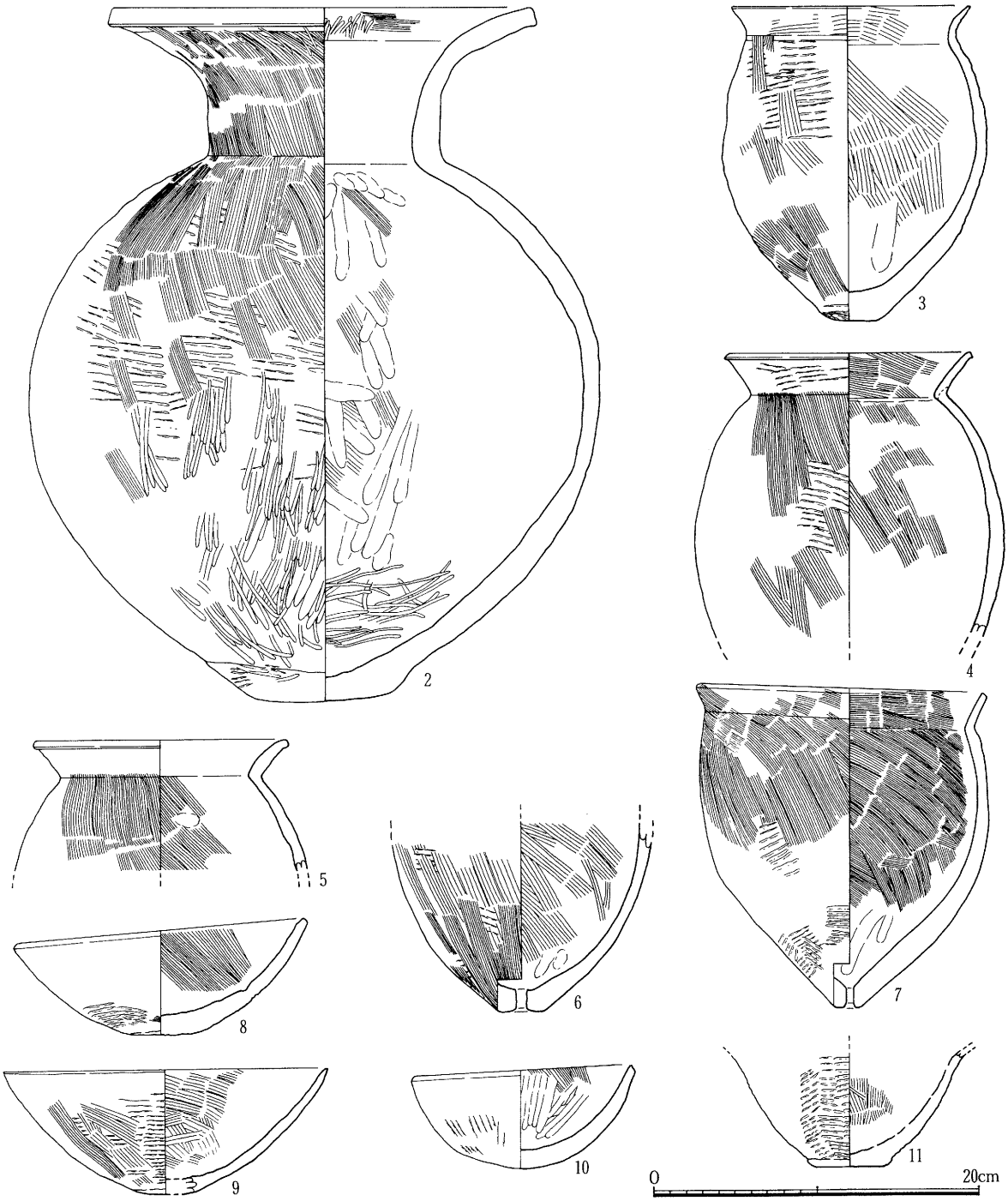


Fig. 165 ＳＤ－501 出土遺物実測図

桁行（東西）が2.00m等間隔で，北庇幅は1.50m，東庇幅は2.00m，南庇幅は1.30mとなっている。柱穴は，身舎がやや大きく径45～50cmの円形で，柱径は25cm前後，庇部分は径35～45cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。なお，炭化した杭が身舎の南側柱西から3間目の柱穴から出土している。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。遺物は前述の杭を含め10点が復元できた。

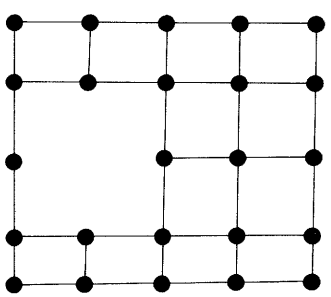


Fig. 166 ＳＢ－501

出土遺物

土師質土器（Fig.172－12～19）

12～18は杯で，全般に器壁が厚く，底部外面は回転糸切り底となっている。口縁部は体部からほぼ直線的に外上方に上がり，端部を丸く仕上げている。内外面には比較的丁寧な回転ナデ調整が施される。14～17は全く同形態を呈す。18は小皿である。口縁部は外上方に短く上がり，端部は細く仕上げられる。体部外面には煤が付着する。19は羽釜で，胴部下半が欠損する。胴部は内湾気味に上がり，口縁部でさらに内側を向く。口縁端部は内傾する平面をなす。口縁部外面には3段の稜となっている。鍔は幅2.3cmでほぼ水平に付く。胴部外面にはヨコ方向のヘラ削り，内面にはヨコ方向のハケ調整，口縁部にはヨコナデ調整が施される。また，外面には煤が付着する。

青磁（Fig.172－20）

台付きの皿である。底部は削り出し高台で，体部は短く外上方に上がり，口縁部で外反する。口縁端部は丸く仕上げられる。高台外面から内面にかけて青緑色釉を施釉した後で，見込は釉剝ぎを行う。

木製品（Fig.177－48）

残存長35.9cm，残存幅4.4cmの杭で，火を受けたとみられ炭化している。柱の添え木等ではなかろうか。樹種はヒノキとみられる。

SB－502

調査区北東部で検出した梁間2間（3.30m），桁行2間（3.40～3.80m）とやや歪みのある総柱東西棟建物である。SB－501の北側に位置する。棟方向はN－84°－Wである。柱間寸法は梁間（南北）が1.50m，1.80mで，桁行（東西）が1.60～2.00mである。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はなかった。

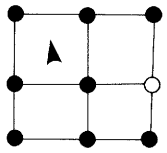


Fig. 167　S B－502

SB－503

調査区南東部で検出した梁間1間（2.60m），桁行1間（3.10m）の東西棟建物である。SB－501の南側に位置する。棟方向はN－85°－Wである。柱穴は径35～45cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。遺物は1点が復元できた。

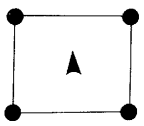


Fig. 168　S B－503

出土遺物

土師質土器（Fig.172－21）

杯で口縁部が欠損する。体部は内湾気味に上がっている。底部外面は回転糸切り底で，内外面は回転ナデ調整が施され，内底面には後でナデ調整を加える。また，内面には煤が付着する。

SB－504

調査区中央部で検出した梁間1間（1.60m），桁行1間（2.00m）の南北棟建物である。SB－501の東側に位置する。棟方向はN－1°－Eである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はない。

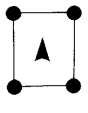


Fig. 169　S B－504

SB－505

調査区北部で検出した梁間2間（3.50m），桁行2間（4.00m）の東西棟建物である。SB－501の北西側に位置する。棟方向はN－86°－Eである。柱間寸法は梁間（南北）が1.70～1.90mで，桁行（東西）が1.60～2.40mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はなかった。

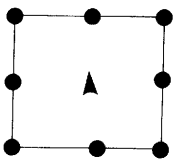


Fig. 170　S B－505

SB－506

調査区北部で検出した梁間2間（3.60m），桁行2間（4.30m）の総柱東西棟建物で，南西隅の柱穴1個が未検出である。SB－501の北西側に位置する。棟方向はほぼ真東を向く。柱間寸法は梁間（南北）が1.80mで，桁行（東西）が1.80～2.50mである。柱穴は径30～40cmの円形で，残存する柱根から柱径は15cm前後ではないかとみられる。なお，柱根（49）は間仕切りの柱穴に残存していた。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できたのは柱根1点であった。

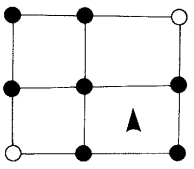


Fig. 171　S B－506

出土遺物

木製品（Fig.177－49）

柱根で，腐食が進んでいる。残存長19.9cm，残存幅は13.3cmである。

B 塀跡及び柵列

SA－501

調査区北東部で検出したL字形の塀である。SB－501の北東側に位置し，建物に取り付いていたものとみられる。5間分（8.50m）を検出し，柱間は1.50mと2.00mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの黒褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

SA－502

調査区中央部で検出した南北塀（N－3°－E）である。SB－501の西側に位置する。4間分（8.90m）を検出し，柱間は1.90～2.50mと区々である。柱穴は径20～30cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はない。

SA－503

調査区北部で検出した東西塀（N－84°－E）である。SB－501の北西側に位置する。4間分（8.00m）を検出し，柱間は1.70～2.30mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できた遺物はない。

SA－504

調査区中央部で検出した南北塀（N－2°－E）である。SB－501の西側に位置する。3間分（6.40m）を検出し，柱間は1.80mと2.30mである。柱穴は径30～40cmの円形で，残存していた柱根から柱径